魔女たちのたそがれ

赤川次郎



角川文庫 6441

目次

プロローグ 五
1 依子（よりこ） 一一
2 斧（おの） 二〇
3 消（き）えた少女 三
4 葬儀（そうぎ）の刃（やいば） 四四
5 消（き）えた女 五五
6 少女 七
7 多江（たえ） 公
8 雨 八
9 幻（まぼろし）の都会（とかい） 一〇
10 惨殺（ざんさつ） 三〇
11 〈谷〉へ 三四
12 影（かげ）の中 四四

13 夜の校舎 一五七
14 消えた刑事 一七二
15 三つの殺人 一八一
16 消えた依子 二〇〇
17 再び山中へ 二一〇
18 すれ違う顔 二三三
19 谷へ入る 二三九
20 白い影を追う 二四〇
21 恐怖の記憶 二五二
22 危険な叫び 二六〇
23 炎の中に 二七四
24 平和 二八六

解説 宗田理 三〇〇

プロローグ

ともかく、目の回るような忙しさだった。

その朝は、やたら、風邪で休む者が多くて、その分の仕事が、全部、残った者にかぶさって来た。

これがたとえば、従業員数千人という大企業の中で、休みが五人というのなら、どうということもあるまいが、何しろ津田の勤めている小さな雑貨の卸売会社は、十五人しか社員がいない。しかも、今年七十八歳の社長を含めて、その人数である。

その十五人の中の五人が休んでしまったのだから、いかに影響が大きいか、想像もつこうというものだ。

九時のチャイムが鳴るのにも、まるで気付かなかった。八時五十分ごろから、次々に鳴る電話に出なくてはならなかったのだ。

もっとも、これがいつもの状態で、ただ、電話を取る手が、まるで足りなかった、というだけなのだが。

あっという間に昼が近くなっていた。——これは誇張でも何でもない。津田の実感であった。

入社して、既に五年たつが、こんなに忙しい思いをしたのは、初めてだった。二十八歳という若さで、何とか乗り切った——というのは、ちょっとオーバーな言い方になるかもしれないが、ともかく、そう言いたくもなる状況だったのである。

あと十分で昼休みだ。津田は、次々に伝票を整理しながら、一秒足らずの間に、チラリと壁の時計に目を走らせた。

畜生、昼のチャイムが鳴ったら、何があろうと——たとえ会社中の電話が鳴り響いてようと、会社から飛び出してやるぞ。

電話をかけて来る方も、同じような気分なのかもしれない。あと五分で十二時、というあたりから、またあちこちで鳴り出した。

自分で一つ取ると、他から、

「津田さん、出てください！」

と、声がかかる。

そっちへ出れば、まだ聞き終らない内に、

「津田さん！　それ終ったら、こっちに出てね！」

と声がかかる。

両手両足で同時に受話器を持って、しゃべれたら、と津田は思った。いや、いっそ、電話なんてものが、この世から無くなっちまえばいいのに！

まだ一本、待っている電話がある、というのに、もう一つ、

「津田さん、電話」
と、女の子が大声で言った。
やっと、一つを切って、
「どこから？」
と訊きながら、待たせてあった一本へ手を伸ばす。
「分りません」
と、その女の子は肩をすくめて、「女の人ですよ」
「待たせといて。——はい、津田でございます。——あ、どうも、いつもお世話になっております」
得意先からの電話だ。津田は、息を切らしているのを、極力押えながら、急いでメモ用紙を引き寄せた。
その電話を切らない内に、チャイムが鳴った。
「——はい、確かに承りました。明日中には必ず。——よろしくお願いいたします。
——どうもありがとうございました」
電話を切って、津田は椅子にへたり込んだ。——参った！
もう、ほとんどみんな、食事に出てしまった。出遅れたな、と津田は思った。
立ち上ると、ちょっとめまいさえする。昼は少し高くても、栄養のあるものを食おう。いつものソバじゃ、とてももたない。

ここは貸ビルの五階だ。——会社を出ると、エレベーターの前で、深野珠江が待っていてくれた。

「何だ、待っててくれたのか」

「一人じゃ、寂しいでしょ」

と、珠江は笑った。

紺の、野暮ったい事務服姿でも、珠江の色っぽい雰囲気は壊れていない。——この社唯一の、魅力的な女性である。

そして、津田は独身の二十八歳だ。珠江と、なるべくしてなったのも、無理からぬことで、まあ、そろそろ年貢の納めどきかな、などと津田も考えている。

「しかし、今日はひどい目にあったな」

エレベーターが上って来るのを待ちながら、津田は言った。

「忙しかったわね。午後もこんな風かしら？」

「やめてくれ」

津田は大げさに言った。「午後のことなんか考えたくもないよ！」

珠江は軽く声を立てて笑った。

「——あの電話、誰からだったの？」

「どの電話？」

「ほら、チャイムが鳴る前に、女の人からだって——」

「しまった！」
津田は指を鳴らした。「出るのを忘れてた！」
「呆れた。もう切れてんじゃない？」
「ちょっと待っててくれ」
津田は会社の中へと駆け戻った。——どれだ？
外したままになった電話が一つだけあった。津田は、駆け寄って、受話器を取った。
「もしもし、——お待たせしました。——もしもし」
何も聞こえない。しかし、切れてはいないようだ。向うも、待ちくたびれて、受話器を置いて、離れているのか。
「もしもし。——もしもし」
出ないのか。まあいい、何か大切な用なら、またかけて来るさ。
受話器を耳から離しかけたとき、
「津田さん」
という声が、電話から、飛び出して来た。
「もしもし？」
「津田さん……」
いやに遠い声だ。いや、弱々しい声なのかもしれない。女の声だが。
「どなたですか？」

と津田は訊き返した。「――え？――何ですって？――もしもし！――もしもし！」
珠江が入って来て、
「どうしたの？」
と訊いた。
津田は、受話器を、まるで珍しい物か何かのように、目の前に持って来て、じっと眺めていたのだ。
「どうかした？」
と、重ねて訊かれ、津田は、
「いや、別に」
と、あわてて首を振り、電話を切った。「さあ、行こうか」
――ちょうどエレベーターが来ていた。
一階へ向って、静かに降り始める。
「今日は何を食べる？」
と珠江が言った。
「何でもいいよ」
と、津田は、目をそらしながら、言った。
――あの電話。あの声。
誰だろう。「津田さん」と呼んだ、あの声は……。

津田は、今でも、信じられなかった。聞き違いだ。きっとそうだ。
その弱々しい女の声は、こう言ったように、津田には聞こえたのだ。
「助けて……殺される」
と――。

1　依子

「依子！」
と、叫んで、津田はベッドで飛び起きた。
「何よ、びっくりするじゃない！」
同じベッドの中で、ウトウトしかけていた珠江が、仰天して目を見開きながら、あわてて毛布を裸の胸に引っ張り上げた。
「いや――ごめん」
津田は、頭をかきながら、言って、それから手を伸ばし、部屋の明りを点けた。
ここは、津田と珠江がよく使うホテルで、妙な仕掛だの、ビデオだのはないが、なかなか落ちつける所である。
ベッドだけは、特大、というところで、いくら二人して転げ回っても、まず落ちる心配はない。

もう十二時を回っている。むろん夜中である。——ホテルへ入るのが十時になってしまったので、仕方のない時間だった。

何しろ、朝からの忙しさは、五時を過ぎてもまだ続き、結局、ほとんどの社員が、九時近くまで残業するはめになった。

そうなれば、帰りには、疲労回復に一杯、ということになる。その後、津田と珠江は、わざわざ、また疲れに来たわけである。

「こんなときに他の女の名前を呼ぶなんて、失礼よ」

と、珠江は少々おかんむりだ。

「そうじゃないんだ。やっと思い付いたんだよ」

「何を？　依子って誰よ？」

「中込依子。——僕の幼なじみだよ。中学高校とずっと一緒でね」

「へえ。初耳だわ、そんな名前」

「もう、ずいぶん会ってない。年賀状ぐらいは来てるけどね。——最後に会ったのは、たぶん、もう四、五年前じゃないかな」

「何をしてるの？」

「小学校の教師だよ。——どこか、山の中の小さな町の小学校に行った、とか聞いたな」

「その人を、どうして急に思い出したの？」

「今日の電話さ」

珠江は、ちょっとキョトンとしていたが、
「ああ、あのときの？　お昼休みの――」
と、思い出したらしく、肯いた。
「うん。あの声。どこかで聞いたことがあると思ってたけど、どうしても思い出せない。――それが今、急にパッと分ったんだ」
「どうしてあっちは名前を言わなかったの？」
ふと、津田の顔から、表情が消えた。
「助けて……殺される」
あの声は、そう言ったのだ。
「何だかおかしいわよ」
と、珠江は言って、欠伸をした。「私、眠いわ」
「うん」
と、答えてから、「――何て言った？」
「おやすみなさい、って言ったのよ」
珠江は、呆れたように言って、そのまま、すぐに寝入ってしまった。
津田は、ぼんやりと、天井を見上げていた。――一向に眠くならない。
依子。――二つ、年下だから、今、二十六歳のはずだ。
教師生活四年。もう、大分、「先生」らしくなって来たのではないか。

依子が教師になったというのは、「いかにも」という感じで、少しも意外ではなかった。つまり、昔から、津田と違って依子は、真面目な女の子だったのだ。

といって、ガリ勉型というのとは、ちょっと違う。

それほど、頭が切れるというタイプではなかったし、クラスでの成績は五、六番目だった。しかし、ともかく努力家だった。何でも一生懸命に取り組んだのである。器用でもなく、運動神経だって、お世辞にも、いいとは言えなかったが、それでも必死に何にでも取り組んで、結局、やってのけるのだった。

その点、津田はなまじ器用で、大して努力しなくても、たいていのことはこなせたから、却って、伸びなかった。

依子の粘り強さには、津田も脱帽の他はなかった。

「私は教師に向いてると思うんだ」

高校に入るとき、依子は津田にそう言ったものだ。

「だって、頭も良くないし、駆け足も遅いし、手先は無器用だし。——一番だめな子の気持が、よく分るのよ」

なるほどそうかもしれない、と津田は思った。

「ま、頑張れよ」

先輩顔をして、津田は言ったものだ。「俺はエリートビジネスマンか、外交官になって、世界中を飛び回るんだ」

「津田君、なれるわ、きっと」
と、依子は笑顔で言った。「頭いいんだものね。外交官にでもなったら、ヨーロッパに招待して。遊びに行く」
「ああ、いいとも。何なら女房にしてやるぞ！」
「やあだ！」
依子は、顔を真赤にして、恥ずかしそうに笑ったものだ……。
「依子……」
津田は呟いた。
珠江が、何かムニャムニャと呟いて、寝返りを打った。
——結局、頭の良くない依子が、ちゃんと教師になり、津田の方は……。
そして、いつしか依子は、遠く離れ、忘れられてしまった。いや、依子の方は時々、手紙やハガキをくれていたが、津田は返事も出さなかった。
それでも、きちんと年賀状は来ている。
取ってあるだろうか？　いや——たぶん、捨てちまったろう。
依子がどこの小学校にいるのか、まるで記憶がないのである。
だが——小学校の教師をしている依子が、なぜ津田の所へ電話して来たのか。そして、
「助けて……殺される」
と言ったのか。

あれは、本当に依子の声だろうか？

津田は、もしかしたら、全く別の女の声かもしれない、と思おうとしたが、それはうまくいかなかった。——思い当った瞬間、依子の声に違いない、と確信していたのである。

依子が助けを求めている。

津田は、いても立ってもいられない気持になった。——あれは、どう考えても、冗談や遊びではない。

依子に、そんな冗談を言う理由がない。

つまり、依子は本当に、「殺され」かかっているのだろう。

それなのに、俺はこんな所で……。

津田は、ベッドから出ると、急いでシャワーを浴び、服を着た。珠江は、軽く、いびきすら立てながら、眠っている。

起すこともあるまい。——津田は、ホテルを出ると、タクシーを拾って、アパートに戻った。

「中込依子。——ええ、そうです。四年前に卒業しているはずです」

翌日、津田は休みを取った。

課長は文句を言いたげだったが、構わず電話を切ってしまった。かけなくてはならない所があったのだ。

アパートに帰って、あちこち引っかき回してみたが、依子の年賀状は見当らず、彼女の母

親の所の電話番号も、どこにもメモしていなかった。父親は、依子が高校のときに亡くなっていた。

そうなると、どこでどう調べればいいか。――考えたあげく、依子の卒業した大学で、同窓会名簿を調べてもらうことにしたのである。

「――あ、どうも。――自宅の住所と電話は？――分りました。それから、今、教師をやってると思うんですが、どこの小学校か、分りますか？」

この質問はむだだった。――依子は同窓会に連絡していなかったらしい。

ともかく、母親の住む所が分った。

津田は、訪ねてみることにした。電話で、

「津田です」

と言っても、分ってくれないかもしれないと思ったからだ。

津田は、中古のカローラを走らせ、住所を頼りに、依子の母を訪ねて行った。

地図で大方の見当をつけ、その近くまで行って、交番で訊く。

捜し当てるのに、ちょっと手間取ったのは、古びた二階建の家で、どうやら、上を誰かに貸しているらしかったからだ。

表札が二つ出ていて、〈中込〉の方が、薄くかすれて、目につかなかったのである。

津田も、依子の家に遊びに行ったことはあったが、それはまだ父親が健在なころで、家もここではなかったのだ。

「――ごめん下さい」
と、玄関を入って、声をかける。
しかし、母親が出て来たら、何と言おうか。依子さんが、「殺される」と電話して来たんですが、と言うのは……。
しかし、今ごろ何の用で、突然やって来たのかと、妙に思われるだろう。
考えが決らない内に、当の母親が出て来た。――めっきり老けたな、と津田は思ったが、しかし、いかにも依子に似て、しっかりした、上品な女性だった。
「あの――」
と津田が言いかけたのを遮って、
「津田さん！」
と、目を見張った。
「憶えていて下さったんですね」
「もちろんですとも。――本当にいいところへ来て下さって」
「え？」
「お上り下さい。ともかく――」
促されて、津田は、上り込んだ。
「依子さんは……」
と、津田は、座りながら、曖昧な言い方をした。

「地方の、小さな山の中の小学校に行っておりますの。津田さん――」
と、母親は早口に言って、膝を進めた。「あの子、何か、危ない目に遭っているようなんです」
「え？」
津田は、目を見開いた。「それは、どういうことなんです？」
「よくは、分りません」
と、依子の母親は首を振った。「でも、このところ、何通か、手紙が来ていて、ともかく、その小さな町で、何か恐ろしいことが起っているようなんです」
「恐ろしいこと……」
津田はくり返した。「どんなことなんです？」
「詳しいことは、何も書いて寄こさないんです。それに――」
と、母親は首を振って、「電話をしても、何だか、そばで誰かが聞いてでもいるように、とてもよそよそしい話し方なんです」
「それは変ですね」
「津田さん。あの子の所へ行ってみて下さいませんか」
「僕がですか？」
「他に、お願いできる人はいないのです。――急がないと、とんでもないことになるかも……」

「とんでもないこと？」

「昨日、あの子の働いている小学校へ電話をしたのです」

と母親は言った。「中込依子をお願いします、と言ったのです。ところが――」

津田は、得体の知れない重苦しさで、息苦しいほどだった。

「ところが――」

と、母親は言った。「向うの人が言ったのです。『そんな先生は、おりません』と」

2 斧

あまり、快適なドライブとは言えなかった。

ともかく、山道で、カーブは多いし、道は舗装していないので、でこぼこだし。

加えて、津田の車が、あまり上等といえないせいもあった。

「車なら二時間かね」

と、駅前の交番で聞かされて、走ること、既に二時間半。――どうなってるんだ！

あんまりガタガタ揺れる道というのに、都会人たる津田は慣れていない。

えらく疲れて、小休止することにした。

車をわきへ寄せて、一息つく。何だか、体中の関節が、バラバラになりそうだった。

タバコをくわえて火を点ける。車から出て、腰を伸ばし、それから、ウーンと伸びをした。

その拍子に、口からタバコが落ちてしまった。
「畜生！」
靴でギュッと踏みつぶして、津田は少し道を歩いて行った。
山の中――本当に、両側はすぐに深い森で、たちまち暗く、夜の世界へ入って行く。
じっと耳を澄ましても、耳に入るのは、鳥の声と、風の鳴らす枝のざわめきだけだ。
凄い所に来たもんだな、依子も。
しかし、一体何があったというのだろう？
母親の不安を、単なる勘違いだと済ませることは易しい。
かけた学校が違っていたのだろうとか……。母親は、ともかくそう若くもないのだから。
しかし、あの電話の声は――あれは、津田が、自分の耳で聞いたものだ。
そして、あれが本当に依子の声なら、母親の話と合わせて、やはり、依子に、何か危険が迫っているのだとしか考えられない。
「俺だって危険は迫ってるけどな」
と、津田は独り言を言った。
何しろ、二、三日休みをくれと言った津田を、課長は、頭ごなしに怒鳴りつけたものだ。
――帰ったら、もう席がない、なんてこともありうる。
しかし、依子のことを考えると、じっとしてはいられなかった。それは、津田自身にも、不思議なくらいだった。

依子。——俺が依子を守ってやらなくちゃ。なぜか、津田は、そう思うようになっていたのである。

依子とは、恋愛関係にあったわけでもないし、もちろん珠江のように、ホテルで抱き合ったわけでもない。それでも、なぜか、気にかかるのだ。

妹のように、か？

そうかもしれない。——以前は、確かに、兄妹のような仲だった。

しかし、今、依子のことを思っている、この気持は、やはり微妙に違っている。

女としての依子を、心配しているのだ。今、ここに依子がいれば、抱きしめてやりたい、と思った。

さて、行くか。

あまりのんびりしていると、着く頃には暗くなってしまう。

車の方へ戻ろうと、津田はクルリと向き直った。それが二、三秒遅かったら、確実に、津田は死んでいただろう。

目の前に、女が、斧を振り上げていたのだ。重い斧が真直ぐに振り降ろされて来るのを、津田は危うくかわした。

「何だ！　おい、何するんだ！」

やっと我に返ったときには、女が、斧を持ち直していた。

髪を振り乱して、服はグレーのスーツだが、汚れ切って、あちこちかぎ裂きができている。

足は裸足だ。

目を見開いて、荒く息をつきながら、再び津田の方へと向って来た。

「おい、何だよ！——やめろ！　危ないじゃないか！」

津田はあわてて逃げ出した。女が、斧を手に後を追う。

しかし、女の方はかなり疲れているようだった。斧も重いのだろうが、両手で、持っているのがやっと、という感じである。

「えい！」

と、かけ声と共に振り回した斧は、車のボディにガン、と食い込んだ。

だが、そのショックで、女の手が斧から離れ、女はよろけて尻もちをついてしまった。

津田は、やっと反撃の余裕ができて、斧をまず取り上げ、傍へ、放り投げた。

女が、いきなり、津田の足へしがみついて来た。

「おい、何するんだ！　やめないか！」

津田もよろけて、尻もちをつく。

初めて、女の顔をまともに見た。——土や埃で汚れているが、まだ若い女のようだ。

待てよ、この顔は……。

女が両手をのばして、飛びかかって来た。津田は仰向けに引っくり返り、女がのしかかって、首を絞めようとするのを、何とか押し戻した。

「待て！——やめろ！——依子！　依子だろう！」

と怒鳴る。
ハッ、と女の手が止った。——ポカンとして、津田の顔を眺める。
「津田……さん？」
かすれた声が出て来た。
「そうだよ！　僕だ！」
「ああ……津田さん……来てくれたのね！」
依子の目から大粒の涙がこぼれた。
「しっかりしろよ。どうしたんだ！」
「私——私——」
依子は体を震わせた。
「どうした！」
津田が起き上って、依子を抱いてやる。
津田の腕の中で、依子がぐったりと崩れた。
「しっかりしろ！——依子！」
依子は気を失っていた。
津田は、呼吸を整えた。——これが事実だと信じるまでに時間がかかった。
本当だ。ここにいるのは依子なのだ。
何があったのか分らないが、ともかく、こうして津田の腕の中にいる。

津田は何とか依子を車に乗せた。後部座席に寝かせてやる。
相当に疲労困憊しているようだ。入院させた方がいいかもしれない。
津田は、ちょっとためらったが、結局、道を戻ることにした。
入院させるのなら、ちゃんとした所でなくては。少し時間がかかっても、大きな町へ出よう、と思った。
結果的には、その方が楽だ。
津田は、車をUターンさせ、でこぼこの山道を戻って行った。

「大分、体力を消耗していますね」
と、医師は言った。
「大丈夫でしょうか」
と、津田は訊いた。
「特に危ないということはありませんよ」
津田はホッと息をついた。
「じゃ、ずっと眠りつづけているのは……」
「疲れている、ということですね、要するに」
「はあ……」
「それに、胃も空っぽで。——どうやら、ここ何日か、ろくに食べていなかったようです

よ」

津田は、思わず、ベッドで眠り続けている依子の方を見た。

「今日はもう夜だから、明日、また精密検査をしてみましょう。一応点滴で、栄養を入れていますから」

「よろしく」

津田は頭を下げた。

――夜になって、やっとこの病院へ辿りついたのだった。

気が気ではなかった。何しろ、依子は、眠り続けていて、あのでこぼこ道でも、一度も目を覚まさなかったのである。

これは、よほどの重態か、と、半ば覚悟して、ここへ運び込んだ。

一応安心である。――病院も総合病院で、真新しく、気持のいい所だ。

ただ、ちょっと痛かったのは――といっても懐の方で――個室しか空いていなかったので、ひどく高くつくことだった。

今夜は仕方ない。ここで寝るか、と津田は思った。

場所がないことはない。来客用のソファがあって、何とか横になれる大きさだ。

それにしても……。

津田はソファに腰をおろし、眠っている依子の横顔を眺めていた。

何があったのだろう?

依子の体には、いくつもすり傷や、小さな引っかき傷があったらしい。山の中を歩き回っていたのか。

しかし、小学校の教師がなぜ山の中をあんな格好で歩き回っていたのだろう？

「助けて……殺される」

と言ったのは、なぜか。

どうやら、かなり複雑な事情がありそうだ。

津田は欠伸をした。——少し眠気がさして来たのだ。

やれやれ、体がガタガタだよ。——だが、考えてみれば、危ういところで、依子に殺されそうだったのだ。

いくらガタガタになっても、斧で頭を割られるよりましというものだ……。

ソファで横になって、ウトウトしかけた津田だったが、

「——そうだ」

と起き上った。

依子の母へ連絡していない。——もう十二時を回っているが、電話しておいた方が、安心するだろう。

津田は十円玉と百円玉を何枚か持って、廊下に出た。

赤電話が、階段のわきにあった。——病院の夜は静かである。

十円玉の落ちる音も、気がひけるほど大きく聞こえる。

「ああ、夜中にすみません、津田です。——ええ、依子さんに会いましたよ。——いや、実はそれが——」

手短かに事情を説明し、「医者も、心配ないと言ってますから。——ええ、明日、もう一度、お電話します」

津田は電話を切った。最後の一枚の十円玉が落ちた。

「さて、寝るか」

と、伸びをして、病室の方へ戻りかけたとき、ガラスの砕ける音が響き渡った。

あれは——依子の病室だ！

津田は、病室の中へ、飛び込んだ。

依子が、病室の隅で震えている。床に、点滴のびんが砕け散っていた。

「——依子。大丈夫かい？」

「津田さん……」

依子は、震える声で言った。「本当なのね？」

「何が？」

「私、ここにいるのね。——津田さんと一緒に」

「そうだとも」

津田は、かがみ込んで、依子の肩に手を置いた。依子が、その手に頬を押しつける。

「本当なんだわ……」

依子は、何度も何度も、深く息をついた。
「さあ。——もう、今日は寝るんだ。思い切り休んで」
依子は肯いたが、動こうとはしなかった。
「ねえ……」
「何だい？」
「そばにいてくれる？」
「もちろんさ」
「私……殺される」
と、依子は言った。
訊いてみたかったが、今はその時期じゃない、と津田は思った。
ドアが開いて、看護婦が入って来た。
「まあ、どうしたの？」
「すみません。ちょっとうなされたらしくて……」
「待ってね。ガラスで、足を切ると危ないから——」
いやな顔もせずに、看護婦は片付け始めた。
それを見ている内に、依子の表情に、平静さが戻って来た。
「教師らしい」
と、いつも津田がからかっていた、あのきりっとした顔に、戻ったのだ。

「さあ、横になってて。——今、新しいのと換えるわ」
看護婦に言われて、依子は、
「すみません」
と、頭を下げた。
おとなしくベッドに入ると、津田を見て、
「——どうして来たの？」
と、訊いた。
「お母さんの頼みさ。それと、君の電話」
「母は……」
「ここにいると、さっき知らせたよ」
「どうもありがとう。——お仕事、大丈夫なの？」
「それほど重要なポストにいるわけでもないからね」
と、津田が言うと、依子は、やっと笑みを見せた。
「そうそう。笑うのが一番だ」
依子は天井を見ながら、
「明日、警察へ行くわ」
と言った。
「まだ無理だよ」

「でも、ともかく話をしなきゃ！」

と、強い口調で言ってから、依子は、大きく息を吐き出した。「誰も、信じてくれないかもしれないけれど……」

――看護婦が点滴の新しいびんをセットして行くと、ほどなく依子は眠りに落ちた。

その寝顔は、やっとごく普通の、平和な眠りを思わせるものになっていた……。

3　消えた少女

大きな事件というものは、たいてい、何事も起りそうにない、平穏な日に始まる。

中込依子も、その日はいつになく、のんびりした気分であった。

秋の日――というだけで、目に浮んで来そうな、青空と、ポッカリ浮んだ白い雲と、爽やかな風と。

都会では、既に失われてしまった「季節」が、ここには残っていた。

依子が、この山間の町の小学校――正確には分校だった――へやって来て、一年余りたった。

教師生活二年余りで、こうした小さな規模の学校へやって来るのは、少々心もとない感じであった。都内では、三年生と四年生を受け持っていたが、この分校では、一年生から六年生まで、全部合わせても三十人にしかならないので、もう一人の男の先生と、教科を分担し

て、全学年、一緒に授業をすることになっていたからである。
初めての経験で、最初は緊張したが、すぐに、依子は子供たちの中に受け容れられたことを知った。
「中込先生」
と、声をかけて来たのは、もちろん、もう一人の先生、水谷だった。
何しろ、この二人しか、この学校には教師がいないのだから。
「帰らないんですか？」
と、水谷は、欠伸をしながら言った。
「今日のテストの採点をやってからにしますわ。どうぞ、お先に」
「いや、熱心ですねえ。若いということは、羨しい！　では、お先に」
「ご苦労さま」
――一人になると、依子は、ちょっと息をついた。
立ち上って、窓から校庭を眺める。
校舎もオンボロの木造で、窓もろくに閉らないというお粗末さだが、都心の近代的な校舎で、窓ガラスが全部割られたりしているのに比べれば、ずっとユーモラスで、暖かい。
それに校庭は、三十人の生徒には、もったいないほどの広さ。都心の小学校では、考えられない面積だった。
まだ、五、六人の、三年生の子たちが、遊んでいる。その内の一人が依子に気付いて、手

を振った。

依子も手を振って見せ、

「早く帰るのよ！」

と、大声で言った。

でも、都会と違って、少し帰りが遅くなっても、誘拐だの痴漢だのに気を使わなくて済むのは、ありがたかった。

実際、今の五年生、六年生ぐらいの女の子の中には、完全に女っぽい体つきをしている子がいるのだ。

前に依子のいた小学校では、六年生の女の子が妊娠するという騒ぎがあって、週刊誌までが取材にやって来て閉口したものだった。

それに比べれば、この分校の子たちは、まだまだ、昔の「やんちゃ」な子供たちのイメージを残している。

教師が疲れてしまうのは授業とか、生徒たちの素行などの指導ではなく、むしろ親たちとの付き合いにおいてである。

その点、この小さな町では、まだ道を行けば、向うから、

「先生、こんちは」

と、挨拶してくれる。

ここでは、まだ教師は「尊敬される職業」であった。

依子としては、全学年を同時に教えるという、特殊なやり方に慣れると、この分校での生活を、充分に楽しめるようになっていたのである。

「さて、やっちゃおうっと！」

依子は、ウーンと伸びをして、自分の机に戻った。テストの採点、一人一人への注意、そして、前より点の上った子には、賞め言葉を添えてやる。

依子は、こういう仕事が楽しかった。先生たちの中には、テストの問題を作るのを面倒くさがって、全部、市販のテストを使う人も少なくない。

都会の教師たちは忙し過ぎるのも事実だが、やはり生徒たちの実力や、問題点を一番よく知っているのは、担任の教師である。問題を作るのは、どんなに忙しくても、自分の手で、というのが依子の信念だった。

水谷は、依子ほど、そういう点、熱心ではない。人はいいのだが、ちょっとやる気のないタイプである。

「もう年齢だから……」

が口ぐせで、生徒の前でもよく言うので、〈もうとし〉先生、などと呼ばれたりしているが、実際はまだやっと四十になったところだ。

ただ、年齢の割に老け込んでいるのも事実だし、ちょっと心臓が弱いとかで、体育の時間でも、勝手に生徒たちにやらせて、自分は、見ているだけだったようだ。

依子が、体育もみることになって、水谷はホッとした様子だった。

同僚としては、ちょっと食い足りないし、それに、まだ独身だが、恋の相手としてはあまりに魅力に欠けていた。

だが、一緒にやって行くのが苦痛、というほどのこともなく、まずまず、依子はここでの境遇に満足していた。

ただ——いいことばかりはないもので、裏を返せば煩わしさにもなる。

どこを歩いていても、依子の顔を知らない人はいないし、それに、初老の未亡人の家の二階を借りているのだが、世話好きというか何というか、依子がいない間に、勝手に部屋の中でも何でも整理してしまう。

悪気がないのは分るのだが、依子としては、多少のプライバシーも必要であり、困惑することがしばしばあった。

だが、ともかく——まあ、八割の満足度、とでもいうところだろうか。

それに、日曜日には時々、近くの大きな町へ出て、買物したり、映画を見たりする。

東京へも、夏休み、春休みなどには帰れるし、そう苛々がつのるほどではなかった。

「——終った！」

依子は、ふうっと息をついた。

一時間ほどかかった。——気が付くと、もう校庭は静かになっている。

そろそろ暮色が漂い始めていた。

そうそう、通勤が楽なことも付け加えておかなくてはならない。何しろ歩いて十分なのだ

から！

学校を出て、依子は、ふと今日は遠回りをして帰ろうか、と思った。

遠回り、といっても、学校の裏手をぐるっと回るだけのことだが、小川を渡り、林の中の道を抜け、ちょっと小高い丘へ上って、町へと降りて行く。

なかなか変化に富んだ散歩道なのである。

風も爽やかだし、まだ暗くなるという時間ではないし……。よし、そうしよう。

依子は回れ右をして、学校の裏へと歩いて行った。もとより、裏門などというものがあるわけではない。いや、大体、塀がないから、門というものもない。

門ができるのは、運動会のときの「入場門」と「退場門」ぐらいだ。

依子はぶらぶらと、その小径を辿って行った。——こういう歩き方ができるようになったのも、つい最近のことだ。

都会で、時間に追われて、せかせかと歩いていたので、のんびり歩くということがむずかしい。わざとゆっくり歩くと、却って疲れたりした。

しかし今では、町の中でも、そう違和感なく歩くことができる。前には、ごく普通に歩いていても、

「先生、何かお急ぎですか」

と声をかけられることがあった。

小川が流れている。——本当に、今どきほとんど見られない、浅い小川で、夏の水遊びには格好の場となっている。それに、水が澄んでいるのだ。

依子は、小川にかかった、小さな古い木の橋から、川底を震わせながら流れる水をじっと見下ろしていた。

東京では、もうほとんど川というものを見なくなった。

ここに何年いるか分らないけど、ずいぶんのんびりになっちゃいそうだわ、と依子は思った。でも、いつまた東京へ戻ることになるかもしれない。

そうなればなったで、またせかせかと歩くようになるのだろう。

「——あら」

小川の流れに、何かが転がりながらやって来た。それは、橋の真下で、少し大きな石に引っかかって、止った。

「靴だわ」

子供の運動靴のように見える。

依子は、橋のたもとへ戻って、わきから、斜面をこわごわ降りて行った。

途中、危うく引っくり返りそうになったが、何とか無事、川のほとりへ辿りついた。小石に足を取られそうになりながら、手を伸ばして、その運動靴を取ろうとした。

もう少し、というところで届かないのだ。

仕方ない。周囲を見回して、小枝が落ちているのを見付けると、拾って来て、それで靴を

引っかけようとした。

アイデア通りには、なかなか行かないのだが、しつこくくり返して、やっと靴が枝の先に引っかかった。

用心しながら、手もとへ持って来る。——大きさからすると、三年生か四年生の、女子の運動靴である。

見憶えがあった。それはたぶん、三年生の角田栄子の靴だ。

中の水を捨て、内側を覗いてみると、油性のサインペンで〈角田〉とかかれているのが分る。——やはりそうか。

この靴を憶えているのは、アニメのキャラクターの絵が入っていて、ちょっと高い靴だからである。

分校に来ている子で、こんな靴がはける子は、何人もいない。

栄子の父親は、この町でも古い家柄で、手広く、色々な商売をしている。町ではたぶん一番の金持だが、同時に町の世話役的な存在で、町の人々には頼りにされていた。

栄子はそこの一人娘だ。男の子がいないので、もしこれから生れなければ、栄子が養子を取ることになる。町では、そんな話まで出ていた。

「でも——どうしたのかしら」

と、依子は呟いた。

靴を片方流してしまったのでは困るだろう。

きっと、友だちとふざけていて、落としたのだろうが……。

依子は橋のたもとへ上って行くと、靴を手に、小径を歩いて行った。小川に沿って上流へと歩いているので、もしかしたら、栄子がいるかもしれない、と思ったのである。

林の中の道を抜け、小川が流れ出している岩の上を通っても、栄子の姿は見当らない。きっと、何とかして帰ったのだろう。友だちの肩につかまるか、それとも裸足でだって歩ける。

やたら、コーラのびんのかけらや、ピンなどが落ちている道ではないのである。

小径は、少し上りになって、周囲に眺望の開けた、小高い丘に出る。ここからは、町が見渡せるのだ。

それほど小さな町だということでもある。

依子は、ちょっと息をついた。——風が渡って来る。

空が、輝きを失って、少しずつ暮れ始めていた。風も、やや冷たさを感じるようになった。

この靴を、角田さんの所へ届けて帰ろう、と、依子は思った。それなら、ここから真直ぐ町へ降りて、少し右手へ行けばいい。

下宿している家とは反対方向だが、五分も余計に歩けば済むことである。

さあ、行こうかしら、と歩きかけたとき、後ろの方で、茂みの揺れる音がした。

振り向いた依子の目に、低い茂みの向うを駆け抜ける、黒い影が映った。——しかし、それはほんの一瞬で、錯覚かもしれないと思わせるくらい、短時間だった。

しかし、あの音は、風ではない。確かに何かが茂みの中を動いた音だ。
依子は、その茂みの方へと歩いて行った。——別に何も残っていない。
何か動物でもいたのだろうか？
肩をすくめて、戻ろうとしたとき、それが目に入った。
赤い色。——茂みをかき分けて、そこに赤いランドセルを見たとき、依子は顔をこわばらせた……。

「——そうです。小学校三年生の女の子で——山の中を捜索しますので、少し人手を。——はあ、こちらも、もちろん、できる限りは動員いたします」
電話をしている駐在所の河村を、依子は、重苦しい気持で見ていた。
河村の机の上には、依子の持って来た、角田栄子のランドセルと靴の片方が、置かれている。
——何があったのだろう？
もう、外はすっかり暗くなっていた。
「中込先生」
と、声がした。
「水谷先生。——今おいでに？」
「ええ、出かけてましてね。帰ったら、大騒ぎで……。びっくりしてやって来たんですが」

「何もなければいいんですけど」
「角田君ですって？」
「ええ」
電話を切った河村が、依子の方へ向いて、
「何とか少し人を出してくれるように頼みましたよ」
と言った。「山を捜すといっても、大変なことだ。町中の男たちは総出ということになりますな」
「私も行きます」
と、依子は言った。
「いや、先生はいけませんよ。山の中は蛇もいるし」
「何と言われても、勝手に行きます！　私の生徒ですもの」
依子は言い張った。河村は、太った頬に、困ったような笑みを浮べて、
「いいでしょう。先生はお若いですからな」
と言った。
「いつ、出かけますの？」
「準備が必要です。――ズボンか何かに着替えた方がいいですよ」
「分りました」
「角田さんは？」

と水谷が訊いた。
「家で、人手を集めておられます」
と、依子は言った。「ともかく、必死ですわ」
「そうですな」
と、河村はため息をついた。「何しろ、目の中に入れても痛くない、という可愛がりようだ」
「じゃ、すぐに仕度して戻りますから」
依子は、駐在所を飛び出すと、下宿している家まで駆け戻った。
——山の夜は深い。
依子も、ここに一年住んで、夜の山へ入るのは、初めてだった。
依子にとっての夜は、街灯があり、ネオンが光り、車の走っている夜だった。
しかし、山の中は、「夜」だけしかないのだ。
角田が、先頭に立っていた。
持っているライトに、時々、その力強い横顔が浮ぶ。
角田の呼びかけに、正に町の男性は、子供と老人以外、総出の感があった。その中に混って、依子はあの丘への道を辿っていた。
ランドセルのあった場所から、捜索を開始するのである。
丘の上に上ると、

「中込先生！　先生、いますか！」
と、河村の声がした。
「はい！」
と、進み出る。
「ランドセルがあったのは、この辺ですね？」
依子は、近寄って行った。――そのようにも見えるが、そうでないようにも見える。
「もっと明りを……。すみません」
依子は少し退がって、茂みを眺めた。「――そうです。その右手の方です」
「黒い影が、ここを走って行った、と……」
「そう見えたんです。ほんのチラッとでしたが」
「どっちの方角へ？」
「林の方へですわ。印象ですけれど」
「それを手がかりにするしかない」
と、すぐそばで、角田の声がした。「ともかく早くしないと」
「もちろんです」
河村は、大声で、「ここから右手へ。――できるだけ広がって下さい！」
と、呼びかけた。
「何か見付けたら大声で！」

と、角田が怒鳴る。

「行きましょう」

河村の言葉で、依子は林の中へと、足を踏み入れた。

持って来た懐中電灯は、あまり大きなものではなかったが、ともかく目をこらして、光の輪の中に浮び出る物を見つめた。

角田が、しばらくはすぐ隣を歩いていた。

「畜生……」

と、角田が呟くのが、依子の耳に入った。「あいつら……ただじゃおかない……」

「ほう」

と、その刑事は顔を上げた。「そう言ったんですね？　その角田という人は」

「はい」

依子は肯いた。

「大丈夫かい？　あんまり話すと疲れるだろう」

津田が声をかけると、ベッドで、少し頭を高くした依子は首を振った。

「私はもう大丈夫。ちゃんと朝も食べたし」

「顔色は大分いいけどね。——でも、無理をしないで。興奮しちゃいけない、と、お医者さんに言われてるだろう」

「だけど、このことは、ちゃんとお話ししておかないと……」
依子は、軽く息を吐き出して、刑事の方を見た。
「すみません、話が悠長で、苛々なさるでしょう」
「いや、一向に」
もう、五十代も半ばと思える刑事は、のんびりと言った。好人物という印象の、およそ刑事らしくない刑事だ。
もっとも、本物の刑事など、津田は知らなかったから、専ら、本や映画からのイメージだったが。
「構いませんよ。ゆっくり話して下さい」
「すみません。——こういう風にお話ししていかないと、その後の出来事も、とても理解していただけないと思うんです。もし信じていただけなかったら、みんなの死がむだになる……」
依子は声を詰まらせた。
津田は、息を殺した。——「みんなの死」だって？
一体誰が死んだのか？　おそらく、依子自身も、その一人に加えられるはずではなかったのか……。
依子の目に涙が浮んでいた。——必死で、悲しみを押し殺している。涙を呑み込んでいるのだ。

ドアがノックされて、
「失礼」
と、医師が顔を覗かせた。「ご面会の方ですよ」
依子の母親が、不安げな面持ちで入って来た。
「――お母さん」
「依子！――依子」
急に緊張が緩んだのか、母親は、ベッドのわきに、膝をついてしまった。
「気分はどうなの？」
「大丈夫。――津田さんのおかげよ」
依子は、母親の手を握りしめた。
「昼食です」
と、看護婦が顔を出した。
「続きは、昼食の後にしましょう」
刑事が椅子から立ち上った。「さあ、お母さん、どうぞ」
そして、津田の方へ、
「どうです、お昼をご一緒に」
と声をかけた。

4　葬儀の刃

「ここのカレーはなかなかですよ」
〈カレー専門店〉と看板の出た、病院のすぐ近くの店に津田を案内すると、その刑事は言った。
こんな町へ来てカレーを食おうとは思わなかったな、と津田は思った。
しかし、実際、食べてみると、びっくりするほど旨い。これは参った、と思った。
カレーを食べながら、その刑事は、
「私は県警の警部で、小西といいます」
と、自己紹介した。
「津田です」
と言ってから、「警部さんですって？」
思わず訊き返していた。
県警で警部といえば、相当の地位だということは、津田も知っていた。
道理で、落ちついているわけだ。しかし……。
「警部さんが、わざわざおいでになったのは、何か理由でも？」
と、津田は訊いた。

「実はあるのです」

小西は肯いた。「県警の方でも、あの町に、何か起っているらしい、ということは分っていたのですよ。ところが、どうにも実態がつかめない。——最初は、ちょっとした噂話でした。ところが、その内に——」

小西は少し声を低くした。

「行方不明の者が何人も出ている、という情報が入って来た。それではこっちとしても放っておけない。しかし、確たる証拠や犯罪の事実もないのに、乗り込んで行くには、少々人手も不足していましてね」

「そうでしたか……」

と、津田は肯いた。

「あの中込さんのことを聞いて、これは、あの町の事情を知る手がかりになる、と思い、私が自分で来ることにしたのです」

小西は淡々と語っていた。「——あなたが来られたのは、どういう事情だったんです？」

津田は、依子の電話のことから始めて、順序立てて説明した。

「なるほど」

と、小西は肯いた。「どうやら、あなたは、恐るべき幸運に恵まれましたね。中込さんを救うことができたのですから」

津田は、初めて、それに気付いた。

「――コーヒーでもいかがです？」
と、小西はのんびりと言った。
「そうですね」
津田は、何となく、この、ちっともいかめしくない警部に、親近感すら覚えていた。
こちらはあまり感心しない味のコーヒーを飲みながら、津田は言った。
「彼女は、『殺される』と言いました。――しかも、さっきの話のように、『みんなの死』とも言っています。一体、何が起ったんでしょう？」
「さあ、それは分りません」
小西は首を振った。「幸い、中込さんは、冷静な観察者です。もっと、公平な目で見た事件の全貌を語ってくれるでしょう」
「しかし……」
と言いかけて、津田は苦笑した。「話を聞くのが、ちょっと怖いんですよ、正直に言って」
「分ります」
小西は静かに肯いた。「一つ確かなことは――」
「え？」
「それが、すでに終ってしまった、ということです」
「角田栄子は、捜索を始めて三日目の朝、死体で発見されました」

と、依子は言った。「誰かが、首を絞めて殺したのです。暴行の形跡はありませんでした」

「その事件は聞いています」

と、小西が肯く。

「――栄子ちゃんの両親の嘆きは、本当に、見ていられないくらいでした。私も教師として、責任の一部を負わなくてはならない、と思いました。そして、葬儀の日は、朝から冷たい雨で、まるでもう冬が来たかと思うような日でした……」

依子は、焼香を済ませると、外へ出た。

角田家は広いので、中で座っていられる場所もあったのだが、両親の顔と、正面の写真の中で微笑んでいる栄子の顔を見ている勇気がなかったのだ。

外へ出て、雨の中に立っている方が、まだ良かった。

傘をさして、外に出ると、町のほとんどの人々が、集まっていた。焼香の列は、延々と続いている。

読経の声。香の匂い。

重苦しい時間が過ぎて行った。――予定を一時間以上ものばして、焼香が続いたので、さすがに出棺を待っていた人々も、少しずつ帰り始め、やっと焼香客の列が終りに近づいたときには、半分ほどに減っていた。

依子も、長く立っていて、指先が、かじかんで来た。

ちょっと腹立たしかったのは、水谷が、焼香を済ませて、さっさと帰ってしまったことだった。——人さまざまだから、仕方ない、と自分へ言い聞かせる。

「先生」

と声をかけられ、振り向くと、駐在所の河村である。

「河村さん——」

「ご苦労さまです。出棺までおられますか」

「ええ」

「全くむごいことだ」

と、河村は首を振った。

「犯人の手がかりは？」

と、依子は訊いた。

「何人か、浮んではいるのですが、なかなか決め手がなくて……」

河村の返事は、何だか用意されたもの、という印象を、依子は受けた。

実際は、何かつかんでいるのかもしれない。ただ、部外者には話せない、ということなのだろう。

「ともかく、早く捕まってほしいですね」

と、依子は言った。「他の生徒たちにも、同じ危険があるわけですから」

「同感です。——いや、先生の努力には感服しますよ。お若いのに、しっかりしていらっ

しゃる」

「とんでもない」

と、依子は言った。

自分に油断はなかったか？——あのあと、何度そう自分へ問いかけたことだろう。

都会でも、こんな小さな町でも、同じ危険が、子供たちを待ち受けているのに、自分は、至ってのんびりと、放っておいたのではないか。

帰り道の注意や、身を守るための知恵を、子供たちに教えるのを、怠ったのではないか……。

そう思うと、たまらなかった。

不意に、その場の雰囲気が一変した。それは、特別注意していたわけでもない依子が、ハッとするほどの急激な変化だった。

一人の女が、やって来たのだ。

黒いスーツ、手に数珠をかけた、見たところ、特に変ったところもない、四十代の女性だ。少し、生活に疲れたようなところも見えた。

ただ、奇妙なのは——もしこの町の人間だとすると、一年間も住んでいるのに、依子は見たことがない、ということ、そしてもう一つ、今、その女を見る、町の人々の目の冷ややかさだった。

いや、それはほとんど、敵意ともいえるものだった。

女は、焼香のために、中へ入って行った。——町の人々がざわつく。
声をひそめて、話し合っている。
依子は、河村の方へ、そっと、
「今の人は、どなたですか？」
と訊いてみた。
しかし、河村の目は、その女の後を追っていて、依子の問いには、ちょっと肩をすくめて、
「この町の者じゃないんですよ」
と言っただけだった。
その言い方は、いやに冷ややかで、ちょっと依子は驚いた。そんな言い方をする河村を、初めて見た。
もう少し、何か訊いてみようと思ったのだが、河村は、
「失礼」
と、足早に、家の中へ入って行ってしまった。
ややあって、あの女が出て来た。
町の人々は、今度は女を無視していた。女が、門のわきに立って、傘を広げた。
出棺も間もなくだろう。——依子は、そっと周囲を見回した。
町の人々は、どこか冷たい仮面をかぶったように見えた。それは、ほんのわずかの、微妙な変化だったが、依子には、はっきりと感じられた。

突然、見知らぬ人々の真中へ放り出されたような、そんな気持だった……。

依子は、その女を見た。——哀しげな目だった。顔にも、表情というか、生気がない。

ふと、視線を感じたのか、その女が、依子を見た。

依子は、その、哀しげな目から、視線をそらすことができなかった。

女の顔には、「諦め」だけがあった。

町の人々のことを、見ようともしない。

声もかけられないことを、ちゃんと知っているのだ。そして、その境遇に甘んじている。

町の人間ではない、と河村は言ったが、それでは、なぜここへ来ているのか。

「出棺でございます」

と声がして、全員の目が、その方へ向いた。

——小さな棺が、出て来る。

涙があちこちで湧いた。雨の音さえ、打ち消すようだった。

霊柩車の中へ納められると、角田と、その妻が、参列者の前に立って、短く、挨拶をした。

ほとんど声にならない挨拶だった。

角田は、深々と頭を下げた。——傘もなく、雨に濡れている。

河村が、なぜか、角田の少し後ろに立っていた。

町の人々が引き上げかけた。——依子は、あの女のことが、何となく気になって、その場に立っていた。あの女も、行こうかどうしようかと、迷っている様子だ。

角田が、その女を見た。女と目が合った。

そして——依子が、目を疑うような出来事が、起ったのである。

しかし、見たものは間違いようもない現実だった。角田が、黒い上衣の内側へ手を入れると、銀色に光る短刀を取り出した。

そして、あの女の方へと大股に歩いて行くと、いきなり、短刀を女の腹へと突き立てた。

依子は目を見張った。刃は、たっぷり十センチ以上、女の体に呑み込まれていた。

女の手から、傘が水たまりに逆さに落ちる。女は、大きく目を見開いて、崩れるように倒れかけた。

そのとき、河村が素早く飛び出して女を支えた。同時に、周囲にいた二、三人の男が、女を両側からかかえるようにして、家の方へと運んで行く。

女をそっちへ任せて、河村は、角田の腕を取った。河村と角田が、家の中へ入って行った。

角田の妻が、それを追って家の中へ消える。

——総ては、ほんの何秒かの出来事だった。

我に返った依子は、町の人々が、何も気付かなかったのか、家へと戻って行くのを、見送っていた。

あれは——あれは現実だったのか？

間違いない。あの女の傘が、雨の中に、落ちている。

角田が、あの女を刺したのだ！

なぜ？　なぜなのか？

あの女が、栄子を殺したとでもいうのだろうか？——それ以外には、考えられない。

依子は、後が気がかりではあったが、ともかく、一旦引き上げることにした。

「何てこと……」

歩きながら、思わず呟いていた。

たとえ犯人があの女だとしても、刺してしまうなんて！　しかも、あの傷は、下手をすれば命取りだろう。

ともかく——河村が、あそこにいたのだから……。

だが、どうも妙だった。

依子は、初めて思い付いた。河村は、角田があの女を刺すのを見ても、手を出さなかった。突然で、どうにもできなかったのかもしれない。

しかし、女が倒れかかったとき、素早く支えた、あの行動は？　まるで、待っていたようだった。

そして、すぐに女を中へ運んだ手際の良さ……。

まさか！——考えすぎだ。

依子は、冷たい雨の中、下宿へと、足を早めていた。逃げているかのように……。

5　消えた女

角田栄子の葬儀から、三日が過ぎた。

依子は、多忙だった。

ともかく、二度とあんなことがあってはならない、というわけで、登下校時に、グループを作ることを決めたのである。

決めたといっても、何しろ水谷の方は、いたって腰が重い。優柔不断というのか、依子の提案にも、

「そうですねえ……」

と曖昧な返事をするばかり。

依子が業を煮やして、具体的な案を作ると、

「やはりそれは僕らの一存では――」

というわけである。

水谷との相談は諦めて、依子は、直接、本校の方へと出かけて行った。

校長と直接話をすると、依子の提案は、即座に受け容れられた。本校の方としても、別に費用がかかるわけでなし、認めない理由もなかったのだ。

依子は、三十人の生徒たちを、町の南側、中央、北側、と住む所によって三つに分けた。

それぞれに、六年生が入っているので、好都合だった。集合場所を決め、六年生が責任をもって、連れて来る。休む場合は五年生に必ず連絡しておく。

中央部のグループには五年生がいなかったので、六年生が休むときは、依子が代ることになった。

下校も、時間を早め、原則としてグループごとに帰ることにした。

しかし、放課後の校庭で遊ぶのを楽しみにしている子供たちを、しめ出すのも、ためらわれた。

用心深いのはいいが、子供たちが駆け回るのまで禁じることはできない。——依子は、放課後、遊びたい子は、予め届け出ること、そして、必ず四人以上で遊ぶようにして、一人だけ早く、あるいは遅く帰ったりしないようにする、などを決めた。

水谷は、依子があれこれと規則を作るのを見ても、別に手伝うでもなく、といって、止めるでもなかった。

むしろ、自分の手を離れて、ホッとしている、という様子であった。

依子は、生徒たちの家を一軒一軒回って、新しいやり方について説明しなくてはならなかった。

いや、もちろん、生徒たちに手紙を持って帰らせてもいいのだし、父兄を呼んで話をしてもよかったのだが、そうでなく、出向いて説明することで、せめて、栄子の死を償いたいと

思ったのである。

それに、何といっても、あんな事件があっても、町の人々はのんびりしている。いわば、切実な危機感がないのだ。その辺を、直接会って話をすることで、かき立てる必要があった。

実のところ、この「家庭訪問」には、依子にとっても、ある決心が必要だった。

角田栄子の死について、依子は、責められても仕方のない立場だったからである。

しかし、回った各家庭で、依子は、快く迎えられた。誰一人、依子を責める者はいなかった。

むしろ、

「先生のせいじゃないですから」

と慰められることもしばしばだったのである。

依子の考えた、グループ別の登下校についても、誰もが快く協力すると約束してくれた。

「何でも、お手伝いすることがあったら、おっしゃって下さい」

母親の多くが、そう言ってくれたのは、何よりも嬉しかった……。

そして——グループ別登下校の初日が、今日だったのだ。

やはり、のんびりしていて、ついうっかり一人で来た者も二、三あったが、ほとんどの生徒たちは、依子の指示の通りに、朝、決った時間に集合して、やって来た。

そして帰りも、混乱なく下校して行った。——遊んで行くという生徒が、十人近くいたの

で、依子は、もちろん、許可した。
「いや、結構やるもんですねえ」
と、水谷が、放課後になって、感心したように言い出した。
「え？」
依子は、窓から、遊んでいる子供たちを眺めていたが、水谷の言葉に、振り向いた。
「いや、集団登校なんていっても、どうせ、みんな守りやしない、と思ってました。きちんとして来たのには、本当にびっくりしましたよ」
依子は苦笑した。もう、あまり腹も立たない。
「やればできますよ」
と、言って、また校庭に目を向けた。
「全くだ。しかし……」
水谷は、言いかけて、言葉を切った。
沈黙が続いて、依子は、また振り返った。
「しかし――何ですの？」
「え？　ああ、いや――いつまで続くかな、と思いましてね」
依子がムッとして言い返そうとすると、
「別に、これは皮肉を言ってるんじゃありません」
と、水谷は急いで言った。「ただ、事実を言ってるんです。もちろん、この間のような事

件は、この小さな町には大事件だ。でも、また忘れられるのも早いですよ」

依子は何も言わなかった。

水谷の言うことにも一理ある、と思ったのだ。

「まあ、あんなこと、もう二度と起らんでしょう」

と、水谷は言った。

「そう願いたいですね」

と、依子は言った。

ふと、思い出していた。――栄子の葬儀のとき、角田が刺した女のことを。

あの女が来たとき、町の人々が向けた、冷ややかな視線。――それは、依子を迎えた父兄と同じ人々のものとは思えなかった。

「あの人、どうなったのかしら」

と、依子は言った。

「――誰のことです？」

水谷が訊く。

「お葬式で……。ああ、水谷先生はいらっしゃらなかったんだわ。中年の女の人が焼香にみえたんです。そして――角田さんが、その人を短刀で刺したんですよ！」

水谷は目を丸くしていた。

「刺した、ですって？」

「ええ」
「まさか！」
と、水谷は笑った。
「本当です。確かに、目の前で見たんですもの」
「そんな風に見えたような気がしただけじゃありませんか？」
「いいえ！　この目で見たんです。絶対に確かですわ」
と、依子は言い張った。
「しかし、そりゃ傷害罪になりますよ」
「もちろんですわ。あの刺し傷だったら、死ぬか、それでなくても大変な重傷だと思います」
「でも、そんな話、聞きませんね、少なくとも僕は」
私もだわ、と依子は思った。
町の人々は噂話が趣味である。あんな大変な事件で、しかも、ひき起したのは、町の名士だ。
もっとあちこちで話題になっていてもいいのに。
「それに、そんなことをすれば、いくら角田さんだって逮捕されてますよ」
と、水谷が言った。
「ええ、もちろんでしょうね」

「でも、僕は今朝、見かけましたよ」
依子は、振り向いた。
「誰を？」
「角田さんです。いつも通り、車を運転して行きました」
依子は、唖然とした。
「本当ですか？」
「もちろん。父親の方でしょう？　間違いありません」
まさか、そんなことが——と思ったが、水谷がそんなでたらめを言うはずもない。
依子は、わけが分らなかった……。

「失礼します」
依子は、声をかけた。
「やあ、先生！　これはどうも——」
駐在の河村である。パッと敬礼して、
「ご苦労さまです」
「どうも——」
依子は、ちょっとどぎまぎした。「今——よろしいでしょうか」
「ええ、もちろんです」

と、河村は、ガタつく椅子を、依子にすすめた。
「どうなりましたか、犯人は？」
と、依子は訊いた。
河村は、ちょっとポカンとしていたが、
「ああ、栄子さんの一件ですか、もちろん」
と肯いた。「今、県警に、異常者のリストを頼んでいるんですよ。その中で、この近辺の者、この辺まで容易に来られる者を洗ってみるつもりです」
「そうですか」
依子は肯いたが、ちょっとすっきりしなかった。
依子が「犯人」と言ったとき、河村がすぐに分らなかったのは、どういうわけだろう？
まるで、栄子殺しが、もう過去のものにでもなってしまったかのようだった。
いや、いくら何でも、それは考え過ぎだろう。——河村だって、ついうっかりすることはある。
「実は、そのことに関連してなんですが」
と、依子は座り直した。「お願いがありまして——」
依子は、グループ別の登下校のやり方について説明し、欠席が多かったりして、自分一人では手が回らないときは、協力してくれと頼んだ。
「承知しました、任せて下さい」

と、即座に、河村は言った。
「良かったわ。私の一存で始めてしまって、出すぎた真似をしたかと気になっていたんです」
「そんなことはありませんよ。町の連中、みんな、いい先生だと評判です」
「とんでもありません」
依子は顔を赤らめた。「――じゃ、どうかよろしく」
立ち上って、駐在所を出ようとして、
「ああ、あの女の方、傷はどうでしたの？」
と、訊いた。
「女といいますと？」
「ほら、角田さんがお葬式のとき、刺した……」
「刺した？」
河村が目を見張り、それから「――ああ、分りました！」
と肯いて、ちょっと笑った。
「いや、『刺した』とおっしゃるんで、びっくりしました」
「でも、本当に刺したでしょ？　私、あの場で見ていて、びっくりしました」
「あの女は、角田さんのお妾さんですよ」
と河村は、少し声を低くして言った。

「まあ！」

「だから、町の連中は、良く思っていません。それに、栄子さんのことを恨んでいましたからね。あの子さえいなければ、妻の座につけた、とでも思っているんでしょう」

「それで……。でも、角田さんが、なぜあんな――」

「さあ、やはりカッとなってたんでしょうな……」

と、河村は首を振った。「一人娘を殺されたんだ。つい、理性を失うのも分りますよ」

「ええ、それはもちろんですわ」

「でも、刺されたわけじゃありませんよ」

と河村は軽い口調で言った。「どうも、角田さんの様子がおかしいんで、私も気を付けとったんです」

「ええ、憶えていますわ」

「あの女に向って行こうとしたんで、私が止めたんですよ。そしたら、角田さんが包丁で切りつけましてね。――女の方は、ちょっと手をけがしただけでした」

依子は、何とも言わなかった。

「角田さんも、後で気が落ちつくと、悪かったと謝っておられました。まあ、いくらお妾でも、子供を殺したりはせんでしょう」

「そう――でしょうね」

「結局、女の方も、訴えたりするつもりはないということでした。――そんな具合です」

「そうでしたか」
依子は、やっとの思いで、笑顔を作った。
「どうもお邪魔しました」
依子は、外へ出て、歩き出した。
見られている。——振り向かなかったが、依子は、なぜか、ずっと見つめられているような気がして、ならなかった。

その夜、依子は、眠れなかった。
河村の話を信じたい。——信じられたら、どんなにか気が楽だろう。
しかし、そのためには、依子は、自分の見たもの、その記憶を否定しなくてはならないのだ。
それは不可能だった。——印象は、あまりに鮮烈だ。
女の腹へ呑み込まれる短刀、落ちる雨傘、そして、手早く運ばれる女……。
依子は、はっきり見た。そして、憶えているのだ。
それをどうして否定できようか？
しかし、実際に、河村は否定している。
河村が嘘をついているのか。——なぜ？
依子の記憶が正しければ、当然、角田は、傷害か殺人未遂で逮捕されているだろう。

しかし、現実に、角田は自由の身である。——つまり、女を刺しても、逮捕されていないのだ。

角田がいかに実力者といえ、そんな罪を逃れることは、考えられない。

暗い部屋の中で、依子は寝返りを打った。

間違いない。——何度考えても、記憶違いや、見間違いではありえない。

「いいわ」

と、呟いてみる。

あの事件は起ったのだ。

そして、どうなったのか？　まず第一に、刺された女はどうしたのか？

これが肝心だ。女は生きているのだろうか？

もちろん、見かけほどの傷でなかったということは、あり得る。だが、ちょっと薬をつけたぐらいで治せる傷でないことは、確実であった。

つまり——どこかで、治療を受けているはずだ。

町に、医者は一軒しかない。内科、外科、小児科と一人で引き受けている、金山医師である。

「生徒の健康診断は、またよろしくお願いします」

と、依子は、古びた診察室で、頭を下げていた。

「ああ、いつでも行ってやるよ」
金山医師は、しわくちゃの白衣を着た人の好さそうな、六十男である。
六十といっても、髪は白いが、まだまだ血色のいい、好人物だった。
「今日は、ちょっと私のことで……」
と、依子は言った。
「そうか。何だね？」
「実は……このところ、ちょっと生理が不順なんです」
「うん、なるほど。まあ、色々心労が重なったせいだろうね」
「はあ」
「それとも妊娠するような心当りでもあるかね？」
「いやだわ！　そんなこと――」
と、依子は赤くなって言った。
「いや、私ももう二十歳若けりゃ、あんたを放っちゃおかんのだが」
「光栄です」
と、依子は微笑んだ。「――で、お薬など服まなくていいでしょうか」
「まあ、できれば放っておいて、自然に元に戻るのを待った方がいいがね」
「そうですか」
「何か、体の方に、異常があるかね」

「少し手足が冷えます」
「うん、それは女性には多い。心配することはないよ。ただ、ちゃんと睡眠は取らなくてはいかんよ」
「はい」
と、依子は肯いた。「――ここは、入院なさってる方はあるんですか？」
「昔はいたよ」
と、金山は言った。「しかし、命の惜しい者はみんな逃げ出すので、やめた」
「じゃ、重い病気の方は？」
「大きな病院へ送るのさ。車で三十分ほどの所に一応、総合病院がある」
「そうですか」
と、依子は言った。「じゃ、あのけがをした女の方も――」
金山は、ちょっといぶかしげに、
「誰のことかね？」
と訊いた。
「お葬式のあった日です。角田さんの所で、けが人が出たとか聞きましたけど」
金山医師は、ちょっと迷っている様子だった。
「――ああ、そういえば、そんなことがあったかな」
「やはり、大きな病院へ？」

「うん、送ったよ。思い出した。だが、大した傷じゃなかった」
「そうですか。良かったわ」
依子は立ち上り、診察室を出ようとして、振り向いた。「その総合病院の名前と電話を教えていただけますか？　何かのときに、心配なので」
「いいとも」
金山は、メモ用紙を一枚破り取った。その音が、ギクリとするほど鋭かった。

6　少女

「考えてみると……」
と、依子は言った。「あのとき、何も追求したりせずに、きれいに忘れてしまっていれば良かったのかもしれません。大沢和子のことは、ずっと分らなかったにせよ……」
「大沢和子というのは？」
と、小西警部が訊いた。
午後の病院は、静かだった。
ベッドに少し起き上った格好で話をしている依子は、まるで、モノローグだけのドラマに出演している役者のように見えた。
津田は、依子の母親を、近くのホテルに送り届けて、戻って来たのだった。

奇妙な雰囲気だ。——依子の話と、この穏やかな病室と。何もかもが、夢のようにも思えて来る。

「すみません」

と、依子は微笑んだ。「大沢和子というのは、角田に刺された女性の名です」

「なるほど」

「いけない性格なのかもしれませんけど——私、物事を曖昧に済ませておくことのできない性質なんです」

「君は昔からそうだったよ」

と、津田は言った。

「そうね。だから、男っぽいとか言われてたわ」

と、依子は津田へ笑いかけた。

大分、以前の元気な依子に戻ったようだ、と津田は思った。

「それでいいんですよ」

と、小西が穏やかに言った。「どんなに残酷なものでも、真相を暴くことは、間違いではありません」

「そうおっしゃって下さると、少し安心しますわ」

依子は、深く息をついて、天井へ目を向けた。

「疲れたのなら、少し休みましょうか」

と、小西が訊いた。

「いいえ。そうじゃありません。――私、どうお話ししようかと……。でも、何もかも申し上げた方がよろしいでしょう」

「話しやすいように、話して下さい。総てを聞き出すのは私の仕事ですからね」

依子は軽く肯いた。

「――金山医師の所から戻って、私、下宿でいろいろ考えてしまいました。私は一体何をしているんだろう……」

私は一体何をしているんだろう？

依子は、畳の上に寝転がって考えた。

町の人たちは、みんな親切な人ばかりだ。それは分っている。でも――それでいて、河村や、金山医師を疑ってかかっている。

あの女がけがをしたにしろ、自分には何の関係もないことではないか。もっとやるべき仕事は、別にある……。

そうなのだ。分っている。――何もかも、見なかったことにして忘れてしまえばいいのだ。それで総ては丸く収まる。

でも――それができない。性格というものだろう。

だが、依子が知りたかったのは、二つだけだ。刺された女の具合と、刺した角田の罪。

それさえ分れば、依子とて満足したかもしれない。いや、不満は残っても、日々の仕事の内に、忘れていたかもしれない。

だが、総てを忘れることは、どうしてもできなかった……。

次の日曜日——

「ちょっと出かけて来ます」

と、一階の家主である未亡人へ声をかけて、依子は下宿を出た。

町の中には、バス停というものはない。

幹線道路から外れているので、バス停は町の外れ、十分ほど歩いた所にあった。

野っ原を道が横切っているだけの場所で、バス停の標識が、ポツンと、少し傾いて立っている。

今は、都会ではバス停の標識もずいぶん新しいデザインのものに変っている。こんなクラシックな「停留所」は、もう忘れられて行くだけだろう。

少し早過ぎたわ。——依子は、腕時計を見て思った。

バスも、もちろん本数が少ない。日曜日は特にそうである。

だから、依子も、ちゃんと時間を見て、それに合わせて下宿を出たのだ。しかし、本来がせっかちなので、早く着いてしまったというわけである。

あと五分……。

このバスは、時刻表から遅れることはあっても早く来ることはない。依子の乏しい経験で

も、それはよく分っている。
足音がして、振り向いた。
「まあ、先生」
駐在の河村の奥さんである。「お出かけですか」
「ええ」
依子は肯いて、「お買物？」
「少し買い出しに行かないと」
と、河村の妻は言った。「何しろ、大きいスーパーの方が、何でも安いですものね」
「そうですね」
「それに、品がいいんですよ。魚とか肉とか。やっぱり大きい所の方が新しいですもの」
生真面目で、ちょっと几帳面なところのある河村に比べると、妻の方はのんびりタイプである。
河村もやや太り気味だが、妻の方は完全に太っていた。依子と並んで立つと、印象だけでは、倍もあるという感じだ。
丸いメガネをかけていて、顔も丸いので、どことなく愛敬はある。しかし、なぜか依子は、この奥さんが、苦手であった。
理由はよく分らない。ともかく、一緒にいると、何となく疲れるのである。
そうおしゃべりでもなく、人の悪口を聞かせるわけでもないのだが、それでも、どこか疲

れる。

いわば、波長が合わないとでもいうのだろうか……。

この人と、町まで一緒だと気が重いな、と依子は思った。特に今は、河村のことで胸の中にモヤモヤしたものがあるので、余計だった。

仕方ない。どうせ、向うへ着けば別々なのだから……。

「先生はよろしいですね、スマートで」

と、河村の妻が言った。

「はあ」

「私なんかLサイズでしょ。このセーターも、好きな色じゃないんですよ。でも、この色しかLがなくて」

確かに、ちょっと変った草色で、あまり趣味のいい色とはいえなかった。

「あら、珍しい」

と、河村の妻が言った。「時間通りに来たわ」

バスがやって来るのが見えた。依子はホッとした。

バスが停ると、二人は前の方の乗車口から入った。

「さあ、先生、そこへ座りましょうよ」

と、河村の妻に言われて、依子は並んで座ることになった。

中はガラガラなのだから、本当は、別々に座りたかったのだが、こうなると仕方ない。

降りる方の口で、年寄りが手間取っていてバスはまだ停っていた。
乗車口はもう閉じていたが、窓から外へ目を向けた依子は、誰かが走って来るのに目を止めた。
「誰か来るわ」
と、言うと、河村の妻も目をそっちへ向けたが、
「まあ」
と、声を出した。
不愉快そうな言い方で、依子はびっくりした。
それは、十五、六の女の子だった。スラリとして、背は依子と同じぐらいありそうだ。
バスの乗車口がもう一度開いて、その少女が乗って来た。
ジャンパーにジーパンという、男の子のようなスタイルだった。髪も短く切って、全体にボーイッシュである。
少女は、依子たちのわきを通って、後ろの方の座席へついた。
バスがガタゴト揺れながら、走り出す。
少女は、依子にも、河村の妻にも、全く目を向けなかったが、それは、別にわざと目をそむけているのではなく、無視してかかっている感じだった。
「——先生、気を付けて下さい」
と、河村の妻が、少し低い声で言った。

「何をですか？」
「今、乗って来た娘がいるでしょう」
「ええ。あの女の子が、どうかしたんですの？」
「泥棒なんです」
依子は目を見張った。河村の妻は、顔をしかめて、
「ともかく、小さいころから、人の物を盗むくせのある子供で、何度も捕まってるんですよ。——今でも良くなっていなくて、たぶん町へ出て、スリでもしてるんじゃないかと、みんな言ってますわ」
「まあ……」
依子は、そっと振り向いて、一番後ろの座席に座っている女の子を見た。
「ともかく用心なさって下さい。お財布をすられないように」
「気を付けますわ」
と、依子は言った。
少しバスが揺れるのに身を任せていた依子だったが、ふと思い付いて、
「でも——やはり町に住んでいる人でしょう？」
「え？」
「あの、後ろの女の子です」
「ええ——そりゃあ、まあ一応町の人間ということになってるんですよ」

河村の妻は、曖昧に言った。
「でも、私、見かけたことがありません。町のどこら辺に、お家があるんですの？」
「町といっても、町外れです。書類の上で町の人、というだけなんですよ」
それにしても、買物とか、その他、色々用事もあろう。依子は、郵便局などへは、年中行っているが、そこでも顔を見たことがないというのは、妙な気がした。
「今日は久しぶりに主人もお休みでして」
と、河村の妻が言った。「ぐっすり眠っていますわ」
話は、他のことに移った。

その町は、依子がいつも買物や、映画などを見に出るのとは別の町だった。珍しいので、依子は、町の賑やかな通りを少しぶらついて、それから買物をしたり、時間を過した。
河村の妻は、買物をするから、とスーパーへ直行して行った。あの少女は、バスから降りると、どこかへアッという間に見えなくなった。
依子は、ちょっと小ぎれいなレストランに入ってみた。
日曜日とはいえ、大都会のように、レストランが満席で、順番待ちということはない。これでも混んでる方なのかも……。
値段もずいぶん安い。依子は、無難にハンバーグのセットメニューを頼んだ。

「コーヒーは先にお持ちしますか」
「そうね。お願い」
と、依子は肯いた。
熱いおしぼりで手を拭く。ついでに——あまりお行儀は良くないが、顔を軽く拭った。
そして、ふと見ると、あの少女が、店の中を横切っていた。
偶然、顔を見ていなければ、気付かないところだ。
少女は、ウェイトレスの制服を着ていたのである。
依子は、食事が来ると、ゆっくり食べながら、少女の働きぶりを見ていた。
特別に仕事熱心というわけではないにせよ、ちゃんと働いている。それも、昨日今日、始めたというのではない。
注文を聞いても、その場ではメモせず、ちゃんと憶えているし、配るときには、誰が何を頼んだか、ほとんど頭に入っているようだった。
かなり、長いことこの店で働いている、という印象を、依子は受けた。
食事を終え、依子は、
「すみません、コーヒーをもう一杯」
と、声をかけた。
「はい」
コーヒーポットを手に、注ぎに来たのは、あの少女だった。テーブルの所まで来て、やっ

と気付いたらしい。
「あ――」
と、思わず声を出した。
「バスで一緒だったわね」
と、依子が言うと、少女の方は素早く目をそらした。
カップを持ち上げると、ゆっくりコーヒーを注ぐ。
「あなた――町のどの辺に住んでるの？　私、見かけたことがないから」
少女は、ちょっと表情を固くして、カップを、依子の前に置いた。
「どうぞ」
「私はね――」
「知ってるわ」
と、少女は、依子の言葉を遮った。「小学校の先生でしょ」
「ええ、そう。中込依子っていうの。お名前、聞かせてくれる？」
「関係ないでしょ」
と、少女は突っぱねた。
「でも、あれだけ町にいて、全然知らない人がいるなんて、何だかいやだもの」
少女の唇が、ちょっと震えた。
「一人は知ってるでしょ」

「え？」
「お葬式に行ったはずだわ」
——刺された女のことだ、と、依子は思った。
「あの人を知ってるの？」
「もちろんよ」
「あの人——どうなったの？　けがしてたんじゃない？」
少女が、キッと依子をにらんだ。依子が思わず後ずさろうとするほどの、鋭い視線だった。
「こっちが訊きたいわよ！」
少女は、投げつけるように言って、店の奥の方へと戻って行った。
依子は、呆然として、それを見送っていた……。
——そのレストランを出ると、依子は、しばらく迷ってから、近くの商店に入った。
病院の場所を訊くためである。
金山医師が、あの刺された女を送った、と言ったのが、この町の病院だったのだ。
病院はすぐに分った。
「一番この町では大きな病院ですから」
と、訊いた店の主人は言った。
「他に、大きな病院って、あります？」
と、依子は訊いてみた。

「いや、他はみんな個人の先生ばかりですよ」
「どうも」
礼を言って、外へ出る。――この道を真直ぐに、十分ほどの所らしい。
病院は、すぐに分った。
しかし、大きいといっても、東京辺りなら、ちょっと大きな個人病院、くらいの規模だろう。
中へ入ると、それでも、やはり日曜日のせいもあるのか、患者が多い。個人の医者が、休んでいるのかもしれない。
〈入院〉という窓口へ行って、
「すみません」
と声をかけてみた。
最終のバスは、九時二十分だった。
これには間に合うように帰るはずだ。――依子は腕時計を見た。
七時半だった。
最悪の場合は、一時間半も待たなくてはならない。しかし、帰ってしまう気には、なれなかった。
ここまでやって来たのだ。何一つ、明らかにできずに帰るのでは、依子としても気が済ま

なかった。

仕方ない。待とう。

そう決心して、ともかく、小さな喫茶店に入った。レストランは、今、一番忙しい時間だろう。

まだ出て来られないに違いない。早くても八時。——依子はそう思っていた。

八時になったら、バス停まで行って、待っていよう。

苦いコーヒーを一口だけ飲んで諦め、ぼんやりと店の中を眺める。

薄暗くて、客が入るのかしらと心配になるような店だ。

カウンターの後ろに、古ぼけた鏡がかけてある。店の窓越しに、外の風景が映っていた。

その中に——河村の妻の顔が、一瞬覗いた。

依子はハッとして、振り向いた。誰かが、スッと姿を消した。

あれは？——錯覚だろうか？

もう一度、鏡を眺める。

いや、確かに見えたような気がする。そして、今、チラッと視界をかすめた人影も、どこか、河村の妻を思わせた。

「セーターだわ」

と呟く。

間違いない。セーターの色が、あの、河村の妻がこぼしていた色だった！

依子は、ふと寒気を覚えた。河村の妻が、この店を覗いたのは、偶然だったのだろうか？　いや、おそらくそうではない。河村の妻は、自分を尾行していたのではないか。気付かなかったし、そんなことを考えもしなかったが、ずっと後を尾けて来ていたのではないだろうか。

――依子がそう思うのも、あの病院で、話を聞いたからだった。

つまり、あの刺された女と思われる患者は、全く受け入れていない、ということだったのである。

7　多江

幸い、長く待つまでもなかった。

依子は、三十分ほどして、あの少女がバス停の方へと歩いて行くのを、目に止めたのである。

どうすれば、口を開いてくれるだろう、と依子は考えた。

いきなり声をかけても、さっきのような調子では、とても、心を開いてくれそうもない。

といって、ぶつかってみる以外に、何の方法も思い付かなかった。

仕方ない。――ともかく、誠意を見せて、信じてもらうことだ。

依子は、少女の方へと歩いて行った。

が、依子は途中で足を止めた。バス停の所に立っていた少女が、急に何か思い立ったように歩き出したからである。

どこへ行くのだろう？

ちょっと迷ったが、一旦見失って、会えずじまいになるのも困る。結局、あまり気は進まなかったが、少女の後をつけて行くことにした。

あのレストランとは、全く逆の方向に向っている。買物とか、そんな用事ではなさそうだった。

それなら、バス停近くの方が、まだ商店がある。少女は、どんどん薄暗い、静かな通りへと入って行った。

目的地がはっきり分っている、という歩き方だ。かなり複雑に、右へ左へと、細い道を折れて、一向に迷わなかった。

困ったのは依子の方である。とても、道順など思い出せない。

しかし、ここで少女を見失ったら、もっと困ることになるので、何とかついて行った。

角を曲り、ハッと足を止める。

少女が、アパートの一室のドアを開けて、中に入るところだった。

ここに住んでいるのか？　それとも、誰か知人か親類でもいて、今夜遅いので泊めてもらうつもりだろうか？

そうなると、依子は戻るに戻れず、困ってしまうわけだが……。

気は咎めたものの、止むを得ない。
依子は、そっと足音を殺して、そのドアへと近づいて行った。
上と下、四軒ずつの二階建のアパート。
ドアの間隔からして、一間か、せいぜい二間の小さなアパートだろう、と想像できた。
ドアのすぐわきに、台所の窓があるらしい。小さな換気扇が、汚れ放題になっている。
話し声が聞こえて来た。——換気扇が開いているのだ。
「——構わないじゃないか」
男の声だった。若い——といっても、少年という声ではないが。
「そうしたいけど、だめなの」
と、その少女の声がした。「最終のバスで帰るわ」
「真面目だな、相変らず」
男が笑った。
「そうじゃないの。ちょっと——事情があるのよ」
「そうか。——じゃ、お茶でも飲むか」
「コーヒーくれる？　インスタントでいいから」
「ウィスキーもあるぜ」
「だめよ」
と、少女は笑った。

いかにもホッとしたような笑いだった。——どこか、張りつめた所のある少女の、息抜きというところらしい。

「——例の、いなくなった叔母さんってのは見付かったのかい？」

と、男が訊いていた。

「まだ。それも気になってるんだけど……」

少女の呟きが低くなった。依子には、聞き取れない。

いなくなった叔母さん。もしかしたら、それが、あの刺された女だろうか？

依子は耳を澄ました。——教師が立ち聞きなんて、いけないわ、と思いつつ、そうしないではいられなかったのである。

だが、二人の声は、ほとんど聞き取れなかった。そして——

「明りを消して」

という少女の声に、依子はハッとした。

明りが消える。——依子は、少しずつ、窓から離れた。

少女とその男との仲に、口を出す立場でもないし、依子としても、そんなところまで、立ち聞きをしたくはなかった。

胸がドキドキして、頬が熱い。——まるで、世間知らずの女の子のように。

アパートから少し離れて、依子は立っていた。——ほんの、十五分ほどの暗闇だった。

再び明りが点く。

また、何か話をするかしら？　少し待って、依子は、そっとまたその部屋の前へと忍び足で近づいた。

不意にドアが開いて、少女が出て来た。

依子としても、どうしようもなかった。少女は、部屋の中へ、

「いいわよ、送ってくれなくて。最終バスに間に合うから。じゃ、またね」

と、声をかけ、ドアを閉めた。

そして、依子に気付いて、目を見張った。

依子は、

「あの――」

と言いかけて、少女が手を上げて、止めたので、急いで口をつぐんだ。

そうか。中の男に聞かれては困るのだろう。

少女は、ゆっくりと歩き出した。依子がその後をついて行く。

背中を向けて歩きながら、

「私の後をつけて来たの？」

と、少女は言った。

「ごめんなさい」

依子は言った。「どうしても、あなたとお話がしたくて」

「学校の先生が、人をつけ回すなんて！」

「ええ、でも……もっと大切なことのためには仕方ないわ」
「そうやって、何でも正当化するのね」
少女が急に足を止め、クルリと振り返った。「私たちの話を——立ち聞きしたのね！」
依子は目を伏せた。
「ごめんなさい。でも——話だけよ。その他のことは——」
「盗み聞きなんて、やることが下劣ね」
少女は足早に歩き出した。依子が急いでそれを追う。
「ついて来ないでよ！」
と少女が怒鳴った。
「道が分らないわ」
「何ですって？」
「バス停に戻れないわ、私一人じゃ」
少女は呆れたように依子を見ていた。——それから、急に笑い出した。
——依子はホッとした。

バスは、がら空きだった。
依子とその少女以外、三、四人の客しかいない。しかも、みんな席につくなり、居眠りを始めた。

バスがガタゴトと揺れながら、走り出す。
「後ろへ行きましょう」
と、依子が促すと、少女は、黙ってついて来た。
少なくとも、敵意のようなものは、少女から消えているようだった。
「私、中込依子。あなたの名前、教えてくれる？」
「栗原多江よ。――こういう字」
少女は、指でてのひらに字を書いてみせた。
「多江さん、ね。いくつ？」
「十七。もっと下に見える？」
「そうね。でも可愛いのはいいことだわ」
「ご機嫌取らなくてもいいわ」
と言いながら、多江はそう気を悪くしてもいないようだった。
「さっきの人は――恋人？」
「恋人か……」
多江は、ちょっと寂しげに笑って、「恋人と呼ぶには、ちょっと侘しくて……。仲間というか、弱い者同士というか……」
多江の話し方は、まるで四十代の女性のそれのように、少し疲れていた。
「さっき、あなたたち、叔母さんがいなくなったって話してたでしょ。――あなたの叔母

さん？」

「そうよ。大沢和子っていうの」

「大沢和子……」

と、依子は名前をくり返して、「四十代の――ちょっと疲れた感じのする、やせ型の人？」

多江が、依子を見た。

「あなた――先生って呼んだ方がいい？」

と多江が訊いた。

「いいえ。依子でいいわ」

「それも変ね。やっぱり、先生は先生か」

多江は、じっと正面を見据えて言った。「先生はあの子のお葬式に出たの？」

「角田栄子ちゃんの？　ええ、もちろん。教え子ですものね」

「――馬鹿だわ」

と、多江が呟くように言った。

「え？」

「行かなきゃ良かったのよ。――止めたんだけど」

「あなたの叔母さん――大沢和子さんも、あそこにいたの？」

「ええ、そして帰って来なかった」

「帰って来ない？」

「訊きに行ったわ。でも、叔母は来ていなかった、って、あっさり追い返されて……」

依子は、やはり、その大沢和子というのがあの女に違いないと思った。

「――叔母に何があったの？　教えて」

と、多江は依子をじっと見つめながら、言った。

迷ったが、しかし、逃げるわけにはいかない、と、依子は思った。何のために、この少女を待っていたのか。

「信じられないような話だけど……」

と、依子は口を開いた。「私が見たのは、出棺のとき、角田さんが――お父さんの方が、いきなり、あの女の人を刺したところよ」

「刺した……」

多江は青ざめた。「それで――」

依子は、言葉を選んで説明した。そのときの様子から、その女性の行方と、けがの具合が分らないこと、そして、今日、町の病院を訪ねた結果まで。

「――だから、どうしても、あなたと話がしたかったの」

と、依子は結んだ。

多江は唇をかみしめていた。目が赤くなっている。涙が溢れそうなのを、じっとこらえているのだ。

「可哀そうな叔母さん……」

と、震える声で呟いた。
「やっぱりその人が――」
「叔母だわ。間違いない。そして、死んだんだわ」
多江は顔を伏せた。涙がこぼれて、頬を落ちる。
「死んだ？」
「ええ。殺されたのよ、角田に」
「でも――それなら、駐在の河村さんが放っておかないでしょう」
多江は、ゆっくりと首を振った。
「先生は、何も知らないのよ。分ってないんだわ。でも――」
と、肩をすくめて、「それは先生のせいじゃないし、知らない方が幸せでしょうけどね…
…」
と続けた。
「教えて」
と、依子は、多江の腕をつかんだ。「私、何が起ったのか、知りたいの。なぜ、あんな事件が、うやむやにされて済んでいるのか、町の人たちが、噂にもしないのは、なぜなのか」
多江は、目を床へ落として、
「やめといた方がいいわよ」
と、言った。「知らない方が先生のためだわ」

「そんな！——教師として訊いてるんじゃないわ。人間として訊いているの。どんな理由があろうと、人を刺したことを、もみ消すなんて許せないわ」

多江は涙に濡れた顔で、微笑んだ。

「正義漢なのね」

「教師としても、社会的な責任があるわ。それに、栄子ちゃんの死にも、間接的に責任のある立場だし」

「でもね——」

と、多江は言った。「世の中には、どうしようもないことだってあるわ」

「どういう意味？」

「何でもないわ。——ほら、もう次で降りなきゃ」

気が付くと、多江と依子の二人しか客がいなかった。

多江が立って、降り口の方へ歩いて行く。依子も、それに続いた。

バスが停って、扉が開いた。何しろ、古いバスらしく、自動扉とはいえ、ギイギイきしむのである。

降り立って、バスが走り去ると、依子は多江に言った。

「私に話してくれるつもりはない？」

「知らない方がいいわ」

多江は軽く肩をすくめて、「じゃ、先生はそっちよ。気を付けて」

と言うと、さっさと歩き出した。
「待って」
依子は後を追った。「――私を信用してくれないのね」
「遊よ」
多江は振り向いて、「先生が気に入ったわ。だから、話したくないの」
と言った。
依子は、歩いて行く多江の後ろ姿が、すぐに闇に紛れて行くのを見送っていたが、
「ねえ、気が向いたら、学校へ遊びに来て！」
と声をかけた。「放課後、しばらくはいるから――」
果して聞こえただろうか？
依子には分らなかった。
ほとんど真暗な道を、依子は町に向って歩いて行った。
刺されて、死んだ。
まさか！――しかし、依子の記憶は、それを肯定していた。
あの女の傷は、致命傷になってもおかしくない。
そして、河村の態度や、金山医師の話が嘘だったことを考えると、あの多江という少女の言う通り、一つの殺人が、もみ消されようとしている、と考えるのが論理的である。
いかに信じがたい話でも……。

暗い道を歩いていた依子は、突然、懐中電灯の光に照らされて、ギクリとした。
「やあ、先生、どうなさったのかと思って、迎えに来ましたよ」
河村の声がした。
「あ――どうも、すみません」
「最終のバスでしたか？」
「ええ」
「少し早目に着いたんだな」
「客が――他にいなかったからでしょう」
私たちの他に、と言いかけて、依子はあわててやめた。
「何しろこの前の事件もありますからね。心配になって」
「すみません、気を遣っていただいて」
「いやいや。これも仕事の内です」
河村は上機嫌な声を出した。「さあ、下宿までお送りしましょう」
「どうも……」
依子は、河村と一緒に歩き出した。「そういえば、行くとき、奥様と同じバスでしたわ」
「ああ、聞きました。それで、お帰りが遅いな、と気になったわけでしてね」
「あの町へ出たの、初めてでしたから、何だか、あれこれ物珍しくて、つい遅くなってしまったんですの」

「お若いと好奇心も盛んですな」
と、河村が笑った。「しかし、それも程度の問題でしょう」
依子は、その言葉が、さり気ない警告かもしれない、と思った。
「終バスは、誰かとご一緒でしたか」
と、河村が訊いた。
「三、四人乗っていましたけど、みんな途中で降りて、最後は私一人でした」
と、依子は言った。
「そうですか」
河村は、それ以上、訊いては来なかった。——それきり、町へ入るまで、依子は口を開かなかった……。

8　雨

雨の日だった。
依子は、雨に打たれる校庭を、ぼんやりと眺めていた。
もちろん、こんな日に遊んで行く子供もいないので、残っている必要はないのだが、何となく、本を見たりして時間を過していた。
水谷はとっくに帰っていた。

依子も、特別に用のない日は、いつも下宿へ早々に引き上げるのが常だったが、このところ、何だか急いで帰る気になれないのだ。

下宿にいても、落ちつかない。思い過しだとは思うのだが、何となく、いつも見張られているような気がして仕方ないのである。

神経が休まらないのだ。

あの多江――栗原多江という少女は、どこに住んでいるのだろう？

誰かに訊いてみたいと思うのだが、一体誰に、となると――迷ってしまう。

河村や、金山医師のような人まで信じられないということになると、町中の誰もが信じられない。

といって、このまま放っておくわけにもいかない。

日がたつにつれ、何かあったと立証するのは困難になろう。しかし、ただ、もっと大きな町の警察へ行って話をしたところで、一体誰が信じてくれようか？

何の証拠もない話なのだ。

依子は、ため息をついた。――いつまで、こうしていても仕方ない。

下宿へ帰ろうか……。

廊下で、タタ、と足音がした。

「誰？」

と、依子は声をかけた。

返事はない。——誰か、子供が残っていたのかしら？

依子は、職員室を出て、廊下を見回した。誰もいない。

しかし、確かに、足音がこっちの方へと……。

歩いて行って、廊下の角へ顔を出したとたん、何か袋のような物がスッポリと頭にかぶせられてしまった。

同時に凄い力で後ろから抱きつかれて、手が上らなくなる。一人ではない。

依子は必死にもがいた。——下腹をいやというほど殴られた。

呻いて、依子は体を折った。気が遠くなる。

——誰？　一体誰が——？

依子は、そのまま床に突っ伏して、気を失った。

そして——冷たさに身震いして、ハッと意識が戻った。

激しく、雨が当っている。

依子は、痛みよりも、冷たさとショックで身を震わせた。——校庭だ。

雨の降りしきる校庭の、真中に、放り出されていたのだ。しかも、依子は、裸だった。

服を全部脱がされて、投げ出されていたのだ。依子は、周囲を見回した。

それから、夢中で、校舎へ向って走った。校舎の中へ飛び込むと、そのまま床に座り込んで、すすり泣いた。

「——先生」

と呼ぶ声に、顔を上げる。
ジーパン姿の、栗原多江が、そこに立っていた。
「どうしたの？」
「私――誰かに――」
言葉が出て来ない。寒さと恐怖で、体が震えている。
「ひどいことするのね！――服はどこ？」
依子は首を振った。
「待ってて」
と、多江は廊下を駆けて行ったが、途中、職員室の中を覗くと、
「ここにあるわ、きっとこれよ」
と声を上げた。
多江が持って来たのは、確かに、依子の服だった。
「でも――ともかく体をタオルか何かで拭かないと。びしょ濡れよ」
「タオル……私の机の引出しにあるわ」
「持って来てあげる」
多江が走って行く。
依子は、服を体に押しつけるようにして、何度も息をついた。
多江が、タオルで、依子の体をこすってくれて、依子は少し体が暖かくなって来た。

それから服を身につける。——髪も濡れていたが、これはどうにもならない。
「一体何があったの？」
多江に訊かれて、依子は、襲われたときのことを話した。
「でも誰が……」
と、依子は息をついた。「こんなひどい目に、どうして遭わなきゃいけないの？」
「待って。さっき、先生の服を見付けたとき、何か紙が上にのっかってたの。たぶん床に落ちてるわ」
「紙が？」
依子は、一緒に職員室の床を捜した。それはすぐに見付かった。
白い紙に、金釘流の字で、
〈余計なことはするな〉
とだけあった。
依子は椅子にかけると、その紙を手の中で握り潰した。——怒りと恥ずかしさで、体が震えた。
「——先生、何かされたの？」
と、多江が訊いた。
「いえ——それはないわ。あれば、分るでしょう」
「じゃあ、これは要するに脅しなのね」

「ひどいわ！」
悔し涙が、依子の頬を伝った。
いずれ、襲ったのは男、二人か三人だろう。その男たちは、自分を裸にして、散々面白がって眺めたに違いない。
そう思うと、悔しくてたまらなかったのである。
「いざとなりゃ、何でもできるぞ、っていう警告なのよ、きっと」
と、多江は言った。「私と一緒だったこと、誰かに言ったの？」
「いいえ」
と、依子は首を振った。
「でも、私があのバスでよく帰ることは、知ってる人もいるしね」
「あの日、河村さんの奥さんと一緒だったわ」
「ああ、そうか。往きで、会ってたんだわ」
「きっと、あの人が、話したのね」
多江は黙っていた。
職員室にいる、ということが、依子を落ちつかせた。教師に戻れた、というべきかもしれない。
「――よく来てくれたわ」
と、依子が言った。

「迷ったんだけどね」
と、多江は首をかしげた。「でも、ちょうどよかった」
「本当に。助かったわ」
依子は、校庭の方へ目をやった。——信じられない。
悪夢のようだった。
「私に、話しに来てくれたの？」
と、依子は訊いた。
「そうだけど……」
多江はためらって、「でも、やっぱりやめた方がいい。これ以上、首を突っ込むと、先生、今度は、こんなことじゃ済まないかもしれないよ」
依子は、多江の目をじっと見つめた。
「これで、私が泣いて逃げ出すと、向うが思ってるんだったら、残念ながら、間違ってるわ」
と、きっぱりと言った。「私、見かけほど弱虫じゃないのよ」
多江は微笑んだ。
「見かけも、弱虫じゃないよ」
「失礼ね」
と、依子も笑った。

やっと、それでショックから立ち直った、という気がした。
「――先生、いい人ね」
と、多江はしみじみと言った。「だから、危い目に遭わせるのはいやだわ。悪いこと言わない。この町から出た方がいいわよ。小学校の先生なんて、いくらでも仕事、あるでしょ？」
「いやよ。出て行くもんですか」
と、依子は首を振った。
「頑固ね」
「そう。――それだけが取り柄なの。昔から、根気だけはいいって言われて育ったんだから」
多江は、まだしばらく迷っているようだったが、やがて、ため息をつきながら、肯いた。
「分ったわ。でも――今日、ここで話をしても、きっとよく分らないと思うの。今度、出られる日はない？」
「土曜日の午後はどう？」
「私はいいけど」
「私、本校に行く用があるの。少々長引いても、構わないわ」
「じゃ、そのときに、案内してあげる」
と多江は立ち上った。

「もう行くの？」
「家に黙って出て来たから、心配してるといけないわ」
「そう……」
ちょっと心残りだったが、無理強いはしないことにした。「――ねえ、多江さん」
「え？」
職員室を出ようとしていた多江は振り向いた。
「案内してくれる、って、どこへ？」
「〈谷〉よ」
「〈谷〉？」
「そう。来れば分るわ。じゃあ、土曜日に」
依子は、多江が、傘をさして、裏手の道へと消えて行くのを見送った。
谷……。
谷というのは、どこのことだろう？
依子は、職員室を、いつもの通り片付けると、鍵をかけて出た。
傘をさして、校庭に出る。
あんなことが、現実にあったのだろうか？
――しかし、疑いようがない。
この濡れた髪は、いやでも、それを証拠立てている。

あんなことまでして、一体何を恐れているのだろう。守るべき秘密があるのは間違いないが、それは何なのか？

大沢和子の死。それは、もう疑いようのないものになった。

依子は、学校を出た。

――下宿に帰ると、ちょうど、電話がかかっていた。

「お母様からですよ」

「すみません」

と、依子は受話器へ手を伸ばした。「――あ、お母さん？　私よ」

「ああ、依子。どうしたの？」

「どうした、って……」

依子は面食らった。「そっちが電話して来たんじゃないの」

「だって、お前が電報を打ってよこしたからじゃないの」

「電報を？」

依子はわけが分らなかった。「どんな電報？」

「急いで帰るからって……」

「帰る？　私が？」

「そうじゃないの？」

依子は受話器を握りしめた。

「帰らないわ。何かの間違いよ」
と、依子は、きっぱりと言った。

9　幻の都会

「少し熱が出て来たね」
と、医師が依子の額に手を当てて言った。
小西警部は、肯いて、
「少し、無理に話をさせてしまったかもしれませんね」
と、椅子から立ち上った。
「あまり興奮させると、まだ完全には回復していないのですから」
と医師が言った。「明日、改めておいで下さい。少し眠らせた方がいい」
「分りました」
小西は、快く承知した。
医師が出て行く。
依子は、ベッドで、ちょっと目を閉じて、息をついた。
「疲れさせてすみませんでしたね」
小西が優しく言った。

およそ刑事らしからぬ口調である。
「一度にお話しできなくて、すみません」
と、依子は目を開けて言った。「何もかも思い出そうとすると、頭が混乱してしまいそうなんです。どうかなってしまいそう――気が狂ってしまうかと――」
津田が、急いでベッドに近寄ると、依子の手を握った。
「心配するな。もう何も心配することはないよ」
他に言葉が見当らない。しかし、依子にとっては、言葉より、津田の手のぬくもりの方が、嬉しいようだった。
「ありがとう。津田さん……」
小西が、ちょっと咳払いして、
「では、私はお先に失礼します。明日、またお邪魔することにしますよ」
とドアの方へ歩いて行った。
「警部さん」
と、ベッドから依子が言った。「私がこの病院にいることは、みんな知ってるんでしょうか？」
「みんな、というと？」
「町の――人たちです」
依子の言葉には、不安げな響きがあった。

「いや、ここを知っているのは私たちと、あなたのお母さんだけですよ」
依子は、
「そうですか」
と、安堵の息と共に言った。
「念のため、夜間は、警官を一人、病院の入口に置きます」
と、小西はドアを開けながら言った。「目立たないようにしますから、ご心配なく」
小西が出て、ドアが閉る——と思ったら、またヒョイと小西の顔が覗いて、
「津田さん」
「はあ」
「あまり、彼女を興奮させないようにして下さい」
——ドアが閉ると、津田と依子は顔を見合わせて、笑った。
「いい人ね」
と、依子は言った。
「ああ。刑事ってのは、もっと無愛想なもんだと思ってたよ」
津田は、依子の手を、もう一度しっかりと握った。
「——痛いわよ」
「ごめん。しかし——君の話を聞いてて、凄いショックで——何といっていいか、分らないけど——」

津田は、頭を振った。

裸にされた依子が、冷たい雨の中に放り出されている様子を想像するだけで、津田の胸は煮えくり返るようだった。そんなことをした奴を、決して許すものか、と思った。

妙なものだ。依子からの、あの電話があるまでは、珠江との気楽な情事にうさ晴らしをして、依子のことなど、思い出しもしなかったというのに、なぜ、急にこんなにも、依子のことが愛おしく思えるのか、津田自身にも分らなかった。

「津田さん」

と、依子が微笑んだ。「優しいのね」

「これからはね」

と、津田は、そっと依子の、少し熱い頬に手を触れながら言った。「今まではともかく、だ……」

津田の唇が、依子の唇に重なった。熱い吐息が混り合った。

「――また熱が出たかな」

「少しぐらい、高くなってもいいわ」

依子は、手を伸ばして、津田の頭を抱え込んだ。もう一度、二つの唇が出会った。

――病室に、黄昏が音もなく忍び入っている。

二人は、しばらく手を握り合っているだけで、何も言おうとしなかった。

やがて、津田が窓の外へ目をやった。

「暗くなって来たね」
「明りを点けて」
「まぶしくないかい？」
依子は頭を軽く左右へ動かした。
「暗いのは怖いの。明るくしておいてくれた方が落ちつくわ」
「分った。カーテンを閉めようか？」
「ええ」
津田は、病室の明りを点けておいて、窓辺に寄った。
依子の入っている病室は、二階である。窓から、表の道路が見下ろせた。
「――どうしたの？」
依子が声をかけたのは、津田が、道路を見下ろして、突っ立っていたからだった。
「いや、何でもないよ」
と、津田はゆっくりカーテンを引きながら言った。
ちょうど窓から見下ろした路上に、車が一台停っていたのだ。
ごくありふれた、白い――いや、最初は白かったのだろうが、今は薄汚れてしまった乗用車だった。
車の窓が開いて、男の顔が覗いていた。どんな男かは分らなかったが、津田が見下ろしているのに気付いて、急に頭を引っ込めた。

いや、そんな風に見えただけなのかもしれない。実際のところはどうだったのか……。
そして、車は、走り去ってしまった。
まるで、この病室を見張っていたようだ。——そんな気がするだけかもしれない。あんな話を聞かされた後だからか。
「——今夜、ずっとついててやろうか」
と、津田は言った。
「どうして？」
と、依子が目を少し見開いて、言った。
「いや——もし、その方が安心できるんだったら、ってことさ」
「大丈夫よ。それより、母についていてくれる？」
「お母さんか。そうだ。忘れてた」
「いやねえ。母は、こんな町のホテルに一人で泊ったことなんてないんですもの」
と、依子は笑って言った。「——ね、母をよろしくお願い」
「分ったよ」
津田は、椅子に腰をおろした。
ドアをノックする音がした。
「夕食です」
「どうぞ」

と、津田は立って行って、ドアを開けた。
病院の食事時間が早いのは、どこも同じことらしい。
「食事が終るまで、そばにいていいかい？」
「ええ」
依子は、ちょっとけだるい様子だったが、頬の赤みは、少しさめかかっているように見えた。
「元気を出してくれよ」
「大丈夫よ。若いんだから」
依子は肯いて見せた。「――あなたのことを聞きたい」
「僕のこと？」
「そう。だって、ずっと音信不通だったじゃないの」
「そうか。いや――仕事が忙しくてさ、つい……。といっても、大した仕事をしてるわけじゃないんだ」
依子は、冷めたスープをゆっくりと飲みながら、
「独身でしょ？」
と訊いた。
「もちろんだよ」
「恋人は？」

「そんなもの――」
いないよ、と言おうとして、つい、ためらった。
「いるのね」
「いや――恋人といっても、そんな、結婚だの何だのって仲じゃないんだ。遊び相手っていうのかな」
苦しい言い方だった。
「ホテルに行ったり？」
依子が冷やかすように津田を見た。
「うん……。まあ、ごくたまに、ね」
津田は頭をかいた。「どっちかというと、僕の方が遊ばれてる感じなんだよ、本当の話――」
依子は愉快そうに笑った。津田は、ホッとした。
「怒られるかと思ったよ」
「仕方ないわね、男の人って」
「もう彼女とも別れるよ。お互いに、そろそろ飽きて来てたんだ」
どうしてだろう？　なぜ珠江と別れようという気になったのか。
もちろん――そう、依子のためだ。
依子のことで、今は頭が一杯だった。今まで、依子のことをほとんど忘れていたのが、嘘

のような気がした。

「何もかも片付いたら――」

と、津田は、自分でも気付かない内に言っていた。

「え？」

「いや――つまり、この事件が片付いたら、東京へ帰るだろ？」

「そうね……」

依子は、ふと目をそらした。「そのときになってみないと分らないけど……」

「帰ろうよ。そして結婚してくれないか」

依子は、ちょっと目をしばたたいて、津田を見た。

「――どうだい？」

「また熱が上るわ」

と言って、依子は微笑んだ。

大都会――特に東京などに住んでいる人間にとって、夜とは、真夜中のことだ。

六時とか七時、八時ごろまでは「夜」の内に数えないようになってしまっている。

いや、場所によっては深夜、十二時でも一時でも、真昼のように明るい。そんな場所の住人たちにとっては、夜は、もう明け方近くになって、ようやく始まる、といってもいいだろう。

だが、こんな小さな田舎町では、暗くなり始めれば「夜になった」のである。

夜も九時を過ぎれば、あたかも真夜中の如く、ひっそりと静かになる。

この町の夜は、長いのである。

――ごく普通の、小さな会社に勤めているOL、石井恵美にとって、こんな時間に帰ることは、滅多になかった。

「いやんなっちゃう」

と、足を早めながら呟いたのは、遅くなったから、というよりは、ちょっと遅くなると、バスもなくなり、こんな暗い道を歩いて帰らなくてはならなくなるからだった。

高校時代の同級生は、東京に就職、夏休みには、一週間くらい帰って来て、夜も休むことのない都会の愉しさを、あれこれと話してくれる。

それを聞くたびに、東京へ出たい、と石井恵美は思った。もちろん、そんなことを言い出そうものなら、父も母も、目をむいて反対するに違いない。

「そんな危ない所に行くなんて！」

というわけだ。

でも、危険も何もない町なんて、同時に魅力もない、ってことだ。恵美にとっては、この町は正にその見本みたいなものだった。

どうして一人っ子なんかに生れちゃったんだろう、といつも悔んでいる。

どうせなら、五人兄妹の末っ子ぐらいに生れたかった。それなら、少々気ままに家を出たって、文句も言われないだろう。

不公平だわ、人生なんて。

恵美は、上り坂にかかって、足を止めた。まだここから十五分も歩かなくてはならないのだ。

仕事なら、こんなに遅くなることはない。

結婚退職する同僚の、送別会だったのである。

二次会まで付き合って、こんな時間になってしまった。

しかし、ワイワイと騒ぎながら飲むこと自体は楽しかった。その結婚する同僚が、東京に出て結婚生活を送ると聞くまでは、のことだが。

おかげで、この帰り道が、一層長く感じられる。

ああ、いやだいやだ。——このまま、どこかへ行っちゃいたい。

もし、見も知らぬ男が車で寄って来て、

「乗らないか？」

と誘って来たら、恵美は喜んでついて行ったろう。

しかし、現実には、そんなことは起らないのだ。現実は、家で渋い顔で待っている両親と、明日、いつもの通り九時に始まる会社のタイムカード……。

やれやれ、とため息をつきながら、恵美は坂道を上り始めた。急な坂ではないが、えらく長いのである。

——住宅地、といえば聞こえはいいが、まだ雑木林が大分残っている。町の外れ、という

わけだ。

ろくに街灯もない、暗い寂しい道である。

一歩、一歩、息をつきながら上って行くと——林の中で、何かが動くような音がした。

野良犬か何かかしら。

よく、飼っておいて、面倒くさくなると、この辺の雑木林に捨てて行く人がいるのだ。

また、ザザッと音がした。

恵美は足を止めた。犬にしては、音が大きい。

誰かいるのだろうか？　目をこらしたが、ともかく暗く、静まり返っているばかりで、何も見えない。

肩をすくめて、恵美はまた歩き出した。

女の子にしては、度胸のある方だが、やはり、あまりいい気分でもない。いつしか、足取りは早まっていた。

ポツン、と灯りが見えた。——うちの玄関だわ、とホッとした。

もう少しだ。

そのとき、何か、布でも引きずるような音が背後から近付いて来た。振り向くのと、鋭い刃が恵美の喉を切り裂くのと、ほとんど同時だった。

恵美の目に何か映ったとしても、それは、一瞬の白い幻でしかなかったろう。

すぐに視界は黒く閉ざされて、二度と光を取り戻すことはなかった。

都会へ出してやっていれば、と両親を嘆かせることになる、恵美の突然の死だった……。

10　惨殺

「警部」

と、声がして、小西は、うたた寝から覚めた。

机に肘をついたまま、眠ってしまっていたらしい。

「起してしまって、すみません」

顔を上げると、ちょっと憎らしくなるくらい爽やかな顔つきの、部下、三木刑事が立っていた。

「何時だと思ってるんだ」

と、小西は文句を言った。

「すみません」

「もう少し、疲れたような顔をして来い」

小西はそう言って笑った。

三木は楽しげに、

「ご機嫌がいいですね」

と、椅子を引いて来て、座った。

「機嫌が悪くても、事件は解決せんさ」
小西は自己流の理屈を並べて、「――どうだった？」
と訊いた。
もう、深夜、一時を回っている。県警本部にも、ほとんど人の姿はない。
「津田という男について調べました」
と、三木が手帳をめくった。「本人が言っている通りです。特に怪しい点はないようですが」
「そうか。――中込依子との関係は？」
「中学と高校が同じです。といっても二年、違うので、先輩、後輩の間柄ですね」
「同棲とか――」
「それはないようです」
「見た通りか」
「少なくとも、中込依子は、教師として、大変に熱心で真面目、といつも評価されて来ています」
「あの娘はそうだろう。――いい娘だ」
小西は肯いた。
「津田の方は、少々いい加減なところもあるようです。恋人がいて、名前は深野珠江。同棲までは行っていませんが、ちょくちょくホテルへ行く程度の仲らしいです」

「そんな感じだな、あの男は。——悪い奴じゃないが、ちょっと頼りない」
小西は、少し考えて、「津田がこっちへ来たのは、もっと前じゃなかったのか？」
「いえ、言っている通りです。会社に出ていましたから、間違いありません」
「なるほど」
小西は肯いた。「すると、あの二人の話は、大体信じていい、ということになるか」
三木は、手帳を閉じた。
「——警部。あの町で、何があったんでしょう？」
「分らん」
小西は、立ち上ると、机の後ろの窓へと歩み寄って、空っぽの街路を見下ろした。
「あの女教師の証言で、かなりのことが分って来るだろうが……」
「じれったいですね」
三木刑事はため息をついた。「徹夜ででも話を聞いて、一気にあの町へ乗り込みたいですよ」
「待て。——あの娘がこっちの手中にあることは、知られないようにする必要がある。いや、俺たちが何を求めているか、悟られないようにする必要がある」
「ええ」
三木は、肯いて、少し重苦しい表情になった。
「警部はどう思われます？」

「何のことだ？」
「田代は、生きてるんでしょうか？」
小西は、ちょっと三木の方を振り返って、言った。
「死んでるんでしょうか、と訊いてくれた方がいい」
三木が、ちょっと戸惑ったように、
「では――」
と言いかけたとき、小西の机で、電話が鳴った。
受話器を取って、
「小西です」
と、穏やかな声で言った。「――なるほど。――分りました。急行します」
三木が、腰を浮かしていた。
「事件ですか」
「殺しだ。若い娘が喉を切られた」
「何ですって？」
「ちょっとうるさいぞ。さあ、出かけよう」
小西は、三木の肩を軽く叩いて、若々しい足取りで歩き出していた。
津田は、浅い眠りから覚めた。

もともと、小さなベッドで、寝苦しいのである。やっと眠りに入ったところであった。

「パトカーか」

津田は呟いた。

外を、パトカーのサイレンが駆け抜けて行く。一台ではないようだ。

いやな気持だった。依子の話の印象が、あまりに強烈だったせいかもしれない。

「まさか、病院で何かあったわけじゃあるまいな――」

津田は起き上って、窓辺に歩いて行った。パトカーが、また一台、深夜の道を走って行くのが見えた。

記憶をたぐり寄せて、パトカーが向っているのが、病院とは逆の方向だと分ると、少しホッとした。

時計を見ると、もう三時だった。

こんな小さな町で、パトカーの音に眠りを破られるとは思わなかったな、と津田は苦笑した。

もちろん、どんな小さな町でも、山間の村でも、人間がいる限り、そこには憎しみも愛もあるには違いないのだ。

平和な村、素朴な村人、などというのは、都会の人間の身勝手なイメージに過ぎない。

どこでも、人間は、どろどろした苦しみを抱えて生きているのである。

ドアをノックする音で、津田は仰天して飛び上った。

何をびくついてるんだ！
ここはギャングの町じゃないんだぞ。
またノックの音がした。ためらいがちな、控え目な叩き方。
「津田さん……すみません」
依子の母だ。
「はい！」
急いで返事をすると、あわててズボンだけはいて、ドアを開けた。
依子の母が、ホテルの浴衣を着て、立っている。
「どうしました？」
「すみません、こんな時間に」
「いや、僕も、ちょうど目が覚めたところなんです」
「今、電話が鳴って――」
「電話が？」
「はい。出てみたんですけど、向うは何も言わないんです」
「間違いじゃないんですか」
「でも、向うに人が出ているのは分るんです。ただ、息づかいというか、すすり泣いているような音が聞こえて――」
「すすり泣きですって？」

「よく分りませんけど」

と、依子の母は首を振った。「もしかして依子だったら、と……」

「病院ですから心配ないでしょう。でも――不安なら、行ってみますよ」

「でも、そんなことをお願いしては――」

「構いません。どうせ目が覚めてたんです。それに近いですからね」

実際、病院とこのホテルは、歩いて五分ほどの距離しかない。

「すみませんね」

恐縮する依子の母を、部屋へ帰らせ、何か分ったら、電話するからと言っておいて、津田は自分の部屋へ戻り、服を着た。

ホテルのフロントは、空っぽだった。当然のことだろう。こんな時間にやって来る客もないだろうから。

津田はルームキーを上衣のポケットへ入れたまま、外に出た。

人っ子一人いない道を、病院へ向って急ぐ。

パトカーのサイレンが、遠くで鳴っているが、どの方角なのか、見当もつかなかった。よほど大した事件が起ったのに違いない。

――依子が電話して来たのだろうか？

夢でもみて、うなされたとも考えられる。実際、あんな目に遭って、夢でうなされなければ不思議というものである。

依子は大したものだ、と津田は思った。
俺だったら、さっさと逃げ出すか、でなければ、見てまずいものには、目をふさいでしまうだろう。
依子は、それのできない女なのだ。
結婚でもしたら、尻に敷かれることになるかな、と津田は思った。まあ、それもいいか。
どうせ、俺は頼りないところがあるんだ。
病院の建物の明りが、見えて来た。もう少しだ。
突然、目の前に人影が立ちはだかった。津田は、ギョッとして足を止めた。

「やあ、あなたですか」
小西が愉快そうに部屋へ入って来た。
「小西さん！　助かりましたよ」
津田は息をついた。傍の警官を見て、
「この人に、いくら怪しい者じゃないと言っても、信じてくれないんです」
「それは失礼しました。――君、この人は大丈夫だよ」
小西は、警官を退がらせた。
「いや、今夜は留置場かと思いました」
津田は額の汗を拭った。

「どうしてこんな夜中に出ておられたんです？」
「いや、実は――」
と、津田が、依子の母にかかって来た電話のことを説明すると、小西は真顔になった。
「なるほど。それは気になりますね。ご一緒に行ってみましょう」
「そうしていただけると――」
「パトカーなら二、三分ですよ」
――夜の町を、パトカーが疾駆する。
いや、もう明け方も間近い。
「ところで、何かあったんですか？」
と、津田がパトカーの中で、訊いた。
「ええ。若い娘が殺されましてね」
「そうですか……」
「喉を切られてるんです。こんな事件は珍しいですよ」
「それはひどい」
津田は顔をしかめた。大体、あまりなまぐさいことには強くないのだ。
「凶悪事件は何年ぶりかですのでね、パトロールの警官も、つい過敏になっているわけです」
「それはまあ、無理もありませんね」

と、津田は肯いた。

「依子さんからお話を聞くのが、ちょっと今日は無理かもしれないと……。ああ、もう着きましたよ」

病院の通用口から入って、当直の医師に、小西が話をした。

「何もなかったと思いますがね」

医師は、眠そうな顔で、スリッパの音を、静かな廊下に反響させながら歩いて行く。

病室のドアをそっと開けると——ベッドで眠っている依子の顔が見えた。

「異常ないようですね」

と、小西が肯く。

医師が、念のため、というので、脈を取り、額に手を当てた。

「——少し脈が早いかな。でも熱はありません。大丈夫ですよ」

「お騒がせしてすみません」

と、津田は頭を下げた。

出る前に、津田は一旦、依子のそばへ行って、寝顔を覗き込んだ。

穏やかで、平和な顔をしている。これなら大丈夫だろう。

出ようとして、ふと、目が床に落ちた。

津田は、かがみ込んで、十円玉を一つ、拾い上げた。

十円玉。——電話を連想した。

やはり、依子が電話をかけたのだろうか？
あのホテルに依子の母が泊っていることを他の誰が知っていたか？
津田は、十円玉を、そっと小さな机の上に置くと、病室を出た。
医師に礼を言って、小西と津田は、通用口から外へ出た。
「お騒がせして――」
「いやいや。何もなければ、それに越したことはありません」
小西はパトカーの方へ歩きながら、「ホテルまで送りましょうか」
と言った。
「近いですから。――でも、また捕まると困るな」
「送りますよ」
と、小西は笑顔で言ったが、ふと、表情をこわばらせた。「おかしいな」
「どうしたんです？」
「警官がいません。通用口の所に立たせてあるはずだ」
小西は、小走りに病院へと駆け戻った。
夜間受付の係も、警官のことを訊かれて、初めて気付いた様子で、
「そういえば……。十二時過ぎに、しゃべりましたけどね。それからは見てないな」
「どこかへ行くと言ってたかね？」
「いいえ。でも――私も、ちょっと眠っちまったもんですから」

と、係の男は照れくさそうに頭をかいた。
小西は、表に出ると、
「――ここにいて下さい」
と、津田へ言った。「表の玄関辺りを見て来ます」
小西が行ってしまうと、津田は一人になった。いや、パトカーの中には、運転してくれた警官がいる。
まあ、心細いということもないが、それでも、暗い中に、ポツンと立っているのは、いい気分とは言えなかった。
そろそろ夜が明けて来るだろう。まだ朝の気配はなかったが、たぶん二、三十分の内に空が白んで……。
津田は空を見上げていた。
通用口の少しわきに、立っていたのである。――何の物音にも気付かなかった。
突然、足首をぐいとつかまれたので、津田は仰天した。
「ワーッ！」
と大声を上げて、地面に引っくり返った。
「誰か――助けてくれ！」
とわめくと、パトカーから、警官が飛び出して来た。
「どうしました！」

「誰かが――足をつかんだ！」

津田は震え声で言った。

我ながら少々情ないが、仕方ない。

懐中電灯の光が、津田の足の方を照らした。

「これは――」

津田もびっくりしたが、警官の方も息を呑んだ。

倒れているのは、制服の警官だった。

おそらく、ここの監視に立っていた警官だろう。顔が血で汚れていた。苦しげに喘いでいる。

「おい！　しっかりしろ！」

津田も、やっとショックから立ち直って、もう一人の警官と一緒に、けがをした警官をかかえて立たせた。

そこへ、小西が駆け戻って来る。

急いで中へ運び、当直の医師が、看護婦を呼んで、手当をした。

「――大したことはありません」

と、医師が出て来て、言った。「頭を殴られたらしいですね。派手なコブになっていますよ」

「出血は？」

「出血？　ああ、あれは鼻血です。たぶん、倒れたときにでも、地面に顔を打ちつけたんでしょう」
「そうですか」
小西は苦笑した。「では話を聞けますね？」
「構いません」
――殴られた警官は、頭に大げさな包帯をして、照れくさそうに座っていた。
「申し訳ありません」
と恐縮している。
「用心が足らないぞ。何のための警備だ」
「はあ」
「まあ、大した傷でなくて良かった」
小西は、穏やかに言った。「犯人を見たか？」
「いえ、それが全く――」
「何も、か？」
「ええ。いきなり後ろから、ガツン、と。――それきり、何も分りませんでした」
「足音も何も聞こえなかったのか？」
「はあ。気を付けていたつもりなんですが……」
「どっちを向いて立ってたんだ？」

「外です。つまり――この病院の建物に背を向けて」

津田は、変だな、と思った。

その警官の話だと、殴った奴は、「病院の方から」来たことになるじゃないか……。

11 〈谷〉へ

雨の中で襲われてから、依子の心の持ち方が、ガラリと変った。

これまでは、他所者として、この町の問題に、どこまで口を出していいものか、という迷いが残っていたのだが、もう、その点は、ふっ切れていた。

もし、あの脅しで、依子が町を逃げ出すと期待していた者があったのなら、当て外れだったに違いない。

依子という娘の性格を、よく知らないのだ。

依子は、決して、後に退くものか、と思った。もちろん、正面切って、町の人々に対抗するような真似はしないが、逆に、こしらえものの愛想良さで、接することを覚えた。

ともかく、誰をも信じない、という決心が却って、依子を明るくしたのである。

現に、水谷から、

「中込先生、何かいいことでもあったんですか？」

と訊かれたほどである。

しかし、依子は油断しなかった。

毎日、町を歩き、買物し、立ち話をしながら、この中に、自分を襲って、裸にし、雨の校庭に放り出した犯人がいるのだ、と思うと、改めて怒りを覚えるのだった。

おそらく、当の犯人だけでなく、その周囲にも、事件を知っている人間がいるのだろう。

その人々は、いとも平然としている依子を、どう見ているだろうか？

依子は、注意深く、町の人々の表情を観察していたが、さすがに、依子の顔を見て、あからさまにギョッとするような、単純な犯人はいないようだった。

学校での日々は、何事もなく過ぎた。

生徒たちにも変りはない。授業も、以前の通りだ。

ただ、職員室に、野球のバットが置かれるようになった。

「中込先生、野球をやるんですか」

と、水谷がびっくりしたように訊いて来たので、

「美容体操の代りです」

と、依子は言った。「このところ、少し太っちゃったんで」

もちろん、このバットは、護身用である。

それから、白墨の粉をつめた小さな封筒を依子は持ち歩いていた。

いざ、というとき、目つぶしぐらいにはなるだろう。

まあ、武器を持ち歩くわけにもいかないので、後は、度胸でぶつかるしか、手はなかった。

——土曜日になった。

栗原多江が、〈谷〉へ依子を案内してくれる日である。

本校へ出向く用事があって、依子は、午前中、十一時で授業を終りになると、

「遊びは二時までよ」

と、生徒に言い渡した。

校舎の外に、河村が制服姿で立っていた。

依子が本校へ行くので、子供が遊んでいるのを、見ていてほしいと頼んだのである。

「じゃ、河村さん、申し訳ありませんけど」

と、依子は表に出て言った。

「大丈夫です。任せて下さい」

河村は上機嫌に肯いた。

わざと河村に何かと頼って行くように、依子はつとめていた。その方が、河村の警戒心を解くことになるだろう、と思ったのである。

事実、河村の態度に、一時見られた、よそよそしさが消えて、以前のように、目つきも優しくなっていた。

「ちゃんとお昼を食べに帰るように言って下さい。食べないで遊ぶ子もいるんですから」

と、依子は言った。

「承知しました」

「それで――私、本校へ出たついでに、町に寄って来ようと思ってますの。少し帰りが遅くなるかもしれません」
「ゆっくりしていらっしゃい。先生は少し働き過ぎてるんじゃないか、と、この前も町の連中が心配してましたよ」
「まあ、それはどうも」
と、依子は笑って言った。「生れつき、怠け者なんですから、ご心配には及びませんわ」
――学校を出て、本校まで、バスを乗り継いで、一時間はかかる。
本校へ着いたのは、十二時を少し回ったところで、昼食時間だった。
応接室で、しばらく待たされる。――依子は、ちょっと苛々した。
本校での用事は早く済ませて、多江と落ち合いたいのである。もう少し早く来れば良かった、と思った。
一時まで待つのかしら、と腕時計を見ていると、秘書の女性に呼ばれて、校長室へと通された。十二時四十分だった。
「やあ、お待たせして」
校長の大崎が立ち上って、依子を迎えた。
一見して、校長というより、会社の社長というイメージの紳士である。
なかなかのお洒落で、いい背広を着ている。人当りも、至って柔らかい。
「――どうです、その後？」

仕事の話が済むと、大崎が訊いた。
「分校の状態、ということでしょうか？」
「ええ。あの事件の後、何か変化はありましたか」
「いいえ。みんなとても元気にやっていてくれます」
「それは良かった」
と、大崎は肯いた。
「でも――」
と、依子は目を伏せた。「犯人はまだ捕まっていません。それなのに、どんどんみんなの記憶が薄れて行くのは、どうも……」
「確かにその点はありますね。また油断したときが危ない」
「充分に気を付けてはいるのですけれど、私一人の力では、できることは限られていますので」
「私も、時々、県警の人と会うことがあるので、今度、よく言っておきましょう」
大崎は、メモを取った。――何でもメモするのが、この校長のくせらしい。
「捜査の進展について、何か報告はないんでしょうか？」
「変りばえしないようですよ。あの一帯の変質者を中心に、当ってみてはいるようですがね」
「そうですか……」

正直、依子はがっかりした。河村はともかく、県警の捜査には期待していたのである。

「何か、希望があれば、言ってみて下さい。すぐにどうとは返事できなくても、うかがっておきますよ」

依子は、ちょっと考えてから、言った。

「あの悲しい事件のことは、とても忘れられませんけど、それ以外は、満足しています」

「それは結構」

大崎は、肯いて言った。「あなたのような、教えることに喜びを見出すタイプの先生がこのごろは少なくなりましたからね」

依子は、微笑んだ。

大崎は、少し間をあけて、続けた。

「――特に、あの町はむずかしくて、何人も辞めているのでね。あなたが頑張ってくれて、助かります」

これは、依子には意外な話だった。

「初めてうかがいました。そんなに何人もですか？」

「ああ――いや、それほどでもありませんがね」

大崎は、しまった、という表情で言った。

「三、四人、でしょうか」

「なぜ辞められたんでしょう、その先生方は？」

「色々ですよ」

と、大崎は肩をすくめて、「結婚でやめた人もあるし、やはり都会の学校でないと、という人もある。——何といっても、退屈な所ですからね」

わざとらしく笑う。

何か、他の理由があったのだ、と依子は思った。教えたくない理由が。

ともかく、今日はゆっくりしていられない。

依子は、早々に大崎校長の下を辞した。

大崎は愛想良く、しかし、どこかホッとした様子で、依子を送り出した。

「——何かあるんだわ」

と、歩きながら、依子は呟いていた。

あの町には、やはり、何か秘密めいたものがあるのだ。

「そうだわ」

依子は、思い付いた。——前、あの分校にいて、やめて行った先生たちの名前や連絡先は、どこかに残っているはずだ。

調べて、手紙を出すか、それとも会いに行ってもいい。話を聞くことができれば、何か分って来るかもしれない。

依子は、バスを待っていた。

コートをはおった若い男が、依子のすぐ後ろに並んだ。たぶん、依子と同じくらいの年齢

だろう。

きりっとした顔立ちの青年である。

依子は、バスが来ると、どうせ終点まで行くので、一番後ろの座席に座った。

すると、その青年も、一番後ろにやって来て、依子の隣に座ったのである。

依子は、初めて、その青年をまじまじと見た。何だか、わざと隣へ来たように思えたのである。

しかし、バスが走り出すと、青年は頭を垂れて、居眠りを始めた。

どうやら、思い過しだったらしいわ。

その内、青年が、依子の方へもたれかかって来た。依子がぐいと押し戻すと、何となくムニャムニャと呟いて、一旦、元に戻るのだが、またすぐにもたれかかって来る。

もう！　図々しいんだから！

押し返すか、それとも、サッとわきへどいて、引っくり返らせてやるか。

そう迷っていると、急に、

「中込依子先生ですね」

と、その青年が低い声で呟いた。

「え？」

依子はびっくりした。

「しっ。静かに」

青年は、相変らず居眠りだ。目を閉じたまま、そっと、呟くように話している。

「あの――」

「こっちを見ないで！」

と、青年は強い口調で言った。「知らん顔をしてて下さい。――中込先生ですね？　小さな声で」

「ええ、中込依子です」

「ちょっとお話をうかがいたいことがあるんです」

「あなたは？」

青年は、腕組みをした。手がスッとポケットへ入って、黒い手帳を少し引き抜いて見せる。

「刑事さん？」

依子はびっくりして言った。

「田代といいます」

「なぜ私を……」

「あの町のことを調べているんです」

「町のこと？」

「そうです。あなたに訊けば、少しは事情が分るかと……」

「私、まだ新任ですもの」

「しかし、殺人がありましたね」

「教え子でした」
「犯人は見当もつかないようです」
「あなたも――」
「県警の人間です。しかし、あまり騒ぎ立てたりしませんから、ご心配なく」
「何のお話ですか？」
「どこかで、ゆっくりお話しできませんか？」
依子は迷った。――刑事と話ができる。それも興味はあったが、しかし今日のところは、多江との約束がある。
「今日はどうしても……」
と、依子は言った。
「そうですか」
と、田代という刑事は残念そうに言った。
「お話はしたいと思いますけど……」
と、依子は、言った。
「いつなら大丈夫ですか？」
「明日なら日曜日ですから……」
「出て来られますか？」
「ええ。でも、どこへ――」

「あの町では、うまくありません。どこか他の町で……」
依子は、妙な気分だった。まるで、外国のスパイ映画にでも出ているようだ。これが現実の出来事なのだろうか？
「そうだわ」
依子は、多江が働いているレストランを教えた。
「そこなら——大丈夫だと思いますけど」
「分りました。捜します」
田代は、相変らず居眠りしているように、前へ頭を垂れていたが、やがて、ちょっと依子の方へ目をやって、
「あなたも充分、用心して下さい」
と言った。「危険なことがあるかもしれません」
田代は、ふっと目が覚めたような様子で、キョロキョロと周囲を見回し、大欠伸をした。
「もう、危ない目には遭いましたわ」
と、窓の外を見ながら、依子は言った。
「何ですって？」
「襲われて裸にされました」
田代が、さすがに驚いた様子で、ちょっと依子を見た。が、すぐに、うつむいて、床に手を伸ばすと、落ちていたバスの切符を拾い上げて、

「あなたのでは？」
「いいえ」
「そうですか。じゃ、誰か捨ててったんだな」
田代は肩をすくめた。「――届けたんですか」
「いいえ」
「どうして？」
「却って、危険です」
田代は、頭を振って、
「――では、ここで降ります。明日の二時に、そのレストランで」
「ええ」
田代は、
「降ります！」
と、大声を上げて、つかれて、うっかりしていたという風に、走って行った。
バスが走り出す。
依子は、窓の外の田代を、目で追った。
刑事か。――依子の心は、少し軽くなっていた。
私は一人じゃないんだわ！

依子は、裏の山道から、校舎を見下ろした。
バスで町へ戻って来れば人目につく。
タクシーで、町の外れまで来て、後は歩いて来た。くたびれたが、見られていないという自信はあった。
校庭は、もう静かになっていた。誰も遊んでいないのだろう。
多江はどこへ来るのだろうか？
校舎の中で待った方がいいのかもしれないと思ったが、あの雨の日の記憶が、それをためらわせた。
もちろん、まだしばらくは明るいし、二度も襲われることはあるまいと思ったが……。
後ろに足音がした。ギクリとして振り向くと、多江が立っている。
「先生、来たのね」
多江の笑顔に、ホッとした。
「教師は約束を守るのよ」
と、依子は言った。「さあ、案内してちょうだい。その〈谷〉っていう所へ」
「いいわ」
多江は肩をすくめた。「先生の意地っ張りにはかなわない。私も相当なもんだけど、先生の方が上手だわ」
「意志が強いとか、言い方があるでしょ」

と、依子は言い返した。

多江が先に立って、歩いて行く。

山の中の、依子など、まるで知らない道だった。

おまけに、道はどんどん狭くなって行くのだ。——そしてついに、ただ林の中を分け入って進んで行くだけになってしまった。

いくら若くて元気とはいえ、依子も都会っ子である。しばらく行くと、息が切れて来た。

「先生、大丈夫？　少し休もうか」

「平気よ」

と、言ってみたものの、「後、どれくらいあるの？」

「まだ半分」

「じゃ、休むわ」

依子は素直に言った。

12　影の中

依子と多江は、平たい岩の上に腰をおろして、休んだ。

風が渡って、汗ばんだ肌を乾かして行く。——静かだった。

「近道したの。きつかったかな」

と、多江が言った。
「運動不足でね」
と、依子は、ハンカチを出して、額を拭った。
「あなた、平気なのね」
「そうよ。だって、年中通ってるんだもの」
「年中？」
「うん」
「でも――町で、あなたの姿、見かけたことないわ」
「バス停に直接出るからよ。町は通らないもの」
「そうか。働いてるものね」
と言って、ふと依子は気付いた。「仕事、今日は？」
「休んだの。明日、早く出るから、って言ってね」
「私のために？　悪いわね」
「どうってことないわ」
多江は、遠くへ視線を向けた。「辛い生活には慣れてるもの」
依子は、少し間を置いて、
「――谷には誰かいるの？」
と訊いた。

「うちの一族、全部で――三十人くらいかしら」
と、多江は言った。
「三十人も？」
「家が六軒。谷の底に、固まって建ってるから、いつの間にか、〈谷のもの〉とか言うようになったのよ」
「――なぜ、あなた方だけが？」
多江は、ゆっくりと首を振って、
「村八分――というのかな、追いやられたのよ。私が生れて、間もなくだったらしいわ。私自身は憶えていないの」
「で、ずっとそこに？」
「そう。――もう十六、七年になるわ」
「あなた、学校は？」
多江が肩をすくめた。
「行ってないわよ」
「まさか！」
依子が唖然とした。「でも――ちゃんと住民票はあるわけでしょう？」
「書類の上では、行ったことになってるわ。ちゃんと出席簿もあるし、成績もついていて、卒業したことになってる。――でも、行ったのは一日」

「一日？」

「入学式の日よ。——そこで、私、寄ってたかって、服を破られ、泥の中へ投げ込まれたわ。母も同じ。二人して、谷へ戻って、それきり、一日も行かなかった」

依子は、体が震え出すのを、必死でこらえた。——多江の話し方は、ごく淡々としていて、それだけに、胸に食い入って来た。

「今まで、何人かの先生が、谷へやって来て、学校へ来てくれと話をしたわ。でも、行けばどうなるか、みんな知ってる。——その内に、その先生も、町を出て行った」

「——水谷先生は？」

「何もかも承知よ。でも、利口というか。小心というか。ともかく、角田の口ききで、何とか教師をやってられるんだもの」

「角田さんの？」

「水谷先生は、一度、学校のお金を使い込んだのよ。クビになるところを、角田が口をきいて助けてやった。——だから、言いなりなのよ」

依子は呆れて、怒る気にもなれなかった。

「それに、あの先生は、大体が日和見じゃないの」

と、多江は言った。

初めて、腹立たしげな響きが、多江の口調に混った。

「——今、谷の人たちの中で、小学校へ行く年齢の子はいないの？」

と、依子は訊いた。
「いないわ。――幸いね」
と多江は、微笑んだ。「いたら、先生、黙ってないでしょうね」
「当然だわ」
と、依子は言った。「教師として？　当り前のことじゃないの」
「おお怖い」
と、多江はおどけて見せた。「ねえ、先生、恋人、いるの？」
「え？」
「きっと恋人と話すときも、そういう調子なんだろうな」
依子は仕方なく笑った。
「でも――なぜ、そんなことになったの？」
「それは私が話すより、母に訊いてもらった方がいいわ」
依子は肯いた。
「みんな――谷を出て行かないの？」
「年寄りを置いて？　そんなこと、できないわ。行く所もないし、お金もない」
「あなたのように働きに出てる人も、他にいるの？」
「何人かね」
と、多江は言った。「でも、いいお金を取れる仕事にはつけないわ」

「あなたの恋人は、ここの人？」
「恋人？」
と、多江は訊き返して、「ああ、あのアパートのね」
思い出して頬をちょっと染めた。
「聞かれちゃったんじゃ仕方ないけど」
「聞いてないわ！　本当よ」
「むきになるところが愉快ね」
「大人をからかうもんじゃないわ」
依子は、多江をにらんでやった。
「あの人とは、あの町で知り合ったのよ。ここの人じゃないわ」
「でも、仲がいいんでしょ」
「傷をなめ合ってるだけよ。——寂しさを忘れるためにね」
多江の言い方は、まるで、生活に疲れた大人のそれだった。
「ねえ、あの叔母さんといってた人——大沢和子さんだったわね。何か分って？」
と、依子は訊いた。
「いいえ」
多江は、首を振った。「もう、みんな諦めてるわ」
「諦めてる……。どうして？」

「戻るはずがないもの」
「どうして諦めるの？　捜索願いでも出せばいいのに！」
「むだよ」
「そんなことないわ。現に、警察の人が――」
多江が依子の方を見た。
「何と言った？」
「刑事さんよ。県警の。――私に声をかけて来たわ」
「何のことで？」
「分らない。でも、あの町のことを調べるんだ、って」
「警察が……」
多江は、固い表情で、「でも、信用できないわ」
と言った。
「なぜ？」
「今までだって、ずいぶん私たちが悪者にされて来たのよ。何かある度に、『谷の奴ら』だって」
「警察は？」
「河村は、角田の飼犬だわ。――それに、事件といっても、この間のような、殺人まではなかったもの」

「でも、それなら――」

と、依子は熱心に言った。「却って、いい機会じゃないの！　殺人――それも子供よ。県警だって、放ってはおけないのよ。この機会に、実態をはっきり訴えたら？」

多江は、ちょっと肩をすくめた。

「簡単に言うけどね……」

「ええ。そうね。――ごめんなさい」

依子は、声を低くした。「局外者の私が、訳も分らずに――」

「そうじゃないのよ」

多江は、依子の手を握った。「ありがたいと思ってるの。でも、現実は、そう単純じゃないわ」

「ええ」

「みんな谷から出るのを恐れてる。――ひっそりと息をつめて暮してるのよ。勇気を出せといったって、とてもむずかしいわ」

それは、依子にも何となく分った。

「でも、このままにしておいたら――」

と、依子が言いかけたとき、

「しっ！」

と、多江が鋭く言った。「誰か来たわ」

二人は腰かけていた岩の陰に、かがみ込んだ。
「――誰かしら？」
「こんな所へ来る人、ほとんどいないんだけど」
と、多江は言った。
足音が、近付いて来た。
「一人じゃないわ」
と、多江が、低い声で言った。
なるほど、依子の耳にも、二人らしい足音が届いて来た。
「――おい、少し休もう」
と、男の声がした。
「だらしねえな、頑張れよ」
言い返した方の声は、依子にも聞き憶えがある。――町の雑貨屋の息子だ。
「だけど、重いぜ」
「早くしねえと、帰りが真暗になるぞ」
「そうか……。それもいやだな。よし、行くか」
「後は下りだ」
「帰りにゃ上りだぜ」
「荷物はないよ」

——二人の男が、また歩き出した。
「——何かしら？」
と、依子は言った。
「分らないわ。何かを捨てに行くのか……。でも、こんな山の奥まで、なんで」
依子は、そっと頭を出した。
二人の男たちの姿が、木々の間に、見え隠れしている。
依子は青ざめた。
「見て！」
「え！」
「あれを——」
多江も頭を出し、そして短く声を上げた。
二人の男がかついでいるのは、棺だった。
多江は青ざめていた。
「——きっと、叔母さんだわ」
「そう思う？」
「でなきゃ、こんな山奥に、埋める必要ないでしょう」
「そうね」
「今ごろどうして……」

「きっと、どこかへ一旦埋めてあったのよ。でも、私のことがあったりして、見付からないように、きっと掘り出して、埋め直すんだわ」

依子は、多江を見た。「――後をつけましょう」

「え？」

「どこへ埋めるか、見届けるのよ」

多江が肯いた。ためらいはなかった。

依子と多江は、岩陰から忍び出て、遠くに見える男たちの後をつけ始めた。

やがて、黄昏の気配が、山の影の中に、這い入って来る。

13　夜の校舎

男たちは、かなり山の奥深くへと分け入って行った。

「畜生！」

とか、

「いい加減にしてくれよ！」

といった声が上るのは、大分へばって来たせいだろう。

依子と多江は、用心しながら、男たちの後を尾けて行ったが、向うは、そんな用心をする余裕もないようだった。

「――こっちへ行くと、どこに出るの？」
依子は、低い声で訊いた。
「湖の方だわ」
「湖？　そんなもの、あるの？　初めて聞いたわ」
「湖っていっても、ただの池なの。少し大きいくらいの。町の人が、『湖』と呼んでるだけで」
「まだ遠いいの？」
「そうね……。私も、あまり行ったことがないけど、たぶん、この調子で行けば、まだ一時間はかかると思うわ」
依子たちはともかく、男たちは、棺という大荷物をかついでいるのだ。どんどん、ペースは落ちていて、尾行するのは至って楽であった。
「――もうすぐ陽が落ちるわ」
と、多江が言った。
実際、山の中は、そろそろ影の中に入って、ほの暗くなりかけていた。風が冷たくなっている。
「ワッ！」
と、突然、男の一人が声を上げたので、依子と多江は、一瞬、気付かれたのかと身を伏せた。
しかし、続いて、何かが岩にぶっつかるような音がしたので、事情が呑み込めた。棺を落

としたのだ。
「何だ、だらしねえぞ！」
もう一人が怒鳴る。
「だけど――もうだめだよ」
と、完全に参っている様子。
「俺だって疲れてるんだ。だけど、言いつけられた所まで運ばないと、後でどやされるんだぜ」
「分るもんか！――誰も調べに来るわけじゃあるめえし、ここで埋めちまおうぜ」
「だけど……」
と、ためらいながら、こっちもかなり迷っている様子である。
「ここだってあそこだって、大して変らないじゃねえか」
「そりゃな。――でも、ばれたら怖いぜ」
「俺たちが黙ってりゃ、分りっこねえよ。そうだろ？」
「じゃ、ちゃんと言われた通りの所へ埋めた、って言うのか？」
「それでいいさ。分らなきゃ関係ないだろ」
「うん……」
相手も息をついて、「よし、そうするか」
と賛成した。

「助かった！　じゃ、この辺を掘ろうぜ」
「じゃ、せめてわきの方にしよう。ここじゃ、人が通るかもしれねえ」
「じゃ、その木の陰だ。早くしよう。夜になっちまう」
「ＯＫ。じゃ、棺を運ぶぞ」
「そうなりゃ、力が出るさ」
「現金な奴だ」
と笑ったのは、雑貨屋の息子である。
二人の姿が、木の陰に隠れて、見えなくなった。
少しして、ザッ、ザッ、という音が聞こえて来た。穴を掘っているのだ。
「戻ろう」
と、多江が言った。
「えっ？」
「夜になるもの。明りも何もないんだよ」
そうだった。依子は、尾行に夢中で、そこまで考えていなかったのだ。
「――場所は分る？」
「うん、ちゃんと憶えてる」
と、多江は肯いた。
「あれを掘り出せば、動かぬ証拠になるわ」

「でも慎重にやらなくちゃ」

と、多江は首を振った。「あれが叔母さんだったとしても、町の人間が殺したって証拠はないんだもの」

「私が見たわ」

「反対の証人が、十人は出て来るわ」

と、多江は言った。「挙句に、谷の人間が犯人、ってことにされかねない。よほど慎重にやらなきゃ」

局外者の自分より、当事者である多江の方がよほど冷静なのに、依子は心を打たれた。

そこまでには、どれだけ、ひどい仕打ちを堪えて来た過去があったのだろうか。

「ともかく、今は戻りましょう」

と、多江は言った。「少しでも明るさの残ってる内に、町の見える所まで行かなきゃ。谷へ案内するのは、また今度だわ」

「残念ね。でも――」

歩き出して、依子は、ちょっと振り向いた。

「大変な切り札をつかんだわ。向うは、こっちに見られたことを知らない。この強味を利用しなきゃ」

足早に、来た道を戻りながら、多江が苦笑した。

「大変な先生もいたもんね」

「そうよ。教師だって、作戦を立てる能力は必要なんだから」
と依子は言ってやった。
辛うじて、町を見下ろす丘に辿りついた。
「――間に合ったわ！」
と、多江は息を弾ませた。
多江が息を弾ませているのだ。依子の方は、ハアハアと、肩で息をしていた。
「先生を迷子にさせちゃ、申し訳ないもんね」
と、多江は明るく言った。
たった今、叔母のものに間違いないと思える棺を見て来たばかりだ。それでいて、こうして、明るく振る舞っていられる。
その逞しさが、依子には羨しくもあり、また哀しくも思えた。
実際、もうすっかり夜になって、町は、ただ光の点の平面に過ぎない。
「ここからなら、大丈夫よ」
やっと、少し呼吸を整えて、依子は言った。「それより、こんなに暗くて、あなたは帰れるの？」
「私はコウモリだもの」
と、多江は言った。「超音波を出すの」

「まさか」
と、依子は笑った。
「吸血鬼の親類かもね。――慣れた道だもの、平気よ」
「さっきの二人に出会わないでね」
「お化けのふりして脅かしてやるわ」
多江は、二、三歩離れて、「じゃ、先生、またね」
と言った。
「待って！　明日、会える？」
「私は仕事よ」
「あのレストランに行くの。そこで刑事と会うのよ」
「そう」
「あなたとは、まだ知らないことにしておいた方が――」
「そうして。悪いけど」
と、多江は言った。「信じないわけじゃないの。ただ――」
「無理に、とは言わないわ。話の結果は、改めて……。じゃ、明日ね」
多江は、わざとかしこまって、
「おいでをお待ちしております」
と、言って、小走りに去って行った。

すぐに姿は暗がりの中に消え、足音の方が長く残っていた。

依子は、学校の方を回って、町へ戻ることにした。町へ入るところを、誰かに見られても、学校の方角からなら、怪しまれることはあるまい。

依子は、張り切っていた。

もちろん、あの棺を目にしたのはショックだったが、しかし、向うの弱味を握っているのだ。

せっかくつかんだ有利な札である。じっくりと構えて使おう。

学校が見えて来て、依子は足を止めた。

「変だわ」

と呟く。

——明りが点いているのだ。

こんな時間に誰が？　依子は、緊張した。

襲われて、裸にされた記憶がよみがえる。——しかし、用心していれば、そう不意をつかれることはない。

いざ取っ組み合いにでもなったら、負けちゃいないから！

依子は、学校へ近付くと、足を緩めた。——用心に越したことはない。

明りが点いていて、時折、影が揺れる。誰か、いるのだ。

依子は、校舎の中へ滑り込んだ。

静まり返った校舎。——廊下の奥に、光が洩れている。
パチパチ、という音。あれは何だろう？
依子は、耳を澄まして、考えていた。チーン、という音で、思い当る。タイプライターだ！
チーンと鳴るのは、キャリッジが戻る音である。
それにしても、誰がタイプなど打っているのだろう？　それも、あまりうまいタイピストではない。
雨だれ、というほどひどくはないが、しかし、およそ単調なリズムである。
依子は、そっと廊下を進んで行った。
何しろ古い校舎だ。時々、足下の板が、ギーッと鳴ったりして、肝を冷やしたが、タイプを打っている人間は、夢中らしく、気付かない様子だ。
今日は、探偵の真似ごとばかりだわ、と依子は思った。
明りの点いているのは、職員室である。では——水谷だろうか？
しかし、水谷が、こんな時間に学校へ来て仕事をしているなんて、ちょっと考えられないことだ。
慎重に、窓に寄って、顔を出してみる。
やはり、水谷だった。依子の方に背中を向けて、一心にタイプを打っている。
何だろう？——どうも、納得しかねて、依子は、目をこらした。
ハッとした。——傍の机に、手提げ金庫が置かれている。開けたままだ。

そうか！

多江の話を思い出した。水谷が、学校のお金を使い込んだことを……。

一度やれば、二度目はやさしい。三度目はもっとやさしいだろう。

タイプは、伝票に違いない。本校へ出す、一か月分の出金の一覧を、打ち直しているのだ。

自分が使った金に、何か名目をつけて、帳尻を合わせているのだろう。

何てことだ！

依子は、激しい怒りに、顔を紅潮させた。

怒りのこもった視線が、感じられたのかどうか、水谷は、ハッと振り向いた。

視線が合う。——一瞬、迷ったが、依子は、見られたからには強く出るしかない、と決心した。

「——お仕事ですか」

と、職員室に入って行く。

「やあ、どうも……」

水谷は、引きつったような笑顔を向けた。

分っているのだ。見られてしまったことを……。

「学校のお金ですよ」

と、依子は言った。

水谷は、フウッと息をついて、

「やはり、分りましたか」
と言った。「中込先生は鋭いからな。いずれ知れると思ってましたよ」
「いくらぐらい？」
水谷は、開き直ったのか、いとも平然と、言った。
「四、五十万というところでしょうかね」
「前にはいくらでしたの？」
水谷は、ちょっと顔をこわばらせた。
「なるほど……。よくご存知ですね」
「いくらでした？」
と、依子はくり返した。
「二百万ほどのものです。政治家あたりに比べりゃ、大したことはない」
「正当化するには、無理がありません？」
水谷は笑って、
「正当化したいなんて、思ってもいませんでしたよ」
と言った。
「不正を認めるんですね」
「もちろん。しかし――」
と、依子の方へ指を突き出した。「中込先生だって同罪ですよ」

「何ですって？」

「私一人が使い込んだという証拠はない。この手提げ金庫は、あなたも開けられるんですから」

依子はおかしくなった。

「おどしてるつもりですか？　そんなこと、調べればすぐに分ります。水谷先生は、警察の取り調べに堪えられる方じゃないと思いますけど」

水谷が、ちょっと青ざめた。

「届けるつもりですか？」

「他に、どうしろとおっしゃるの？」

「目をつぶる、という手もありますよ」

水谷は立ち上った。

「無理です」

「いいですか。そんなことをしたって、あなたには一文の得にもならない。二人でうまくやれば、百万や二百万の金はすぐに手に入りますよ」

「やめて下さい」

苛々して言った。

「しかし――」

「ともかく、聞くつもりはありません」

依子はタイプの方へ歩み寄って、水谷が打ちかけていた用紙を引き抜いた。
「これが証拠になるでしょうね」
それに目を通している間、警戒心が薄れていた。
水谷が、まさか襲いかかって来るとは、思ってもいなかったのだ。
突き飛ばされて、依子は床に転倒した。水谷がその上に倒れて来る。依子を押えつけようとした。
「何をするんです！」
依子は叫びながら、激しくもみ合った。
「何を――気取ってるんだ！――どうせ処女じゃないくせに！」
水谷が、まるで別人のように、荒々しく依子を組み敷こうとした。依子も、予想外のことに抵抗が遅れた。
「諦めろ！――どうせ――かなわないんだぞ」
水谷の手が、依子の胸元へ入ろうとする。依子は、水谷を甘く見ていたらしい、と思った。乱暴なことには縁のない男だと思っていたのだ。
しかし、見かけからは、思いもよらない力で、依子は押え込まれてしまった。足が依子の膝を割って来る。
かみついてやろうとしても、巧みに逃れて、そうはさせないのだ。
「どうだ――俺のことを馬鹿にしてたんだろう？――さあ、これで、どうだ！」

水谷の右手が依子の首にかかった。息がつまる。依子は必死で頭を振ったが、振り離すことはできなかった。

殺す気はないのだ、と依子は悟った。ただ、抵抗する力を失わせるためなのだ。

その力の入れ方。——依子は必死で、冷静になろうと努めた。

もう少し——もう少し我慢して！

依子は、ぐったりと、体の力を抜いた。半ば失神しているように見せかける。

「よし、それでいいんだ……」

水谷の手が離れた。

同時に、依子は体をひねった。水谷が横へ投げ出されるように引っくり返る。依子は飛び起きて、廊下へ向って走った。

「待て！」

水谷が追って来る。

廊下を走る依子の前に、人影が立った。

「助けて！」

と、依子は叫んだ。

「どうしました？」

河村だった。

依子を抱き止めると、びっくりしたように、

「先生、どうしたんです？」
と言った。
追って来ていた水谷が、足を止め、クルリと向きを変えて逃げ出した。
「ありゃ、水谷先生じゃないですか！」
と、河村は、呆れたように言った。
依子は、疲れ切っていた。廊下にヘナヘナと座り込んでしまったのだ……。
「何事です？」
と、河村が訊いた。
依子が事情を説明できたのは、十五分ほどもたってからだった。
「――なるほど」
河村は、タイプ用紙を眺めて、「これは問題だ」
と、ため息をついた。
「ともかく、不正にお金を使っていたんです」
「学校の先生がねえ」
河村は首を振った。「世も末だな」
「どうします？」
と、依子は言った。
もみ消されては困る。

「もちろん、先生には出頭していただくことになりますね。公金の横領と文書偽造、それに婦女暴行……」

「未遂です」

と、依子は付け加えた。

「未遂ですね。——いずれにせよ、あの先生はもうここへは戻りませんよ」

依子は、ふと、河村の言葉に、ひどく冷ややかなものを覚えた。

14　消えた刑事

一時過ぎ、依子は、レストランに入って行った。

いつもなら、勤め人も職場に戻って、店内が空いて来る時間だろうが、今日は日曜日だ。却って、混み出しそうな気配だった。

しかし、混むといっても、東京あたりの、どの店へ行っても満席で、順番待ちというひどい状態とは違う。

まず、空席がないということはない。

「奥の方の席になりますが——」

と、ウェイトレスが言った。

「構いません」

と、依子は肯いた。
却って、田代という刑事と話をするには好都合である。
ウェイトレスは、多江ではなかった。来ていないのだろうか？
ちょっと気になった。何しろ、昨日の今日である。
「いらっしゃいませ」
と、水が置かれた。
顔を上げると、多江が、ちょっとウィンクして見せる。依子はホッとした。
「ご注文は？」
「ランチをちょうだい」
田代との約束は二時だ。少し待って、ちょうどいい時間だろう。
「ランチですね」
と、多江は伝票を書いて、「太りますが、よろしいですか？」
と訊いた。
依子は吹き出してしまった。――この調子なら大丈夫だ！
「少々お待ち下さい」
多江が、奥へ引込んで行く。
依子は、楽な姿勢で座り直した。
水谷と争ったせいで、まだ体のあちこちが痛んだ。後で、お風呂に入るとき見たら、いく

つか、あざにもなっていたのである。

しかし——水谷はどうなるのだろう？

あの後、河村と共に、水谷の家へ行ったが、戻っていなかった。河村も、本気なのかどうかはともかく、

「学校の金を使い込むのはともかく、先生に乱暴しようなんて、いくら何でも許せませんよ！」

と、腹立たしげに言って、早速、県警に連絡していた。

もちろん、昨日の日付で、水谷は教師の職を解かれているはずだ。かつ、公金横領や、文書偽造、婦女暴行未遂で指名手配。

もう人生も終り、というところである。

依子は別に同情もしなかった。自業自得というものだ。

ただ、現実問題として、月曜日から、教師が一人不足することになる。本校に行って、相談しなければ……。

月曜日の授業を半日にして、本校へ行こうと、依子は思った。

本当のところ、仕事を離れても、水谷には興味があった。多江の言った通り、かつて、使い込みをしたときに、角田に助けてもらったのが事実なら、あの、一見平和な町の裏側も、よく知っていよう。

罪を軽くするような証言をしてあげるから、と言って、代りに情報を引き出すこともでき

そうだ。

今は、少しでも、真実を話してくれる人間がほしい。うわべの顔でなく、その裏側について、公の場で証言してくれる人が……。

ランチが来た。

ゆっくりと食べ始める。——町の人たちは大いに、依子に同情してくれた。

今日、出て来るときも、会う人ごとに、

「大変でしたね」

と、言われた。

しかし、その中に、依子を裸にして雨の中へ放り出した人間がいるかもしれないのだ。

それを考えると、激しい怒りがこみ上げて来る。

あの田代という刑事に、どこまで話したものか、依子は迷っていた。

多江は信じていないらしいが、それを責めることはできない。制度とか公の機関も、多江たちを守ることはできなかったのだ。

総て、他人というものを信じられなくなって当然である。

しかし、もし田代が、「向う側」の人間だったら、あんな風に近づいて来るだろうか？

いや、もちろん、依子がどこまで知っているのかを探ろうとしている、とも考えられる。

しかし、それならもっとアッサリと、学校にでも訪ねて来るか、県警本部へ呼び出してもいいだろう。

特に、角田栄子が殺された事件で、何度か依子も県警に足を運んでいる。

それなのに、わざわざあんな風に、そっと声をかけて来たのは、捜査そのものが、秘密に進められているせいかもしれない。

——ともかく、誰も彼も疑ってかかっていたら、きりがない。一歩も進めなくなってしまう。

依子は、自分の第一印象を信じよう、と思った。もちろん、全面的にではないにしても……。

二時になった。——客の数が、少しずつ減り始めている。

日曜日などは、一時から一時半ぐらいがピークなのだろう。その辺は東京と同じだ。子供連れの客が多いので、やけにやかましかったが、やっと少し静かになって来た。

二時十五分を過ぎると、店はほぼ半分くらいの入りになっていた。田代刑事は、姿を見せない。

どうしたのかしら。

場所が分らないのかな？　でも、刑事なんだから！

ちょっと苛立って来る。——大体、依子はきちんと約束の時間などは守るタイプである。待たせて平気という神経が、理解できない。

二時半。——結局、からかわれただけなのだろうか？

それとも何か他の理由があって、来ないのか。もう少し待って、来なければ出よう、と思

った。

そう決心したとき、田代がやって来るのが目に入った。

店に入ると、田代は、ちょっと店内を捜すように見回し、それから真直ぐに、依子の方へやって来た。

「お待たせして――」

と、座る。

「おいでにならないのかと思いました」

「尾行されないように、用心に用心を重ねて、来たものですから」

と、田代は低い声で言った。

「まあ、そうですか」

「本当はちょっと寝坊したんです」

と言って、田代は微笑んだ。

依子は笑った。この刑事、いい人だわ、と思った。正直というか、好感が持てる。

「いらっしゃいませ」

やって来たのは、多江だった。

「ああ、コーヒーを」

と、田代が注文する。

多江は、依子の方を、全く見なかった。

もちろん、田代のことは分っているはずだ。
「――実は、昨日の事件のことも、聞いて来ました」
と、田代は切り出した。「えらい目にあいましたね」
「ええ。でも、私が見たことに比べれば大したことじゃありません」
「見たこと？　何です、それは？」
「殺人です」
田代は、ちょっと表情を引きしめた。
「あの女の子とは別の、ですか？」
「そうです。私の目の前で、人が殺されました。そして、その事件は、誰にも知られていません」
「――話して下さい」
と、田代は言った。
その目は、真剣そのものだった。じっと依子を見つめている……。

「――彼に、どの程度、話をしたんですか？」
と、小西警部は訊いた。
――午後も遅くなっていた。
前夜、若い娘が喉を切られた事件で、夜通しの警戒態勢だったのである。

しかし、ついに容疑者すら、挙げることはできなかった。
やっと、非常態勢が解けて、小西はまた病院へやって来たのだった。
「ほとんど話しました」
依子はベッドに、起き上っていた。
「つまり、殺された女――大沢和子のことも？」
「ええ。棺が、山の奥に埋められていることも、です」
「なるほど。――『ほとんど』と言いましたね？　話さなかったことも？」
「ええ」
依子は肯いた。「多江さんのこと、そして、〈谷〉のことも、漠然としか話しませんでした。だって、現実にこの目で見ていたわけではありませんもの」
「なるほど」
小西は肯いて、「いや、あなたはしっかりした方だ。敬服します」
「やめて下さい」
依子は、ちょっと気色ばんだ。「あんな惨めなことになってしまったのに……」
「もうすぐ夕食の時間ですね」
小西は軽く言って、依子の気をそらした。「――その話をきいて、田代はどうしました？」
「ええ。話が――一時間ぐらいはかかったかしら。田代さんは、深刻な顔で、『そんなこ

とになっているとは知りませんでした』と、おっしゃって、どこか、案内したい所がある、と……」

「なるほど」

「どこ、とは言いませんでした。店を出ることになって、私、手を洗って行くから、と言って、田代さんに、先に出てもらったんです」

「多江さんと話をするため、ですね？」

「そうです。田代さんが、支払いを済ませて、店を出ました。私、多江さんの方へ歩いて行って、『後で会える？』と訊きました」

「向うは何と？」

「終りまで待ってくれれば、と。——八時に、店の前へ来る、と約束して、店を出ました」

「それからどこへ行きました？」

依子は首を振った。

「どこにも」

「というと？」

「田代さんはいなかったんです」

「何ですって？」

小西は、珍しく身を乗り出した。「あなたを待っていなかったんですか？」

「ええ。私もびっくりしました。遅れて出たといっても、ほんの一、二分のことです。その間に、いなくなってしまったんですもの」

小西は、しばらく口を開かなかった。

「――それからは？」

「私、しばらくその店の表で待っていました。三十分はいたと思います」

「田代は戻らなかった」

「そうです」

小西は、メモを取る手を休めた。

ひどく真剣な表情だ。いつもの、穏やかさが、このときだけは姿を消していた。

「――失礼します」

看護婦が顔を出した。「小西さん。お電話です」

「どうも。――じゃ、一旦、休みましょう」

小西は立ち上った。「食事の後、少しは大丈夫ですか？」

「はい。構いません」

「では、一時間ほどしたら、また」

小西は病室を出た。

津田は、ずっと隅で話を聞いていたが、二人になると、ベッドに寄って、依子の口にキスした。

「疲れたんじゃないのかい？」
「いくらかは……。でも、寝てるだけだもの。大丈夫よ」
「欲しいものがあれば、買って来るよ」
「そう？　じゃ――悪いけど、何か果物が食べたい」
「ＯＫ。お母さんに電話で頼もう。話の区切りがついたら、ここへ来るから知らせてくれと言われてるんだ」
「じゃ、電話してやってくれる？」
津田は、依子の手を取って軽く唇を当てると、病室を出た。
――受付の赤電話で、ホテルの依子の母へ電話して、切ると、小西が傍に立っていた。
「やあ、警部さん」
「どうも、ますます分らなくなりますね」
と、小西は首を振った。
「田代っていう刑事さんは、ご存知なんでしょう？」
「ええ。――行方不明なんですよ」
と、小西は言った。
「行方不明？」
「これは極秘でしてね。申し訳ありませんが、それしか言えないんです」
「分りました……」

何となく、ゾッとした。薄気味が悪いというのか。——これはただ、依子一人がひどい目にあったという事件ではないのだ。

頭では分っていたのだが、その恐怖が、肌に迫って来る。

「昨夜の事件は？」

と、津田は話を変えた。

「今のところ、手がかりなしです。——妙なことですよ。この町に、あんな犯行に及ぶ変質者がいたとは……」

「でも、どこにだって——」

「いや、それはそうです。どこの田舎町でも、犯罪はある。それは分っています」

小西は、首を振って、続けた。「しかし、ゆうべの事件は、妙です」

「というと？」

「なぜ、犯人はあの女性を襲ったのか？　恨みなら、突き刺すのが普通です。ただ、通り魔の犯行かもしれない。しかし、それにしても手ぎわがいい。もし、性的な犯罪なら、暴行の形跡もないのはおかしい」

「なるほど。喉を切る、というのは、確かに珍しいですね」

「しかも、技術的にも容易じゃありませんよ。いや、犯人が器用だとほめるつもりはありませんけどね」

小西の冗談めかした口調の底には、苦いものが混っていた。

「――警部！」

と、背後から声がした。

三木刑事である。こんなときでも、至って快活そのものだ。

「どうした？」

「目撃者です」

「よし、行こう」

小西の目が輝いた。「――津田さん、では失礼します」

わざわざ、そう言って行くのが、小西らしいところだろう。

津田は、依子の母が来るのを待って、病院の表に出た。そろそろ夕刻とはいえ、まだ少し明るい。

津田は、のんびりと通りの方へ歩いて行った。

ふと、通りの向う側へ目をやった。――白い車が、停っている。

昨日も、依子の病室の窓から、あんな車を見た。同じ車、と断言はできないが、しかし似ている。

ちょっとためらってから、津田は通りを渡って、その車の方へ歩いて行った。

今、車は空だった。中を覗いてみる。

シートの上に、双眼鏡が投げ出してあった。やはり、病室を覗いていたのだろうか？

誰の車なのか？　津田は、ゆっくりと周囲を見回した。誰もやって来る気配はない。

津田は、少し離れた電話ボックスの陰に入った。——車が見える。
誰かが、戻って来るはずだ。それを、見届けてやる。
しかし、津田は何分、刑事ではない。張り込みなどという、根気のいる仕事も、もちろんやったことがないのだ。
五分たち、十分たつと、ジリジリして来る。十五分もすると、苛々して、二十分たつとくたびれてしまう。
意外に大変なもんだな、と津田は思った。
その間に、依子の母が、果物を手に、病院へ入って行くのが見えた。
畜生、頑張ってやるぞ！
その決心も、十分と続かない。——もう諦めるか、と言いわけを捜していたとき、一人の男が、やって来た。
向うから歩いて来る。顔は見えない。暗いので、黒い影になってしまう。
あれかな？——男は、白い車のドアを開けると、双眼鏡を取り出し、車のわきに立ったまま、病院の方へとレンズを向けた。
「あいつ……」
いい加減、苛立っていたせいもあって、余計にカッと来た。
取っ捕まえてやる。——津田は、指を鳴らした。
やめとけばいいのに、とも思った。別に、ケンカなんて、ちっとも強くないのだから。し

かし、今はやたらとカッカ来ていたのである。
双眼鏡を覗いている男の肩に手をかけると、
「おい！　何してるんだ！」
とやったのである。
次の瞬間、相手の拳が、津田の顎にぶつかった。もちろん意図的に、である。
つまりは、殴られたのだ。
目から火が出るとはこのことで、チカチカと光が明滅したと思うと、たちまち目の前が真暗になった。
——気絶したのである。
どれぐらいたったのか、津田は、やっと頭を上げた。——顎が、ヒリヒリと痛む。
「やれやれ……」
慣れないことはするものじゃない。
やっとの思いで起き上ると、もう、あの白い車は、影も形もなかった。
津田は頭を振って、病院へと戻って行った。——とても依子には話せない。
「絶対に、だ！」
と、津田は言った。

15　三つの殺人

「目撃者」は、小西をがっかりさせた。
何しろ、小学生なのだ。しかも二年生。
果してどこまで信じていいものやら、と思った。しかし、そうは言えないし、万分の一でも、この子供が重要な証言をしてくれる可能性だってあるのだ。
家は、現場に近い。ほんの七、八十メートルというところか。
「この子ったら、何ですか、どうしてもお話しするんだと言いまして……」
母親は、ちょっと苦々しげだった。余計なことを言って、というわけだろう。
もちろん、子供が警察へ進んで協力を申し出たのだから、本来なら親も賞めてやるべきなのだろうが、実際には、
「厄介なことには係り合いたくない」
という意識が強い。
その気持は、小西にもよく分った。
「いや、ありがたいですよ。ともかく、まるで手がかりがなくて往生していたんです。どんな小さな情報でも、助かります」
「そうでしょうか……」

母親は、ちょっと照れたように言った。
「さて――」
小西は、当の子供の方へ向いた。「君は、いくつ？」
もちろん、年齢も知っているのだが、順序立てて話に入って行った方がいいのだ。
「八歳」
と、その子供は答えた。
しっかりした子だ、と思った。いい加減な作り話で、大人をきりきり舞いさせて喜ぶという手合では、少なくともないようだ。
男の子にしては、多少色が白い。都会的というべきかもしれない。
「そうか。――ゆうべの事件、知ってるね」
「うん」
と、少年は肯いた。
「君はそのとき、何をしてたの？」
「組み立ててた」
「ほう。何を？」
「ベンツ」
「ベンツ？」
と、小西が思わず訊き返した。

「あの――」
と、母親が口を挟む。「この子、自動車のプラモデルが大好きでして。やらせておくと何時間でもやっているんです」
「なるほど」
よくそういう子がいるものだ。子供の集中力というのは凄いものなのである。
「ベンツのプラモデルを組み立てていたんだね？」
「うん」
「それで――何を見たの？」
「車」
「車だって？　どの車？」
「白い車だった。サーッと通って行っちゃったけど」
「ほう」
小西は座り直した。「事件があったころなんだね」
「うん。車の中に誰か走って入って行ったのも見た」
「誰かが？――その誰かは、どっちから走って来た？」
「あっち」
少年の指したのは、現場の方角だった。
「で、車はどっちへ行った？」

少年の指は反対方向を指した。
犯人が車に乗って逃げ去ったということも、もちろん考えられないではない。
白い車か……。
「ねえ、どんな車だったか、分るかい？」
と、小西は少年に訊いた。
「国産車はよく知らないんだよ」
と、少年は、もっともらしく顔をしかめて首をかしげた。
「ほう、じゃ、外車専門か」
「ベンツとかＢＭＷなら、よく分るんだけど――」
少年の大人びた口のきき方に、三木刑事が笑いをこらえている。
「そうか。じゃ、犯人はそんなに金持じゃなかったんだろうな」
と、小西は肯いた。「車に、何か変ったところはなかった？　傷があるとか、絵が描いてあるとか……」
「別にないよ。ただの白い車で……」
「そうか。――じゃ、その車に駆け込んだ誰かの方は？」
「ちょっと遠かったけど、女の人だったみたい」
「女の人？」
これは面白い証言だった。

「髪が長かったし、服も長かったよ」
「服も？」
「うん。凄く長くて、フワッと広がってるんだ」
殺人者にしては、面白い服装である。
ただ、その小学生も、女性の服装に関しての知識は、あまり持っていないらしく、それ以上は聞き出せなかった。
「――いや、ありがとう。とても助かるよ」
と、小西は手帳を閉じた。「おじさんたち、本当に困っていたんだよ」
「そう？」
「そうさ。犯人を捕まえたら、またお礼を言いに来るからね」
小西は、母親にも礼を言って、帰りかけた。
「ねえ、おじさん」
と、少年が言った。「これ、いる？」
紙きれを出している。
「何だい？」
「あの車のナンバーだよ」
と、少年は言った。

看護婦の夜勤というのは、忙しいものである。
知らない人からは、
「眠くて困るでしょう」
などと言われるが、とんでもない。
眠くなる暇などはない。次から次へと、仕事は山のようにあるのだ。
「――眠い」
と、若い看護婦が欠伸をした。
ちょっと古手の方が、渋い顔をする。
ただ眠いのならともかく、勤務につく前、男と会って来たせいで眠いのを、ちゃんと知っているのだ。
「しっかりしなさいよ！　まだ十二時になったばかりよ」
「はあい」
もちろん、若い方は逆らわない。
平野紀子は、ここの看護婦の中でも、「うるさ型」で通っているのだ。
「――警察の人は？」
「さっきみえてましたけど。下へ戻ったんじゃありませんか？」
「そう。――あんたたちも、よく用心してね」
平野紀子は、一人で、歩き出した。

十二時を過ぎると、一度、一人で病院中を見回る。それが彼女のくせなのである。長年の勘で、何かあるときは、分る。音がしなくても、分るのだ。

実際、それで危ない状態の患者が、救われたことも、二、三度あった。

平野紀子の超能力、などと言われたものである。

——今日は、何事もないようだ。

いつにも増して、彼女の神経は敏感になっている。

ともかく、ああいう特殊な患者がいて、警察官がうろうろしているというのは、あまり嬉しい状況ではない。

ともかく、患者というのは、細かい異常にすぐ気付く。その点では、患者の方が、よほど超能力、と言えるかもしれない。

ともかく、早く正常な状態に戻ってほしいわ、と思った。

——ふと、足を止める。

何だろう？　自分でも、どうして足が止ったのか、分らなかった。

しばらくじっと立っていて、やっと分った。

階段の方から、物音がするのだ。誰かいるらしい。

患者がフラフラと出て来てしまうことも、珍しくはない。

平野紀子は、階段を覗いた。——下の方からだ。

人の声のようでもあり、何かの音のようでもある。

「誰かいるの？」
と、声をかける。
シン、と静かになった。人がいる、ということだ。
「誰なの？」
と、階段を降りて行く。「もう夜中ですよ――」
踊り場に、人影はなかった。非常階段への出口が、少し開いている。
誰か出て行ったのだろうか？　それとも、入って来たのか。
ドアを開け、外を覗いてみる。――誰もいないようだ。
ドアを閉める。そのとき、背後に誰かがいる、と感じた。
平野紀子は、少し太っていて、動作はあまり早くなかった。振り向く前に、彼女の喉に銀色の刃が走った。

依子は、田代刑事が姿を消した後、どうしたものか、途方に暮れてしまった。
一応、多江を待つ約束はしていたものの、大分時間がある。
レストランの近くで、まだ未練がましく立っていると、多江が店から出て来た。
「あら」
「あら、じゃないわ。何してるの？　姿が見えたから、びっくりして」
「それが――今話してた刑事さん、どこかに行っちゃったのよ」

多江は目を丸くした。
「まさか」
「本当よ。――ずっと待ってるんだけど、戻って来ないし」
「もう四十分になるよ、出てから」
「そう。――気になるわ」
と、依子は首を振った。
「私、今からお昼休みが取れるの。待っててくれる？」
「ええ、もちろんよ」
多江は店の中へ戻ると、すぐに制服を脱いで、出て来た。
「裏に静かな店があるわ」
と、先に立って行く。
およそ目に付かない、小さな喫茶店で、趣味でやっている、という感じだった。
「――先生のこと、〈谷〉で話してみたよ」
と、コーヒーを飲みながら、多江は言った。
「そう。それで？」
「みんな好感は持ってる。でも――先生のためには、危ないから、やめとけ、って」
「やめとけ？――何を？」
「私たちと係り合うことよ」

依子は静かに、微笑んだ。
「手遅れよ」
「そうね」
多江は、ちょっと笑った。「——学校で何かあったの？　噂を聞いたわ」
「そうよ。また襲われたの。でも、今度はちょっと違ってね」
水谷との一件を話すと、多江は顔をしかめた。
「その内、やるとは思ったけど……。危なかったわね」
「あの人一人ぐらいなら、負けやしないわ」
「強いんだから！　でも、油断が怖いのよ」
「分ってるわ。でも、この一件はもう公になったから……」
「それがおかしいわ」
と多江が言った。
「おかしい？」
「あの水谷を、そんな風に追い詰めたら、何をしゃべるか分らないじゃないの。——それぐらい町の人にも分ってるはずだけど」
「つまり……水谷を手配したのも、何か理由があるっていうわけ？」
「たぶんね」
と、多江は肯いた。「先生、充分に用心してね」

「そうするわ」

多江の話は、思いがけなかった。

もちろん、多江の思い過しということもあるだろうが、何といっても、依子は、根の深さを知らない。多江の忠告には耳を傾けるしかないだろう。

「今日は、明るい内に帰った方がいいよ」

と、多江は言った。「また、夜にでも、先生の所へ行くから」

「そうね。――じゃ、ご忠告に従うわ」

と、依子は肯いた。

「珍しく、素直に言うこと聞いた」

「失礼ね」

と、依子は笑った。

――町へ戻ったのは、そろそろ陽が傾いて来る時刻だった。

下宿先へ上ると、

「先生、お帰りで」

思いがけず、河村の顔が出て来た。

「まあ、河村さん。どうかしたんですの？」

依子は、ちょっとギクリとした。

つい、生徒に何かあったのか、と考えてしまうのである。

「お待ちしてたんです。水谷先生――いや、水谷がね、見付かったのですよ」
「そうですか。それで――」
「死んでいました」
依子は、
「死んで……」
と、呟くように言った。
「ともかく、来て下さい。つい、今しがたなんです」
「ええ、もちろん」
依子は、河村について、外へ出た。
――学校の裏手、あの、小川が、現場だった。
「子供が遊んでいて、見付けたんです。――びっくりしましたよ」
水谷の死体は、まだ河原にあった。布をかけられている。
「――自殺ですの？」
「それが……妙でしてね」
と河村は頭をかいた。「喉を切られているんです」
「喉を――」
依子は息を呑んだ。
「見て下さい。――いや、気が進まなければ、いいですよ」

「見ます。見せて下さい」
と、依子は言った。
町の人間が、七、八人、集まっている。子供も混っているので、河村が、
「みんな、あっちへ行け！」
と手を振って散らせた。
布がめくられると、依子は、一瞬、目をそむけた。
水谷とは思えない、歪んだ表情だった。
恐怖か、それとも恨みか……。そして喉が大きく切り裂かれている。
「自分で、喉を切っても、こうは行きませんよ」
と、河村は言った。
「そうでしょうね」
依子の声は震えていた。「ということは……」
「たぶん、剃刀のような、鋭い刃物でしょうが、ここにはない。つまり、どこかで殺されて、ここへ運ばれた、ということです」
「殺されて……」
依子は、布を戻した。「でも——誰が水谷先生を殺すんでしょう？」
「分りませんね」
と、河村は肩をすくめた。「それはこれからです。殺人となると、県警の担当ですからな」

「また、ですね」
「そうです。前の一件も片付いていないというのに」
依子はハッとした。
つい、無意識に口にしていたのだ。——依子のいう「殺人」は、大沢和子のことだった。
河村は、もちろん、角田栄子の事件について、言っているのだった。
そう。それを「二つ」と数えれば、三つの殺人が、この小さな町で、相次いだことになる。
急に、陽が落ちて、辺りが暗くかげり始めていた。

16　消えた依子

珍しく、小西警部は機嫌が悪かった。
といって、普通の上役と違うのは、やたらに部下を怒鳴りつけて、その不機嫌を解消したりしないところだ。
その分、ストレスはたまる。——仕方のないところだろう。上役か部下か、どっちかに、ストレスはたまるものなのだ。
小西が苛立っているのは、車のナンバーが分っているのに、車を割り出すのに時間がかかっているせいだった。
「まだなのか」

席から、電話を入れる。「もう何時間たったと思ってるんだ？」
「申し訳ありません、今、やっていますから――」
「早くしてくれ！」
小西は、受話器を置いた。苛々していても、叩きつけたりはしない。
「しかし、幸運でしたね」
と、言ったのは、三木刑事である。
こちらは至ってのんびりしている。小西と違うのは、結果が出るまでは休んでいられる、という発想の違いであろう。
「あの子供の記憶違いってこともある」
と、小西は言った。
「でも、あの手の子供は、結構、よく憶えてるもんですよ」
「該当の車がなかったら、また厄介だぞ。それに近いナンバーの車を全部洗い出さなきゃならん」
「そうですね。でも、ただ当てもなく歩き回るよりは……。中込依子の方はどうします」
「手は二本、頭は一つしかないよ」
小西はため息をついた。
「いっそのこと、町へ乗り込んでみませんか？」
「どういう名目で、だ？」

三木は肩をすくめた。
「何とでもつけられるじゃありませんか。未解決の殺人だってあるんだし」
「担当が違う」
「そりゃそうですが……」
「あの娘の話をもとにして、強制捜査に踏み切るのはむずかしい。証拠が残っているかどうか……」
「でも、田代のことがありますよ」
三木は真剣な口調になっていた。「刑事が一人、行方不明なんです。もっと力を入れて調べても、おかしくはないんじゃありませんか？」
小西は、三木の目を見返した。
「――気持は分る」
と肯く。「しかし、焦るな。一気にやる必要がある。向うは町ぐるみだぞ。下手をすると、町中を相手にしなきゃならん」
「そのときになりゃ、やりますよ。たとえ向うが東京都だって」
三木は、ちょっとむきになって言った。
「一度行ってみるのは、いいかもしれん」
と、小西は少し考えながら、言った。「あまり何もしないのでは、却って向うが怪しむ恐れがあるからな」

「やりましょう！　警部と僕の二人なら――」
「落ちつけよ。ともかく、この殺人が片付かんと、動きが取れない」
「車を割り出すのを、手伝って来ましょうか」
今度は、三木の方がせっかちになった。
ちょうどそれに答えるように、電話が鳴り出した。
「ほら来たぞ」
と小西はニヤリと笑った。「――小西だ。――そうか。言ってくれ。――何だと？」
小西の顔に、信じ難いという表情が浮んだ。
「――間違いないか？――よし、分った。ご苦労」
受話器を置くと、小西は、フウッと息をついた。
「どうしたんです？」
三木の質問が聞こえているのかどうか。小西は、ちょっと考え込んでいる様子だったが…。
「こいつは面白くなって来た」
と、小西は言った。
「え？」
「あのナンバーが誰の車のものだったと思う？」
「分りませんよ」

「当然だ」

小西は、メモした紙を、三木へ手渡した。三木はそれを見て、ちょっと目を見開いた。

「警部、これはもしかして——河村というのは——」

「あの町の、駐在所の巡査だ。あれは河村の車だった」

三木の頬が紅潮した。

「警部、これは——」

「うむ。どうしても、あの町へ行かねばならんようだな」

「じゃ、今夜の内にも出かけましょう！」

「いや、あの山道を夜中には無理だ。それに逮捕に行くわけじゃないぞ。あくまで、捜査だ。それを忘れるな」

「分ってます。じゃ、明日、朝一番で出かけましょう」

「そうだな、今夜は早く寝ておこう」

小西が立ち上ったとき、また電話が鳴り出した。

「今度は何だ。——ああ、小西だ」

顔が、こわばった。

「——よし、急行する。現場付近に非常線を張れ」

「何事です？」

「また殺しだ。同じように喉を切られた」

「何ですって？」
「しかも、現場はあの病院の中だ。行くぞ」
小西と、三木は、ほとんど駆け出すような勢いで、歩き出していた。

津田は、ホテルの部屋で、何となく寝苦しい夜を過していた。
眠っては起き、まどろんでは目が覚める。——理由は分らなかったが、ともかく、疲れていても、一向に眠れないのだ。
畜生。——ベッドに起き上って、津田は頭を振った。
どうして、こう寝つけないんだろう？
これならいっそ、アルコールでも一杯引っかけておくんだった。しかし、こんなホテルでは、およそそういう場所もサービスもあるまい。
冷蔵庫があったな、ビールぐらい入っているだろう。
いや、それとも、いっそシャワーでも浴びて、さっぱりした方がいいかもしれない。
——そのとき、ふと気付いた。
ドアの前に誰か立っている。——ドアの下から、廊下の明りが洩れているのだが、そこに、影が動いているのだ。
しかも、それは通過しては行かない。いつまでも、ドアの前を、右へ左へ、動いている。
誰だろう？——津田は、急に頭がはっきりと冴えてしまった。

津田とて、もともとあまり勇敢な方ではない。いや、どっちかといえば、臆病だし、できることなら、危ないことには近づきたくない、という性質である。

どっかへ行っちまってくれないかな、と半ば期待しつつ、津田は、その「影」の動きを見ていた。

が、一向に、それはドアの前を離れようとしないのだ。

津田はベッドからそっと出ると、スリッパをはいた。

ゆっくりとドアの方へ近付く。——ドアに、外を見るスコープがついているといいのだが、ここのドアには、それがない。

どうしようか？　津田はしばらく迷った。

そっとドアに耳を押し当ててみる。

色々な音はする。空調だの、水の流れる音だの……。

しかし、ドアの前に誰が立っているかまでは分らない。

よし、——津田は腹を決めた。

音がしないように、静かにドアチェーンを外す。そして一気にドアを開けるんだ。

いいか、行くぞ。——それ！

バッとドアを開けると……目の前には誰もいなかった。

一瞬、幽霊でも出たのか、とゾッとした。しかし、気が付くと——何のことはない。

天井の明りの、ちょうどドアのすぐ上の一つが、古くなったのか、チカチカと、明滅して

いて、それが、ドアの下から見ると、まるで何か動いているように見えたのだった。
津田は、大きく息を吐き出した。——笑いたくなったが、ちょっと自分が惨めでもある。
ま、いいや。何ともなかったんだ。
それに、誰かに見られていたというわけでもない。
津田は、ドアを閉めると、部屋の明りをつけた。——馬鹿だな、全く！
汗までかいている。結局シャワーでも浴びなきゃならない。
ふと、津田は、サイレンの音に気付いた。
ＯＬが喉を切られたときのことを思い出して、ハッとする。
サイレンは、また病院の方へ向ったようだ。
いくら何でも、まさか……。
津田は窓から、表を眺めた。——パトカーが続いて行く。
それだけではない。パトカーが、そこここに停って、警官が道へ出ると、動き回り始めた。
どうやら、また何かあったようだ。
突然、電話が鳴り出した。いや、電話としては、ごく普通に鳴ったのだが、状況が状況だっただけに、津田は飛び上らんばかりに驚いた。
「はい、津田です」
「小西です。夜中にどうも——」
「何があったんですか？　今、外を見ていたんです」

「また同じように喉を切られて殺されたんです」
「それはまた――」
「中込さんの入院している病院の中、なんですよ」
「何ですって？　まさか彼女が――」
「いや、殺されたのは看護婦です。ご心配だといけないと思いましてね」
「わざわざどうも。――良かったら、彼女の病室に行って、ついていてやりたいのですが」
「それは構いませんよ。待っていて下さい。誰かをそっちへやりましょう」
こんなときでも、小西の細かい気のつかい方に、津田は感心した。
十分としない内に、三木刑事がホテルへやって来た。仕度をして待っていた津田は、そのまま、すぐにホテルを出た。
――途中、車のナンバーから、それが河村の車だと分ったことを聞かされて、津田もびっくりした。
「それは凄い手がかりですね！」
「全くです。――あ、この件は口外しないで下さい。たぶん、中込さんにも伏せておいた方がいいでしょう」
「分りました」
と、津田は肯いた。
思いもかけないところから、手がかりが出て来たものだ。

「大きな事件が解決するときってのは、こんなもんですよ」
と、三木刑事は言った。
病院へ着くと、小西がやって来た。
「彼女は寝てるんでしょうか？」
と、津田は訊いた。
「さあ、現場の方が大変で、私も見ていないんです。行ってみて下さい」
「分りました。しかし――どうして病院の中で？」
「分りませんね」
と、小西は首を振った。「まさか、この中に犯人がいるということはないでしょうが……」
津田は、ちょっと青ざめた。
津田は、依子の病室のドアを開けた。
もちろん、中は暗い。――起してしまうといけないので、津田は、目が慣れるまで、待つことにした。
ベッドは、こんもりと盛り上って、依子はよく眠っているようだ……。いや、どこか変だ。
津田は、依子の寝息が、まるで聞こえていないのに気付いた。
まさか――依子！
津田は、明りを点けた。毛布をめくってみる。――そこにあるのは、丸めた毛布と、クッションだった。

「大変だ」
と、津田は呟いた。
しばし、どうしていいか分らず、立ちすくんでいた。
これは、ただ、部屋を出て行ったというだけじゃない。寝ているように見せかけているのだ。
「失礼」
と、ドアが開いて、小西が顔を出した。「どうです、彼女は？」
津田は、黙ってベッドを指さした。
小西の顔色が変った。

17　再び山中へ

「――誠に面目ありません」
と、河村が頭を下げる。
「じゃあ……車は盗まれた、というんだね？」
と、小西は言った。
「そうなんです。一週間ほど前のことでしたか――」
河村は考えながら言った。

「しかし――なぜ届が出てないんだ？」
と三木刑事が口を出す。
「申し訳ありません。いや、出さなきゃいかんとは思っとったんです。しかし、何といっても、私は警官で、車を盗まれた、しかも、キーをつけっ放しにしておいて盗まれたというんじゃ、何とも見っともない話で。つい、出しそびれておりまして」
「怠慢だな、それは」
「申し訳ありません」
河村は頭をかいた。
小西は、三木と、そっと目を見交わした。
うまく逃げたな、と二人の目は互いに言い合っていた。
「その車が、殺人に使われるとは、思ってもいませんでした」
と、河村は額の汗を拭った。
県警の、小西の机の前に立って、河村はいかにも自然に緊張している。
「分った。――一応念のため、確かに君の車かどうか、記録を見てくれ」
「かしこまりました」
河村は恐縮した様子で、頭を下げる。
小西は、部下の一人に言って、河村を案内させた。
「ごまかしですよ！」

河村が行ってしまうと、三木が腹立たしげに言った。
「うん。しかし、なかなか頭のいい奴だ」
小西は息をついた。「ああ言い張られたら、こっちとしても、嘘だと決めつけるわけにはいかん」
「このまま帰すんですか？」
三木は不服顔だ。
「まあ待て。――ここは、向うの言うことを信じたように見せた方がいい」
「しかし――」
「ここにいて、我々があばこうだと言っても始まらん。向うへ行ってみるしかないじゃないか」
「行くんですか？」
「もちろんだ。それを河村に悟られて、向うに、いつ我々が行ってもいいように準備されてしまったら、何もつかめない」
「分りました」
と、三木はやっと納得した様子で言った。
「警部さん！」
と声がして、津田がやって来る。「彼女の行方は分りましたか？」
ほとんど寝ていないのだが、さすがに緊張で、目が輝いて見える。

「残念ながら、今のところ手がかりはありません」
と、小西は首を振った。
「どうするんです！」
津田が詰め寄る。「彼女に万一のことがあったら――」
「お気持はよく分りますよ」
と、小西は言った。「必ず依子さんを見付け出します」
「ちゃんと、生きた彼女を見付けて下さいよ」
と、津田は言って、それから、自分の言ったことにびっくりしたように、「いや――まさかそんなことはないと思いますが……」
と、付け加えた。
小西は、しばらく、何事か考え込んでいたが、やがて一つ息をつくと、
「我々も同じ気持ですよ」
と言った。
「いや、すみません。別にあなた方が怠慢だと言ってるんじゃないんです」
「行ってみますか」
小西が、津田の言葉を無視して、ポツリと言った。
「――え？」
「あの町へ、ですよ。――表向きは捜査ということでなく。どうです？」

くり返しているように、津田は英雄でも何でもない。だから、すぐに、

「行きます！」

という言葉は出て来なかった。

だが、数秒間してから、

「行きます」

と言った。

一般民間人としては、まず立派なものであろう。

「警部、もちろん私も――」

と、三木刑事が言った。

「ああ、もちろんだ。しかし、それには、昨夜の事件のけりをつけて行かなきゃならん。――ともかく、そのために一日二日はかかりますね」

津田はちょっと不満だった。しかし、だからといって、一人で先に行くだけの度胸もない。

「先に行かれますか？」

と、小西に言われて、津田は答えに困った。

「そうですね――もちろん、その――しかし――」

大切な部分は抜けているのである。

「しかし、ここの事件の責任者は私ですから、私は動けませんが――」

小西は、三木の方をちょっと見て、「この忙しいときに、休暇を取る、けしからん奴もい

ます」
と言った。
三木は苦笑して、
「分りました。じゃ、一つのんびりと旅行でもして来ますよ。——津田さん、お付合い願えますか」
「いいですとも！」
津田はホッとして、即座に肯いた……。

小西は、首をひねった。
おかしい。——どう考えてもおかしいのである。
「おい」
と、振り向いて、見張りに立っている警官を呼んだ。
——病院の建物の裏手である。
非常階段があり、ここには、警官が一人、夜通し立っていたのだ。
もちろん、今は昼間である。しかし、夜でも、決して身を隠すのに、便利な場所とは言えない。
「何でしょうか？」
と警官が小走りにやって来る。

「ゆうべ事件のあったとき、ここに立っていたのは君か？」
と、小西は訊いた。
「はい、そうです」
「ここから離れなかったんだな？」
「はい」
警官は頬を紅潮させて、「絶対に、ここから動きませんでした！」
と強い口調で言った。
小西は微笑んで、
「君が嘘を言ってると思ってるわけじゃないぞ」
と言った。
「はあ……」
ここに警官が立っていて、誰も出入りしなかったとなると、看護婦、平野紀子を殺した犯人は、病院の中を通って、逃げたということになるのだ。
そんなことが可能だろうか？
犯人そのものは、おそらく返り血を浴びていないだろう、と検死官は話していた。
それだけ、手なれた殺し方だったのだ。
しかし、被害者が、そんな「殺し屋」に狙われるようなタイプの人間でなかったことははっきりしている。

そんな風に、「殺し」に慣れた人間、というのは、どんな人物だろう？
ただの変質者として片付けるには、その手口はあまりに鮮やかだった。
といって、そんな「殺し」のベテランが、どうして看護婦を殺したりするだろうか？
そして中込依子が消えたことと、どう関連しているのか。
小西は、ぶらぶらと、まるで散歩でもしているように、病院の表の方へと回って行った。
この地方都市にとって、続けて起った、この二つの残忍な手口の殺人事件は、大センセーションである。
責任者としての小西の立場も、微妙なものだった。
しかし、小西はもともと、その類のことをあまり気にしない。いくら上の方からやかましく言われても、事件が早く解決するわけではないのだ。
むしろ焦りが、捜査方針を誤らせることの方を心配する。だから、どんな風当りも、正に「柳に風」と受け流しているのだ。
もちろん、小西が事件に心を痛めていないわけではない。やたらと「哀悼の意」を表明したがる上層部に比べても、たぶん小西の方がずっと胸を痛めていただろう。
ただ、それをあくまで表に出さない。——それが小西の違っているところなのである。
それにしても、と小西は思った。こんな事件にぶつかったのは初めてだ。
ただの凶悪な事件というだけではない。その裏に、何かが潜んでいる。
小西はいやな予感がしていた。

これで終らないのではないか。また、同じような惨劇が起るのではないかという予感が……。

小西が病院の玄関へやって来ると、医師が出て来た。

「やあ、先生」

と、小西は言った。

事件の捜査に関連しても、何度か世話になったことのある、五十がらみの、人の好さそうな医師である。

「何だ、君か」

「何だ、はないでしょう。ゆうべから、何度も出入りしてるのに」

「そうか。君の担当だね」

「そうです。頭が痛いですよ」

小西は苦笑した。「寝不足のせいもありますがね」

医師の古川は、ちょっと笑って、

「寝不足を治す薬を教えてやろうか」

と言った。

「いただきたいですね」

「眠ることだな」

と、古川医師は言った。「どうだね、お茶でも」

「ありがたい！　それは名案ですな。一向に気付かなかった」
と小西は息をついた。
古川は笑って、
「息抜きを忘れるというのは、疲れている証拠だよ」
と、小西の肩を叩いた。
古川は白衣を脱いで丸めて持つと、近くの喫茶店の扉を押した。
「いらっしゃいませ、先生」
と、店の人間が声をかける。
「――どうしていちいち、白衣を脱ぐんですか？」
と、小西は席について訊いた。
「これを着て入ると、他の客がいやがる」
「そんなものですかね」
「医者も刑事も、似たようなものさ」
と、古川は言った。「――おい、ブルマンをくれ」
「こっちも同じだ」
と、小西もウェーターに声をかけた。「――刑事と医者ですか」
「ああ。いざというときは必要だが、いつもはあまり関り合いたくない、という点ではね」

「なるほど」
「もし君が、警察手帳を見せながら、この店に入って来たら、他の客はいい顔をしないだろう」
「それはそうでしょうね」
「医者も同じだ。白衣を着て入ると、みんないやな目で見る」
古川は、水を一口飲んで、「どうなんだね？」
と訊いた。
「どうも妙です」
小西の声は低くなっていた。
「ほう？」
「病院の外から、犯人が侵入し、外へ逃げたという可能性が低い。ゼロというわけではありませんが」
「それなら話は簡単じゃないか」
と、古川はアッサリ言った。「犯人が病院の中にいる、ということだ」
「そんなことを言ってもいいんですか」
「構うもんか。ただの推測としてならね」
古川は笑って、「――しかし、噂にでもなれば、病院は大打撃だな」
「そこが気になります」

と、小西は肯いた。
「殺人鬼のいる病院に入院する奴もあるまいしな」
「何か影響は出ていますか」
「さあ。それは分らんな。しかし、患者が大挙して逃げ出したとも聞いとらん」
「病院内での内偵を進めても、かまいませんかね？」
「必要ならやりたまえ」
と、古川は即座に言った。「こっちとしても、早く犯人を挙げてほしいからな」
「努力しますよ」
小西はホッとした。
この町の最大の、というより、唯一の大病院である。その力は大きい。
病院内に変質者がいるというのでは、大変な騒ぎになろう。病院側が、一切関り合わないという態度を取るのは、目に見えていた……。
「院長に話しておくよ」
と、古川は言った。
「よろしく」
実は、それこそが、頼んでおきたいことだったのだ。
「しかし、君も一応、院長に挨拶しておいてくれ」
と、古川は言った。「ああいう偉い人は、無視されるのを一番嫌うんだ」

「よく分っています」
小西は肯いた。
ふと、時計を見る。——もう、三木と津田が出発したころだ。
自分は、いつ追いかけられるだろうか？

18　すれ違う顔

「内偵といっても、むずかしいだろう」
病院の方へ戻りながら、古川が言った。
「そうですね。まさか、同僚の中に、女の喉を切りそうな人はいませんか、と訊いて回るわけにもいかないし」
「咽喉科の医者かな」
と、古川は白衣を着ながら言って、笑った。
「殺された看護婦ですが——ご存知でしたか？」
「もちろん！　超ベテランだよ。有能だったし、口もうるさかった」
「恨みとか、そんな犯行ではないと思いますが、一応その線も、全く無視するわけにいきませんので」
「私生活があるよ、看護婦にも」

と、古川は言った。「つい、忘れがちになるがね」
「医者にもですね」
と、小西は微笑みながら言った。
病院へ入ると、とたんに、
「古川先生。――古川先生」
と、呼び出しがかかる。
「やれやれ。これでも医者に私生活があるのかね」
と苦笑して、古川は、「じゃ、さっきのことは、間違いなく院長へ話しておくよ」
と言って、歩いて行った。
頼りになる男だ。
病院は、いつもの通り、混雑していた。もちろん、待合室で順番を待っている患者たちも、事件のことを知らないはずはない。
しかし、ここへ来ると、何となく、その話は控えてしまうようだ。
患者というのは、不思議なものである。
さて――小西は、のんびりと、病院の中を歩いて行った。
犯人が、病院の中にいると仮定して、ではどんな人間が考えられるか。
医師。看護婦。――これは当直の何人かに限られる。
入院患者。その可能性はある。

そして患者の付き添い。

しかし、一人一人、全部の人間を調べることはできない。その必要もあるまい。

ただ、問題は、いつまた、殺人が起るかもしれないということである。

この病院の中で。——それを、どうやって食い止めるか。

もちろん早く犯人が捕まれば、言うことはないのだが、今日中に、というわけにもいかない。

病院の中を、警戒するしかない。

何人か、刑事を泊り込ませよう、と小西は思った。各階の廊下に、見張りに立たせる。

それで、犯行を防ぐことはできるだろう。

ただ、逆に、犯人を捕えるのはむずかしくなる。気付かれないように見張るなどという芸当は、映画の中ぐらいでしかできやしないのだ。

——それにしても、中込依子はどこへ行ったのか？

自分から姿を消したのか、それとも誘拐されたのか。

いずれにしても、ここから、どうやって出て行ったのか……。

謎が多すぎる、と小西は思った。

もっと無理をしても、彼女の話を終りまで聞いておくべきだった。

今となっては、もう遅いが……。

「聞いておくべきでしたよ」
と、車を運転しながら、三木刑事が、言った。
津田は肯いた。
「小西さんとしては、彼女に気をつかってくれたんでしょう」
「人がいいんですよ」
と、三木は微笑んだ。「でも、あんな風だから、もっと出世してもいいのに、一向に……」
「でもいい人ですね」
「全くです。僕も尊敬してますよ」
――互いに、小西のことを話しながら、道の半ばまで来た。
小西の話なら、無難だった。そのせいもある。
しばらく、二人は黙っていた。車は段々、小道へと入って行く。
カーブも多く、話をしている余裕もなかった。
少し道が広くなった所で、三木は車をわきへ寄せて止めた。
「――どうしたんです？」
と、津田は訊いた。
「どうしますか」
「どう、って……」
「町へ真直ぐ入るか。――しかし、考えてみて下さい。あそこは大体観光地でも何でもな

い。そこへ我々がのこのこ行って、別に何の用もない、と言って、信じてもらえますかね？」

言われてみればその通りだ。

「しかし――じゃあ、どうしようと？」

「谷へ行ってみませんか」

「谷へ？」

「依子さんが話していたでしょう。〈谷〉のことを」

「ええ。しかし――どこだか、分るんですか？」

「地図を持って来ました。コンパスもね」

「手回しがいいですね」

「町の連中に気付かれてしまったら、どうやっても、谷へ行くことはできなくなりますよ。どうです？」

津田も、その点は同感だった。

「道が分りますかね」

「かなり遠回りになりますが、車で、できるだけ近くへ行って、それから山へ入りましょう」

三木は地図を広げて、「――ほら、この辺りだと思うんですよ」

と、×印をした箇所を指さした。

「研究してるんですね」
と、津田はびっくりして言った。
「山歩きが趣味なので」
と、三木はちょっと照れくさそうに言った。
「いいですとも。行ってみましょう」
と、津田は肯いて言った。
「決った！　ただし、これは警部には内緒ですよ」
「分りました」
車が再び走り出した。
「――どこへ行ったんでしょうね」
と、三木が言った。
「彼女ですか？――町へ連れ戻されたんじゃないかと思うんですが」
「そう。それが一番心配ですね」
「万一のことがなきゃ、いいんですが……」
「しっかりした人ですね、彼女は」
「ええ。僕よりは、よほど」
津田は正直に言った。
「あなたも面白い人だな」

と、三木は笑った。

「――車が来ますよ」

反対側から車がやって来た。すれ違うのがちょっと大変な道幅だ。

三木が車をぎりぎりに寄せて、停めた。すると――やって来た車が、三木たちの車の傍で停ったのである。

「これはどうも、三木さんでしたね」

と、窓から顔を出したのは、河村だった。

「これはどうも」

三木は、ちょっと面食らった様子で、「よく分りましたね」

「スピードを落としたので、お顔が見えたんですよ」

と、河村は言った。「町へおいでになるんですか？」

「いや、もっと先です。人を送って。――あなたは？」

「例の車のことで。始末書を書かされましてね。全く、面目ない話ですよ」

と笑って、「では、お気を付けて」

「どうも」

河村の車が行ってしまうと、三木は、肩で息をついた。

「今のは――？」

津田が不思議そうな顔で訊く。

「ああ、あなたは直接見たことがないんですね。河村ですよ、駐在の」
「あれが――」
津田は、顔に血が昇るのを感じた。
依子の話の中で、何度も「出会って」いるのだが、実際に顔を見るのは初めてである。
「知ってたんだ」
と、三木は言った。
「え？」
「我々のことをですよ。今の車の停め方は……。つまり、町じゃ、我々が行くのを承知してるというわけですね」
「どうして分ったんでしょう？」
「さあ」
三木は首を振った。「――ともかく、行きましょう」
再び車が走り出す。
その後、二人はほとんど口をきかなかった。

19　谷へ入る

津田は、いつも、妙だな、と思っていた。

吸血鬼の出て来る映画を見ていると、必ず最後には、主人公たちが、吸血鬼の棲む城へ乗り込んでいくのだが、城へ着いたころはいつも夕方なのだ。

そして、陽が沈む前に、吸血鬼の眠る墓を見付けなくてはならないので、ひどく焦って駆け回るのである。

馬鹿だなあ、と津田は見ながら思うのだった。もっと朝早く出て、真昼の内に城へ着いとけば、のんびりと捜せるじゃないか。

もちろん、それでは、夕陽が沈むのと、吸血鬼の胸に杭を打ち込むのとどっちが早いか、というサスペンスは生れないから、仕方のないことかもしれない。

しかし、いくら何でも、城へ着いたら、いかにもわざとらしく陽が沈もうとするのには、苦笑してしまうのだった。

――三木刑事と二人で、車を降りた津田は、もう、辺りに少し夕暮の気配が漂い始めているのを見て、ふと、自分が、吸血鬼の城へこれから乗り込もうとしているように思えたのだった。

「ここから先は歩くしかないですね」

と、三木刑事は言った。「山歩きの経験は？」

津田は肩をすくめて、

「高尾山くらいなら……」

と言った。「ハイキングに毛の生えた程度ですよ」

「そうですか」
三木は微笑んだ。「しかし、ここは別に登りじゃありませんからね。道は悪いだろうけど、迷わなきゃ、大丈夫でしょう」
「そろそろ暗くなりそうですよ」
と、津田は空を見上げて、言った。
まだ、青空は出ているが、まぶしいような輝きは、既に消えていた。
「懐中電灯が二つあります」
三木は、ダッシュボードから取り出した一つを津田へ手渡した。「大型だから、もしもの時は、武器にもなりますよ」
津田が、ちょっと不安げな表情を見せたのに気付いたのか、三木は、
「まあ、心配はありませんよ」
と付け加えた。「僕も拳銃を持ってますしね」
これでは却って不安になる。
ともかく、津田は一つ深呼吸をして、肯いて見せた……。
道は、林の中に消えていた。そこから、二人は歩き出した。
ゆるい上りだが、十分も歩くと、津田は、都会に慣れ切った足の弱さを痛感させられてしまった。
息を弾ませているのを、前を行く三木に気付かれないように、用心した。やはり、いくら

かはプライドというものがある！

三木は、かなり山道に慣れているようだった。若い——といっても、二十八の津田と、そう違いはないと思うのだが、日頃のきたえ方の差であろう。

三木が振り向いて、

「大丈夫ですか？」

と訊いた。

「ええ。まあ、何とか」

「もう少し行っておかないと、日が暮れてしまいますからね」

「大丈夫ですよ。どんどん行って下さい」

ちょっと無理をして、津田は言った。

それからしばらくは、二人とも無言で歩き続けた。

林を出ると、谷間の狭い道になった。

草木は少なくて、岩だらけの道である。早く陽がかげって、足下が少し見にくくなり始めている。

しかし、まだ懐中電灯をつけるほどでもなかった。

津田は、もうすっかり汗をかいていた。ハンカチを取り出して額や首筋を拭う。

三木は、黙々と歩き続けていた。

津田は、ふと妙なことに気付いた。——三木は、少しも迷わずに歩いている。地図も持っ

ているはずだが、一回もポケットから出さないのだ。
大丈夫なのだろうか？
三木の足取りには、ためらいがなかった。まるで——そう、まるで、よく知っている道を歩いているかのようだ。
しかし、三木はそんなことを言ってはいなかった……。
三木が足を止めた。
「少し、休みましょうか」
「そうですね」
津田は、手近な、比較的平らな岩に腰をおろした。歩みを止めると、汗がどっと出て来る。
三木は、座ろうともせず、高い岩の上に上って、先の方を眺めていた。
——いよいよ黄昏が迫っている。
空気がひんやりと肌に当って、ゆるやかに流れて行った。少しすると、汗をかいた背中が冷たい。
三木が岩の上から飛び降りて来た。
「身軽ですね」
と津田は言った。
「今度歩き出すときは、もう懐中電灯がいりますね。足をくじいたりすると困る」
「もう、どれくらい来たんですか」

「半分は、たぶん――」
と、言いかけて、三木は津田の顔を見た。
津田は、探るように三木を見ながら、言った。
「知ってるんですね、『谷』の場所を。でなきゃ、どれくらいかかるか、分らないでしょう」
三木は、ちょっと表情を固くした。
「地図で見ただけですよ。山歩きは慣れてるから、距離も見当がつきます」
津田は、敢えて、それ以上は言わなかった。何といっても、ここは三木が頼りである。こんな所で放り出されたら、ただでさえ方向音痴なのだ。迷子になるに決っている。しかし、三木がなぜ――いや、たとえ「谷」への道を知っているとしても、それをなぜ隠すのか？
ただの思い過しかな、と津田は思った。
「出かけますか」
と、三木は言った。
いくらか言い方が素気ない。
津田は腰を上げた。
少し行く内に、すっかり夜になっていた。懐中電灯の光など、せいぜい足下と、目の前の三木の背中を照らすだけだ。
月が出ていない、曇った夜だった。

三木は、明らかに道を熟知していた。ともかく、この暗さの中で、全く、迷うこともなく進んで行くのだ。

ただ、地図を見ただけでは、こうは行かない。——しかし、津田も、くり返しては訊かなかった。

それに、やたらに石がゴロゴロしている道で、足をくじかないようにするのが精一杯だったのだ。

異様な静けさだった。——いくら山の中でも、鳥の羽音や虫の声、風に梢のこすれ合う音ぐらいはするものだが、津田の耳に届くのは、自分たちの足音と息づかいだけだった。

本当に、怪物の城にでも向ってるみたいだな、と思った。十字架でも持ってくればよかった。

その内、狼の遠吠えでも聞こえて来るかもしれない。

——不意に三木が足を止めた。

周囲が開けた、という気がした。風が流れて来る。

「どうしたんですか」

と、津田は言った。

三木が何か言いかけたとき、雲が切れた。白い月光が、周囲をほの白く浮び上らせる。

それは、まるで舞台にライトが当ったような、鮮やかな効果だった。

広い山裾へ出て来たらしい。周囲に、なだらかな山並が見える。

「ここは……」
「あの町から山を一つ越えたんですよ」
と、三木は言った。「ご覧なさい」
「え？」
「あれが、『谷』です」
道は、そこから、ずっと下りになっていた。そして、その奥に、山の懐に、まるで潜り込むようにして、いくつかの家が目に入った。
「あれが……」
と、津田は、息をついて言った。
まだ、距離はありそうだが、ともかく下り坂である。
三木は、津田の方へ、ちょっと照れたような顔を向けた。
「黙っていて申し訳ありません」
「何のことですか」
「僕は、『谷』の出身なんです」
津田は、唖然とした。三木は続けて、
「もちろん、このことは、小西さんも知りません」
と言った。
「つまり、あそこの生れ、というわけですか？」

「ええ。もっとも、十年以上前に、出てしまったんですがね。――そのころはまだそうひどくなかった……」
「よく道を憶えていましたね」
「もちろんですよ。いつも通っていたんですから」
と、三木は微笑んだ。
「あの谷にいるのは、みんな一族なんでしょう？　つまりあなたも――」
「僕の場合はちょっと特別でしてね。東京にいた両親が事故で死んで、ここへ引き取られたんです。いくらか血のつながりはありますが」
三木は、ちょっと顔を曇らせた。「中込依子さんが見たといった、刺された女――大沢和子というのが、僕の叔母なんです」
「じゃ、あの多江という娘も――」
「多江のことはよく知っています。妹のようなものだった。とても我慢強い子でした」
三木は、谷の方へ目をやった。
「やっぱり、どうかしてしまったんだな」
と、三木は首を振った。「ご覧なさい。一軒の家にも、灯が見えないでしょう」
津田は、言われてみて、やっと気付いた。
「なるほど。――誰もいないのかな」
「分りません。行ってみましょう」

三木は歩き出して、振り向き、「大丈夫ですか？」と訊いた。

「もちろん。そのために来たんですよ」

正直なところ、一人だったら、こんな夜にあの谷へ入って行く気にはなれなかっただろう。

――下り道は、意外に手間取った。

三木は、いとも軽々と下りて行くが、津田の方は膝がガクガクしそうで、ついて行くのに必死だった。却って、怖さを忘れられたのも事実だが。

平地について、息をつくと――もう、目の前に、家が並んでいた。

古びた家屋が、六軒。どれもかなり古ぼけているが、一応しっかりした造りだ。

確かに、どの家も、明りを消して、ひっそりとしている。人がいるという気配が感じられないのだ。

三木は、少し前へ進み出ると、

「誰かいないか！」

と声を上げた。

声が周囲の静寂へと広がって行く。――しかし、反応はなかった。

「いたら返事をしてくれ！――誰かいないのか！」

三木は、しばらく待って、それから首を振った。

「誰もいないようですね」

と、津田は言った。

「何があったのか……。家の中へ入ってみましょう」

三木は一軒の家へと歩いて行った。「ここで僕はしばらく暮していたんです。——大沢和子という叔母の家でした」

玄関の戸を叩く。もちろん、返事はなかった。

「——戸が開きますよ」

と、三木が言って、ガラリと開けた。「戸締りもしていない。どうかしてる」

三木の姿が中に消えた。

津田は、何だか、真暗な家の中に入って行くのも気がひけて、表に立っていた。

——たった六軒の家。

ここに三十人ほどの人間が住んでいた。

そして今は？——どこに行ってしまったんだろう？

家の中で、チラチラと三木の懐中電灯の光が動いている。

依子の話で、この谷の住人たちに、何か恐ろしいことが起ったらしいことは分る。しかし、それがどんなことなのか、とても津田の想像力では思い及ばなかった。

栗原多江という娘は、どうしたのだろう？

——三木が、この谷の人間だったというのは、津田にもショックだった。

依子の話を、三木はどんな思いで聞いていたのだろう？

——なぜ、気付かなかったのか、津田にもよく分らなかった。

ともかく、いつの間にか、左右に男が立っていたのである。それぞれ一人ずつ、しかも、上背のある、大柄な男だった。

予想していた危険でも、いざ目前に迫って来ると、なかなか実感できない。

男たちがゆっくりと近付いて来て、津田は初めてゾッとした。

「三木さん！」

と、開いたままの玄関へ飛び込む。「来て下さい！　変な男たちが——」

だが、その先を言うひまはなかった。

目の前に誰かが出て来る。三木だと思った。——とたんに津田は、腹を殴られて、体を折った。

体が重くなる。そして、床に倒れて——津田は気を失っていた。

20　白い影を追う

何かが起りそうだ。

小西には、そんな予感があった。

小西は、刑事の勘というものを、あまり信じない。その点では、珍しい存在だった。

たいていのベテラン刑事は、まず、直感的に犯人の目星をつけ、証拠を当てはめて行こう

とする。

小西は、むしろ逆だった。直感的に、怪しいと思う人間がいたら、それ以外の人間に、むしろ目を配るようにする。

それで、ちょうどバランスが取れるのである。

しかし、確かに勘というものはある。それは小西も分っていたし、否定してはいなかった。ただ、犯人を挙げるときには、それはむしろ邪魔になるのだ。

——何か起るかもしれない。

こういう直感は、たとえ外れても、大した害はない。当れば、その「何か」を防ぐことができるかもしれない。

「今夜、ここへ泊り込む許可をもらいましたよ」

病院の中にある、お世辞にもうまいとは言えない食堂でカレーライスを食べながら、小西は言った。

一緒にいるのは、古川医師である。

こちらはコーヒーだけ。

「ほう？　すると寝ずの番か」

「いや、寝ますがね」

小西はとぼけた顔で言った。「しかし、万一のとき、すぐに対処できます」

古川は、ちょっと周囲へ目をやって、

「目立たんようにすることだな」
と言った。
「心得てますよ」
「患者ってのは、ともかく勘が鋭いもんだからな。あんたが刑事だってことは、すぐに見破ってしまうだろう」
「おとなしく、引っ込んでましょう」
小西は素直に言った。
「——また何かありそうかね」
「何とも。しかし……」
「しかし？」
「そんな気がするんです」
「根拠はないのか」
「確たるものはありません」
と、小西は首を振った。「しかし、どうも、状況から見て、犯人が病院から外へ出ているとは考えにくいんです」
「なるほど」
古川は肯いて、「病院側でも、人を出すのか？」
「これは我々だけでやります」

小西はきっぱりと言った。

「しかし、犯人がそう続けてやるかな」

「分りません。しかし、可能性はあります。ともかく、外へ出て殺人を犯し、病院へ戻って来るとすると、必ず途中で見付かっているはずです。――犯人が病院の中の人間だったら、外へ出られず、きっと苛立っているでしょう」

「分った。――しかし、気を付けろよ。相手もなかなか手強い」

「寝首をかかれないようにしますよ」

と、小西は言って笑った。

しかし、内心、小西はヒヤリとしていたのだ。

眠っている間に迫って来る白い影、そして剃刀の刃が、自分の喉を切り裂く……。

そんなことも、もちろんあるのかもしれない。

「コーヒーを」

と、小西は急いで注文していた。

眠気は遠慮なくやって来た。

小西は、当直室の隅で、椅子にかけていたが、午前二時ごろになると、さすがに瞼がくっついて来る。

張り込みとはちょっと違うので、緊張感がないのである。

「コーヒーでもいかがですか」

と、若い当直の医師が声をかけてくれる。
「こいつはどうも」
小西はたち上って、伸びをした。
「大変ですね」
「いや、どうせむだ骨だとは分ってるんだが――」
あまり、医師や看護婦たちに、不安を与えてはいけない、と小西は思っていた。
「さあ、どうぞ。インスタントですけどね」
と、医師は、紙コップを小西へ手渡して、言った。
「隠すことはありませんよ」
「どうも。――隠す、というと？」
「この病院の中に、殺人鬼がいる、ってことです」
小西は、びっくりして医師を見た。
「どこでそんな話を？」
「みんな話していますよ」
と、医師は肩をすくめて、「今夜は、患者がなかなか寝つかなくて大変でした」
「知らなかったな、それは……」
「患者は、考えたり、想像したりするしか、仕事がありませんからね」
小西は、熱いコーヒーをゆっくりとすすった。

「――どうなんです」
と、医師が言った。「正直なところ、目星はついてるんですか」
小西は首を振った。
「さっぱりですね。――万が一、というだけですよ」
あまり、この若い医師と話しても意味はない。しかし、少なくとも、小西にとって、眠気を防ぐ効果はあった。
小西は、一応、話しても構わない程度のことを、医師に説明してやった。
「面白いですね」
「それはちょっと――」
小西は苦笑した。
「いや、病院の中では、〈死〉は日常の出来事です。でも、これはちょっと違う。いわば、〈死神〉がこの病院の中を歩き回っているというわけですね」
「死神か。まあ、そうかもしれませんな」
小西は肯いた。「――いや、コーヒーをありがとう」
医師は、ちょっと廊下の方へ目をやって、
「もし僕なら……」
と言った。
「何です？」

「いや、もし僕がその犯人だったら、どこへ隠れるかな、と思ってね」
「中は捜索済みです」
「霊安室も？」
小西は、ちょっと間を置いて、
「もちろんですよ」
と言った。
「しかし、その間は他の所へ隠れていて、調べ終った後、死体のふりをして寝ていれば、見逃すかもしれませんよ」
「なるほど」
「死体の顔にかけた白い布を取ってみるというのは、なかなかできないことですからね」
小西は、しばらく黙っていた。
まさか、とは思うが、しかし……。
いいさ、どうせ、ここにいてもウトウトしてしまうのだ。
「どうです、先生」
と小西は立ち上って、言った。「霊安室を見に行きますか」
「いいですよ。——こちらも実のところ、眠かったんです」
「寝不足で？」
「大きな手術があったのでね」

二人は廊下へ出た。「――もっとも、眠いのは、その後、ポーカーをやり過ぎたせいかな」

小西は、ちょっと笑った。

地下へと、階段を降りて行く。つい、足音すら、気をつかってしまうのだった。

「――今、誰か霊安室に？」

「いや、今日はないはずです」

と、医師は言った。

階段を降り切ったとき、ヒョイと看護婦が現われて、小西は、思わず声を上げそうになった。

「キャッ！」

と、向うもびっくりした様子。「――先生ですか」

と、息をつく。

「何をしてるんだい？」

「毛布を取りに。――どこへ行かれるんですか？」

「霊安室だよ」

「まあ、肝だめしですか」

と、看護婦は笑った。

「誰もいなきゃ、どうってことはないさ」

「あら、でも……」

小西は、足を止めた。
「誰かいるんですか？」
「たぶん」
医師と小西は顔を見合わせた。
「――見たのかい？」
「ちょっと覗いたんです。そしたら……。見たような気がしますけど」
「しかし、今日、亡くなった人はいないだろう？」
「私は存じません。私の来る前かと思ってましたけど……」
「行ってみましょう」
と、小西が促した。
二人は、ちょっと薄暗い廊下を進んで行った。まさか、と思ったことが事実になることもある。
「ここです」
医師が、ドアに手をかけて、ためらった。
小西が代って、ドアを一気に開けた。
安置する台の上は、空だった。
「誰もいないよ」
と、医師が、ホッとしたように、言った。

「あら、おかしい」
と、看護婦もやって来る。「――変ですね。気のせいかしら？」
小西は、ふと、顔を引きしめた。足早に、台の方へ歩いて行くと、かがみ込んで、
「どうやら、確かなようですね」
と言いながら、拾い上げたものを、医師へ見せた。
白い布が、床に落ちていたのだ。
「誰かが、死体のふりをして、ここにいたんだ」
小西は、きびきびした足取りに戻っていた。廊下へ出て、階段へと急ぐ。
一刻も早く、警官たちを、警戒態勢にしておかなくてはならない。
階段を上り切ったとき、廊下の奥から、鋭い悲鳴が聞こえて来た。

小西は、一瞬、身動きできなかった。
起ってほしくないことが起ったとき、つい、信じることを拒んでしまうのだ。
廊下を、誰かが走って来る。
「助けて！　誰か――」
若い看護婦だった。小西は、やっと我に返った。
「どうした！」
と、駆け寄る。

「誰かが、あの病室に――。音がするので覗いたら、いきなり飛びかかって来て――」
「分った。どの部屋だ？」
「二番目の――」
小西は駆け出した。無意識に、拳銃を抜いている。
まさか、病院の中で発砲するわけにはいかない。しかし、少なくとも相手がひるむ効果はあるだろう。
ドアが少し開いていた。小西は一旦足を止め、それから一気にドアを開けて、中へ入った。身を低くして、攻撃に備える。――しかし、何の反応もなかった。
小西は、左手で壁を探って、明りを点けた。白い病室が、まぶしい光の中に浮び上る。
だが――誰もいなかった。
人が隠れるほどの場所はない。小西は、窓の方へと駆け寄った。
開けた形跡はなかった。
ズズッと、床に、何かがこすれる音がした。――しまった、と思った。
ベッドの下にいたのだ！
小西は振り向いた。床へ這い出した、その女の右手が、横へ、払うように動くと、小西は、左足首に、鋭い痛みを覚えて、よろけた。
窓へ、もたれかかりながら、小西は、左足を刃物で切られたのだと知った。
傷は深いようだ、と直感的に思った。血が噴き出すように流れ出る。

小西は、床に崩れるように倒れた。
女が、立ち上った。——白いガウンが、赤黒く汚れている。
「そうか！」
と、小西は叫んだ。「やっぱり、君か！」
中込依子だった。
剃刀を手にして立っているのは、中込依子だった。——しかし、その女は、依子であって、また依子ではなかった。
目に、じっとすわった狂気がある。——まるで熱に浮かされているようだ。
一種の夢遊状態なのだ、と小西は思った。おそらく、彼女自身、何も知るまい。
依子が、剃刀を振りかざした。
「やめなさい！」
と、小西は叫んだ。「やめるんだ！」
苦痛が襲って来た。激しい痛みで、気が遠くなりそうになる。
「やめなさい！」
と、小西はくり返した。
拳銃は、まだ握っていた。銃口を依子へ向ける。
「やめろ！」
依子が目を見開いて、小西の上に——。

引金を引く。
銃口が下を向いていたのは、故意か偶然か、小西にもよく分らなかった。
銃弾は、依子の右足のふくらはぎをかすめて飛んだ。依子が、アッ、と声を上げた。
銀色の刃が手から床に落ちる。
依子は、足を押えて、うめいた。——しかし、倒れなかった。
ドアの方へ向って、よろけながら歩き出す。その前に、警官が立ちはだかった。
「取り押えろ！」
と、小西は怒鳴った。「逃すな！」
小西は起き上ろうとして、左足の痛みに堪え切れなかった。
もう一度倒れながら、
「手荒にするな——」
と、言っていた。
そして、小西は気を失ってしまった……。

21　恐怖の記憶

「——気が付いたか」
と、言ったのは、古川医師だった。

小西は、目を何度も、開けたり閉じたりした。——病院のベッドに寝ているのだ。
「参ったな。——今、何時ですか」
と、小西は訊いた。
「十一時だ。昼間のね」
小西は、軽く頭を振った。
「ひどいですか、傷は？」
「切り傷だからな。無理に動かさんことだ」
「違います。彼女の方ですよ」
と、小西は苛立つような口調で、言った。
「ああ、そうか。——向うはもっと軽い。かすり傷だ」
「それは良かった」
小西はホッと息をついた。
古川は笑って、
「君は変ってるよ」
と言った。「まあ一週間は安静だな」
「とんでもない！」
小西は起き上って、顔をしかめた。
「そら！　傷口が開くぞ。どうしても動くのなら、車椅子だ」

「押して下さい」
「図々しい奴だ。部下に押させろ」
「分りました。一人、呼んで下さい」
「君は、しばらく休まんといかん」
「そうはいきません。謎を解かなくては」
小西は、古川の方を見て、「彼女は、憶えてますか」
と訊いた。
「君を傷つけたことか？　いや、まるで憶えとらんらしい。自分のけがの原因も、よく分らないんだ」
「それでいいんです」
小西は肯いた。「黙っていて下さい」
「奇妙な話だな、しかし……」
「一種の催眠状態でしょう。何かのきっかけで、起き出す……」
「厄介なものだ」
「しかし、もう分ったんですから、後は彼女を見張ればいいんです。すみませんが車椅子を――」
「どうしても、か？」
「もちろん」

小西は、もう、いつもの小西に戻っていた。「それから、服の着替えを持って来させなくては」
と言って、軽く息をついた。

依子は、小西を見て、びっくりしたように、目を見開いた。
「どうしたんですか？」
「いや、ちょっと、ドジをやって――」
小西は、車椅子を操って、依子のベッドのわきへ来た。
「足を？」
「軽いけがですよ」
と、小西は言った。
依子は、いくらか青ざめていたが、正常な様子に戻っていた。
「でも、変ですわ」
「何がです？」
「私も、足をけがしたんです。ゆうべ、全然記憶にないんですけど」
「なるほど」
小西は微笑んだ。「それは面白い。私たちは、何か特別な縁があるのかもしれませんよ！」
依子も笑顔になった。

本当は、小西としては、とても笑う気分ではなかったのだ。
こうして座っていても、傷はズキズキ痛んだし、それに、自分が人を殺したと知ったとき、依子がどうなるか、それを考えると気が重かったのである。
「ところで、話の続きをうかがわせて下さい」
と、小西は言った。
「はい。——どこまで話しましたっけ」
「学校の金を使いこんだ水谷が、他殺死体で発見されたところでした」
「ああ、そうでしたわね。——あのとき、私は——」
と言いかけて、依子はふと、「津田さんはどうしました?」
と訊いた。
「急用で、東京へ戻りました」
「そうですか……」
「また、すぐここへ来ると言っていましたよ」
依子は、軽く、心細げに、肯いた……。

水谷の死の後、依子は大変な忙しさになってしまった。
当然、本校から来ると思っていた教師が、都合がつかなくて、来られなくなったのだ。
本校へ電話して、校長に直接話をしてみたのだが、

「今は、人手がね」

と、くり返して、「当分、あなた一人で何とか頑張って下さい」

というわけである。

二人分、月給をくれるわけでもないのに、と、依子は腹が立った。

しかし、子供たちは毎日学校へやって来るのだ。それを放り出しておくわけにもいかない。

依子は、必死でやりくりして、授業を午前と午後に分け、何とかこなすようにした。

もちろん、事件のことも気になるが、やはり、まず教師としての、任務を果さなくてはならない。

一週間が、たちまち過ぎて行った。

田代刑事のこと、多江のことなど、時々、心配にはなったのだが、一日は二十四時間しかなく、しかも、眠る時間と食事の時間以外は、ほとんど働きづめだった。

これでは、どうすることもできない。

やっと土曜日が来て——それでも、午後まで授業をしたので、一息ついたのは、もう夕方だった。

職員室で寛いでいると、河村が顔を出した。

「先生、大丈夫ですか？」

と、やって来る。

「河村さん」

「先生が倒れちまうんじゃないかと、みんな心配してますよ」
「ありがとうございます。でも、これくらいのことでは、へこたれませんわ」
と、依子は言った。
「いや、大したもんですな」
と、河村は笑って、「警官になったら、先生はきっと今ごろ警部さんだ」
「そういえば――」
と、依子は言った。「水谷先生を殺した犯人の方は？」
「ええ、実は昨日、県警の方とも話をしたんですがね」
と河村は言った。「ちょっと、怪しいのがいるんです」
「まあ」
「先生、いつか町へ行くバスで一緒だった娘がいたでしょう」
「娘……」
「栗原多江という娘です」
依子は、動揺を悟られないように、苦労した。
「そんな名前でしたね」
「どうもあの娘が怪しいということでしてね……」
「まさか」
と、つい、依子は言っていた。「だって――あんな殺し方、女の子にできると思われます

か？」

「分りません」

と、河村は肩をすくめた。「しかし、不可能ではありませんよ。鋭い刃物ならね」

「何か理由が？――動機があるんでしょうか」

「あの娘は、この学校に、恨みを持っているんですよ。教師にも、当然ね」

「でも、殺すなんて……」

「何とも言えませんな」

河村は首を振った。「ともかく、一応、あの娘に目をつけているようです」

多江に。――多江に水谷殺しの容疑がかかっている！

もちろん、依子は信じなかった。

多江が、そんなことをやる理由はない。

しかし、河村の話で、県警が、彼女を取り調べることは、充分に考えられる。

そうなったら、多江は、無理に、犯人にされてしまうかもしれない。

多江は知っているのだろうか？

「――先生も、明日はゆっくりと休まれた方がいいですよ」

と河村は言って、「では、これで」

と、丁寧に頭を下げ、出て行った。

――何をしに来たのだろう？

依子は首をかしげた。
多江が、疑われていることを、なぜわざわざ、依子に知らせたのか？
依子は時計を見た。——これから、多江の働く店まで行く時間はあるだろうか？
放っておくわけにはいかない。
依子は急いで、机の上を片付けた。
学校を出る依子を、ずっと遅れてつけている人影があった……。

22　危険な叫び

依子が、多江の働いているレストランに着いたのは、もうすっかり夜になってからのことだった。
「——多江さん？　今日は来てないんだよね」
と、話を聞いて、店の主人は首を振った。
「お休みですか」
「いや、電話もない。珍しいことなんでね、心配してたんだ」
「そうですか」
依子は、がっかりした。同時に、不安にもなる。
多江の身に、何か起ったのではないか。

しかし、河村は、まだ多江を逮捕するようなことは言っていなかった。ただ、何か多江に急用ができたのならいいが、河村が、わざわざ、あんなことを言いに来たのが、依子には気になっていたのである。

何かあるのだ。——何か。

偶然と考えるのは不自然だ。

依子は、レストランを出た。どこへ行こうか？　といって、あの町へこのまま戻るのは——。

「そうだわ！」

と、依子は呟いた。

この町にいる、多江の恋人。あそこへ行けば、何か分るのではないか。

でも——どう行くんだったかしら？

依子は、あのアパートを捜して行けるかどうか、自信がなかった。

しかし、やってみるしかない！

ともかく、まずバス停に行った。そこから出発する。

ともかく、この前は、ずっと多江の後を尾けて行ったのだ。道を憶える余裕などなかった。案の定、たちまち依子は道に迷ってしまった。右も左も分らない町である。

しかし、ともかく、道を訊くにも、目的地の住所もアパートの名前も分らないのだ。どうしようもない。

ただ、捜し歩くしかないのだ。たまたま、うまく、目指す場所へ出ることを祈って……。

——幸運の女神が微笑んでくれたのは、一時間たってからのことだった。

依子はもうヘトヘトに疲れていた。——歩くこと、そのことは大して苦労ではない。しかし、いつになったら、そこへ辿りつくのか分らずに歩いているというのは、辛いことだった。

それでも——ヒョイ、とそこへ出たときは、ポカンとしてしまった。

どう考えても、今の道を三回は通ったような気がするのである。でも、確かに、ここへ出たのは初めてだ……。

ともかく、着いたのだ！

部屋には表札も出ていなかった。きっと、面倒くさがって、出していないのだろう。

依子はちょっとドアの前で、呼吸を鎮めてから、ブザーを鳴らした。

——誰も出て来ない。返事もない。

ブザーを、二度、三度と、くり返し押してみる。——しばらく待ったが、何の応答もなかった。

出かけているらしい。もしかすると、どこかで多江と会っているのかもしれない。

それならそれでいいのだが……。

ここで待っていようか？

ただ、どことなく、おかしかった。

部屋の明りは点いている。窓が、明るくなっているのだ。しかし、耳を澄ましてみても、

人のいる気配がない。

十五分ほど、表に立っていたが、一向に戻って来る気配はなかった。どうしたものか、依子は迷った。

せっかく捜し当てたのに、帰る気にはなれない。それに、明りが点いているのだから、戻って来るだろう。

そして——何気なく、依子は、ドアのノブを回してみた。ドアが開いて来る。

ずいぶん無用心なことだ、と思った。

開けっ放しで、こんなに長い間、留守にするなんて……。

何だか、おかしい、と思った。

「いますか」

と、小さな声で言って、中を覗き込んだ。「あの——誰か——」

玄関へ、一歩入る。

「ええと……。あの——誰かいます？」

依子は、そう声をかけて、部屋の中を覗き込んだ。

首を伸ばして、奥を見たとき、それが目に入った。

ギョロリと白眼をむいた男の死体、首に、細い紐が巻きついている。

依子は、しばらく、それがＴＶの映像か何かで、時間がたてば消えてしまうのではないかと思って、立っていた。

いや、実際には、何も考えずに、立っていたのだ。——どれくらい？
一時間か、一分か、それも定かではなかった。
あの多江の恋人に違いない。しかし、なぜ、誰に殺されたのだろう？
いや、そんなことは後で考えればいいのだ。
今は——この場でどうしたらいいか、それを考えるのが先決である。
「落ちついて。しっかりして」
と、口に出して呟く。
あまりに思いがけないことに出くわしたとき、いつも依子はこうするのだった。
ともかく、このまま放っては行けない。
しかし、ここで警察へ連絡したら、しばらくはあれこれ訊かれて、引き止められるだろう。
それに、ここへなぜ来たのか、そこから説明しなくてはならない。
それは容易なことではなかった。
そうだ。——それに、もしかすると、多江に容疑がかかることも考えられる。
ここは、一旦引き上げるしかない。
そう決めると、後は割合に考えがまとまった。ともかく、まずハンカチで、手の触れた所の指紋をふき取る。
ドアのノブも、である。——重要な証拠を消してしまったのかもしれないが、仕方あるまい。

外へ出て、アパートの名前を憶え込んだ。
もちろん、周囲に人のいる気配はなかった。
依子は歩き出した。
大方の見当で歩いて行ったのだが、今度はスンナリとバス停に着いた。
依子は、公衆電話で一一〇番へかけ、アパートの名前を言って、
「そこの二号室に、死体があります。よろしく」
とだけ言って、切った。
向うは、さぞかしキョトンとしていることだろう。
依子は、バス停に行って、何食わぬ顔でバスを待っていた……。

戻るバスの中で、依子は、やっと事態を検討し始めた。
あの男は、なぜ殺されたのか？
多江の行方を知っていると思われたのかもしれない。少なくとも、この時期に殺されたというのは、偶然ではないのではないか。
何か関連があるのだ。——おそらく。
水谷が殺され、多江に疑いがかかる。
そして、多江の恋人が殺された。
——多江がやるはずはない。しかし、多江はどこにいるのだろう？

バスを降りて、暗い道を歩くのも、大分慣れた。
もちろん、危険を感じないわけではないが、少し開き直って来ているのである。
学校に、明りが見えるのに気付いて、依子は緊張した。水谷がいない今、学校へ夜来ているような人間がいるはずはない。
もしや。——多江ではないか、と思った。
依子は、少々無鉄砲だとは分っていたが、一人で、足音を忍ばせるでもなく、校舎の中へ入って行った。
明りは職員室だ。——依子は、廊下に立って、声をかけた。
「誰なの？」
自分が明りを消し忘れたことはない。
ここを出るときは、いつもしつこいぐらい、確かめている。
職員室の中へ入る。——依子の机の明りが点いていた。
「誰かいるの？」
と、もう一度言った。
そのとき、いきなり、後ろから手が伸びて来た。
ぐい、と依子の肩をつかむ。依子は、思わず、
「キャッ！」
と、声を上げた。

「先生、危ないですよ」
河村だった。「こんな時間に、何をしてるんです？」
依子は、何とか平静を装った。
「どうも……。明りが見えたので」
と、机の方を手で指した。「河村さんが点けたんですの？」
「いいえ。私は今、来たところですよ」
「おかしいわ」
と、依子は首をかしげた。「じゃ、誰がつけたのかしら」
「先生、点けたままにしておいたんじゃありませんか？」
「いいえ。でも――」
依子はちょっとためらって、「そうかもしれませんね」
と言った。
もし、ここに多江がいたのなら、わざわざ河村にそれをほのめかしてやる必要もないだろう。
「町へ戻られますか」
と、河村が言った。
「ええ」
「じゃ、ご一緒に」

断るわけにもいかない。
心残りではあったが、明りを消し、河村と一緒に、校舎を出た。
「――お出かけでしたか」
と、河村が訊く。
分ってるくせに、と、ちょっと腹が立ったが、それを押し隠して、
「デートですの」
と、おどけて見せた。
「やあ、そりゃ羨しい」
河村は微笑んだ。「先生、さぞ、もてるでしょう！」
「とんでもない。振られてばっかりなんですよ」
「そうかなあ。――町の連中は、恐れ多くて、手が出せんでしょうが」
「怖くて、じゃないかしら」
と、依子は笑った。
――町は、何となく様子がおかしかった。
ざわついている、というのか。夜のこの時間にしては、人が出歩いていた。
それも、珍しく、足早に、忙しく動き回っているのだ。
「どうしましたの？」
と、依子が訊いた。「何かあったんでしょうか？」

「ああ、みんな騒いでるんです」
と、河村は、大して気にもしていないようだ。
「どうして？」
「ああ、言い忘れてた」
と、河村は笑って、「昼間――というか夕方お話しした、栗原多江という女の子ですが」
「その人が何か？」
「今、留置してあるんです」
と、河村は得意気に言った。
依子は、一瞬、足を止め、
「留置？」
と訊き返していた。「でも――何か証拠が？」
「まず、あの娘が犯人ですよ」
と、河村は断言した。
「でも――その人は、今、どこにいるんですか？」
「ここの留置場です。みんなが騒いでるんですよ」
「というと……」
「あの娘が、角田栄子ちゃんも殺したという噂が広まってるんです」
「何ですって？」

依子は息を呑んだ。
「いや、どうしてそんな話になったのか、よく分らんのですよ」
と、河村は首を振った。
「――町の人たちは、何を騒いでるんですか？」
「血の気の多いのがいますからね」
「まさか――私刑を？」
「言うだけです。やる奴はいませんよ」
そんな話が出るだけでも、大きなショックだった。
「誰かついてるんですか」
と、依子は訊いた。
「ついてる、といわれますと？」
「その栗原多江に、です」
「留置場です、手は出せませんよ」
と、河村は言った。
そう。――まさか。西部劇じゃあるまいし！
しかし、依子は不安だった。
これはまともではない！　何かが、裏で動いているのではないか……。

依子は眠れなかった。

もちろん、多江のことが気になっていたのである。——会いに行ってやれば良かったかしら？

しかし、多江と話したことを、河村に知られるのは、避けた方がいいと思った。

多江は、どんな思いで、留置場にいるのだろう。——依子は、それを想像しただけで、胸が痛かった。

様子がおかしいと気付いたのは、夜中の三時ごろだった。

表が騒がしい。人が怒鳴ったり、大声を上げたりしているのが、耳に入って来る。

こんな時間に。——依子はすぐに起き出して、服を着た。

窓を開けて、通りを見た依子は、びっくりした。

この町の人間が、みんな出て来たのかと思うほどの人である。

「——かたをつける時だ！」

と、どこかで聞いたことのある声が、耳に飛び込んで来る。

角田だった。

何か台の上に乗っているらしく、集まった町の人々へ、演説をぶっているようだった。

「私の娘は、無惨に絞め殺された」

角田は声を震わせた。「あの子が何をしたというんだ？　罪のない子供を、絞め殺して平気な顔をしてるなんて奴は、人間ではない！」

オーッという声が上った。

依子はゾッとした。角田は続けた。

「我々はあの連中に寛大すぎたのだ。我々は間違っていた。あいつらは、もうとっくに滅ぼしておかねばならなかったのだ！」

「そうだ！」

「今からでも遅くないぞ！」

と、声が返って来る。

「まずあの娘だ！」

と、角田は叫ぶように言った。「今、留置場にいる娘だ。あいつが私の娘を殺した、と誰かが言っている。――それは正しいのかもしれん。間違っているかもしれん。しかし、そんなのは、本質的な問題じゃない」

依子は、足が震えるのを感じた。

「問題は――」

と、角田は続けた。「あの娘が、いつかは泥棒になり、人殺しになるということだ。それははっきりしている。我々にはそれを防ぐ権利が――いや、義務がある！」

拍手が湧いた。それは熱狂的と言っていい拍手だった。

「行こう！」

「留置場から引きずり出せ！」

「谷を焼き払え！」

口々に叫びながら、町の人々は、警察署へ向って歩き出した。

依子は、呆然として、しばし動けなかった。これは夢だ。悪夢なんだ。

こんなことが、実際に起るはずがない！

しかし——どう自分へ言い聞かせてみても、眼前の光景が、消えてなくなるわけではないのだ。

やっと、頭が働き始めた。そうだ、警察——県警にでも、直接かければいい。

何か手を打ってくれるだろう。

依子は一階に駆け降りて、電話へと走った。受話器を上げて、ダイヤルを——。しかし、回す前に、受話器から、発信音が全く聞こえて来ないのに気付いていた。

電話を不通にしてある！

おそらく、この町の人間の中にも、私刑などは、やりすぎだと思っている者があるだろう。その通報を防ぐために、どこかで、電話線を切ったのではないか。

依子は、改めてゾッとした。

一見、突発的に見えるこの騒ぎだが、おそらく、予め考え抜かれ、準備された行動なのだ！

依子は外へ出た。——角田に率いられた男たちは、もう道のずっと遠くへ行っている。

どうしたらいいだろう？　あの男たちの前に立ちはだかったところで、それは、手で雪崩

を止めようとするようなものだ。

「先生」

と、呼ぶ声がした。

依子は、信じられない思いで、振り返った。

目の前に立っていたのは、そこにいるはずのない人間——栗原多江だった。

23　炎の中に

「——多江さん！」

と、依子は言った。

その言葉が出て来るまでに、十秒近い間があった。

多江は、かなりひどい格好だった。Tシャツにジーンズだが、あちこちに泥がこびりつき、所々、破れている。

顔にも、いくつかすり傷があった。

「どうしたの、多江さん、どうしてここへ——」

「分らないわ」

と、多江は首を振った。「河村が出してくれたのよ」

「河村さんが？」

「そう。私刑しようとして騒いでる連中がいる。守り切れる自信がないから、一旦出してやる、って」

「そう。でも、ともかく――」

依子は、ちょっと周囲を見回して、「誰かに見られたら大変よ！　行きましょう！」

「ええ」

二人は、暗がりを選んで、小走りに駆け出した。

「どこへ？」

と、依子が訊く。

「谷よ」

「でも――」

「私がいないと分ったら、あの人たち、谷を襲うわ。早く知らせないと！」

そう言われると、依子も反対できない。

「――そのけがは？」

「連行されるとき、抵抗したら、殴られたのよ」

「河村さんが？」

「他の若い警官だったわ。髪の毛をつかんで、引きずり回したのよ」

依子は何も言えなかった。怒りで、胸苦しい。

「証拠もないくせに！」

と、多江は吐き捨てるように言った。

「でも、なぜ河村さんが、あなたを逃がしたのかしら？」

「そうね」

多江は肩をすくめて、「お役人だから、私刑の責任を取るのが怖いのかもしれない」

なるほど。そうかもしれない。

役人というのは、えてして、小心だから。しかし、河村が本当に、それだけのことで、多江を逃がしたのか、依子には、今一つ、ピンと来なかった。

河村らしくない。——腹の中で、何を考えているか、分らない男なのだ。

ただ、多江はそんなことは、大して気に止めていない様子だった。ひたすら、谷へと急いだ。

もし、河村が本気で、あの暴徒を押し止める気があるのなら、まだしばらくは時間が稼げるだろう。しかし、あまり期待はできない、と依子は思った。

どちらかといえば、心情的には河村も角田と大して変りないはずである。

多江がいないことを知れば、確かにあの連中は、谷へ押しかける。そして——何が起るか、それは空恐ろしい気がした。

——二人は山の奥へと入って行った。

いくらか月明りはあったが、暗い道で、依子は、多江の後をついて行くのに、必死だった。却って、それで不安を忘れることはできた。

静かな山中に、多江と依子の、足音と息づかいだけが聞こえる。
山間を辿って、あの、大沢和子が埋めてある辺りへ来た。
「もう少しだわ」
と、多江が言った。
「待って」
と、依子が言った。
「え？」
「何だか――音がしたわ」
「音が？」
「どこかで――何かしら？　気のせいかな」
「そうね。――止って」
多江は、じっと、耳を澄ましていたが、やがて、ハッと息をつめた。
「誰かいる！」
強いライトが、一度に依子と多江に浴びせられた。依子は、一瞬、まぶしさによろけた。
目がくらみながら、依子は、グルリと周囲を囲んでいる男たちの姿を認めた。
「ちゃんと、計算通りの所へ来てくれたね」
――思いがけない声――いや、当然の声だった。
「河村さん！」

と、依子は言った。「あなたは、わざと――」

「もちろんですよ、先生」

河村は、いつもと変らぬ口調で言った。「いくら何でも、私の目の前で、容疑者が私刑を受けたんじゃ、立場がありませんからね。しかし、逃亡した挙句、その途中で、となれば……」

計算ずくだったのだ。――依子は体が震えた。

「河村さん！　あなたは警官でしょう！」

「しかし、同時にこの町の人間ですよ」

「法を守るのが、あなたの役目です」

「谷の連中に、法など必要ありません」

河村は冷ややかな表情になった。

「多江さんは、人殺しなんかやってないわ！」

「それはどうでもいいことですよ」

と、河村は言った。「要は、谷の人間たちがいなくなれば、世の中がきれいになる、ということです」

「何てことを……」

依子は耳を疑った。「私が黙っていないわ！　あなた方を訴えてやる！」

「先生――」

「私も殺す？　やってごらんなさい。私は家族も親戚もあちこちにいるのよ。日本中回って、皆殺しにするつもり？」

もう恐怖はどこかへ消えていた。烈しい怒りが、依子の中で燃え立っている。

「先生、誤解しちゃいけません」

と、河村は言った。「私たちは別に人殺しの集団じゃない。先生を殺したりする気はありませんよ」

「じゃ、どうするの？」

「その内、分って下さると思います。先生もこちら側の人間ですからね」

「私を生かしておいたら後悔するわよ」

と、依子は河村をにらみつけた。

河村は目をそらした。

「そんな小娘の言うことなんか放っとけ！」

と、角田の声が飛んで来る。「みんな、ぐずぐずするな！　あの連中を逃がすと、大変なことになるぞ！」

男たちがワッと依子たちの方へ駆け寄って来る。依子はたちまち、三、四人の男たちに手足を押えられ、わきの方へと引きずって行かれた。

「――おい、用意しろ！」

と、角田が怒鳴った。

悪夢だわ、と依子は思った。

まるで、昔、TVで見た西部劇のようだった。——木の太い枝に、ロープが、かけられた。その先端が輪になって、ゆっくりと揺れている。——それは、無気味に単純な形をしていた。

多江は、もう諦めたのか、逆らおうともしなかった。男たちの手で、木の下へ連れて行かれると、首に輪がかけられた。

「やめて！　みんな、人を殺そうとしてるのよ！」

依子が叫んだ。

多江が、依子を見た。——それは、不思議な視線だった。

多江は微笑んだ。

「先生。気にしないで」

口調は、いつもの通りの多江だった。

——一瞬、さすがに重苦しい雰囲気がその場を支配した。

「——よし。やれ」

角田が、少し乾いた声で言った。

ロープがピンと伸びた。

男たちが、多江の体から離れる。

そのとき、多江が笑いだした。——依子が、それまでに聞いたこともない凄味を帯びた笑

いだった。
ヒステリックな笑いではなく、何かが解き放たれたような笑い声だ。
男たちが、さすがにギョッとしたようすで、少し後ずさった。
角田が叫んだ。
「引け！」
枝に渡した、ロープの端を、四、五人の男たちが一斉に引いた。多江の体が空中へはね上ったように思えた。
依子は、全身で叫び声を上げた。まるで、自分が吊されたような、苦痛とショックに襲われて、依子は地面に倒れた。

「――なるほど」
小西は肯いた。「恐ろしい目に遭ったんですね」
依子は、じっと小西を見つめた。
「でも、本当に恐ろしいことは、その後に起ったんです」
「何ですって？」
と小西は言った。
そのとき、病室のドアが荒々しく開いた。
ベッドの上で、依子は、怯えたように身を縮めた。

小西は、驚いて振り返った。
「警視！」
入って来たのは、小西の上司に当る、県警の警視だった。赤ら顔の、太った男である。
「おい、どうしたというんだ！」
と、警視が怒鳴るように言った。
「警視、ここは病室ですよ」
「分っとる」
不愉快そうに、警視は言った。「なぜ報告せん！　犯人を逮捕したと俺が誰から聞かされたと思うんだ？　とんだ恥をかいたぞ」
小西は、車椅子を上司の方へ向けた。
「警視。ここは私に任せて下さい」
「なぜこの女に手錠をかけていないんだ？　病人だといっても、ベッドにつないでおくぐらいはしておくべきだ！」
依子が、その言葉に、青ざめた。
「私が――何をしたんですか？」
小西は焦って、
「警視、ともかくお話は外で――」
と言いかけたが、止めることはできなかった。

「二人も剃刀で殺しておきながら、よく涼しい顔をしてられるもんだな」
と、冷ややかに、依子をにらむ。
依子は、目を見開いて、じっと小西の方を見ていた。
「警部さん……本当ですか」
声は震えていた。
「ごまかされるな」
と、警視は小西に言った。「無意識の犯行だとか、そんなものは嘘っぱちだ。容赦なくぶち込んでやればいいんだ！　お前は女に甘すぎるぞ」
小西はため息をついた。
依子は、体の震えを止めようとするかのように、両手で体をかかえ込むようにした。
「――じゃ、警部さんの、その足も――私が？」
小西は、少しためらったが、諦めたように、肯いた。依子は両手に顔を埋めた。
「警視、ともかく外でお話を」
と小西がくり返した。
「うん。――逃げないか？」
「大丈夫ですよ」
渋々、警視が廊下へ出る。小西は車椅子でそれに続くと、ドアを閉めて、
「何もかもぶち壊しです」

と言った。「あの女性は、田代が行方不明になっている事件での、唯一の手がかりなんです。その謎が、もう少しで解明できるところだったのに……」

「取調室で訊けば良かろう」

と、警視が顔をしかめて言った。

「いいですか。彼女の場合、実際に犯行は無意識にやっているんです。それは、あの町での出来事に、深く関わってるんですよ。彼女の記憶を、一つ一つ、たぐり出していたんです」

「俺としては、殺人犯が見付かったという事実がほしいんだ。マスコミが、噂を聞きつけて、やかましい」

「待たせておけばいいんです」

小西はぶっきらぼうに言った。「あの町で、何か恐ろしいことが起ったのです。それを証言してくれるのは、彼女だけなのですよ。それを警視は――」

ガラスが激しく割れる音がした。――小西は一瞬、動けなかった。

何が起ったのか？　病室の中だ！

小西は、車椅子を操るのももどかしく、病室の中へ入って行った。顔から血の気がひいた。窓ガラスが砕けている。そして、ベッドには、依子の姿はない。

「――おい」

と、警視が言った。「どうしたんだ」

「ご自分で見れば分るでしょう」
小西は、冷ややかに言って、砕けた窓の方へと、車椅子を進めて行った。
ガラスの、尖った破片のいくつかに、血がついていた。
下を覗いて見る。——依子の白い寝衣が、花びらのように広がっていた。
小西は思わず目を閉じていた。
医師が駆け込んで来た。
「警部さん！　患者が……」
「ええ。落ちたんです。急いで、手を尽くしてみて下さい」
「分りました！」
あわただしい動きが、十分ほども続いただろうか。
廊下へ出た小西の方へ、古川医師がやって来た。
「——何をしとったんだ？」
と、怒ったような声で言った。
「面目ありません」
と小西は言った。「どうですか」
古川は肩をすくめた。
「神様だって、首の骨を折った奴は助けられん。おまけに、ガラスで動脈を切っているんだ」

小西は、じっと拳を握りしめた。
警視の姿は、いつの間にやら、消えていた。
「――車に乗っても大丈夫ですか」
と小西が訊いた。「山道を揺られて行くんですが」
「痛いぞ」
「構いません」
「いつだ？」
「すぐに」
「よし」
古川は肯いた。「包帯をし直そう。それから、痛み止めをやる」
「お願いします」
と、小西は言った。

24　平和

「これは小西警部――」
河村が、急いで外へ出て来た。「足をどうなさったんですか」
「ちょっとしたけがでね」

と、小西は言った。「突然ですまん」
「いいえ。こちらの椅子へどうぞ」
ステッキを突いた小西は、やっと椅子に辿りついて、腰をおろした。
「お茶でも淹れさせましょう」
河村が、妻を呼んだ。
小西は町を眺めた。
明るい昼下り、この田舎の町は、静かで、平和そのものだった。
ここで恐ろしい殺人があったとは、誰が信じるだろう？
しかも、みんな、それを押し隠して、ごく当り前に暮している。
「そうそう」
と、河村が戻って言った。「実は、ご報告しなきゃならんことがありまして」
「ほう」
小西は、出されたお茶を一口飲んで、河村を見た。
「どんなことだね」
「小学生が殺された事件なんですが」
「角田栄子殺しだね」
「はい」
と、河村が肯いた。「実は昨夜、父親が自殺したんです」

「何だって？」
小西は、思わず訊き返した。「自殺した？」
「はい。それで、遺書の中に――自分が娘を殺した、と告白がありました」
「角田が娘を……」
「精神の病気で、悩んでいたようです。この町では名士だったので、公表しない方が、という声もあったんですが、やはりそういうわけには……」
「もちろん報告するべきだ」
と、小西は言った。「――ところで、実は、ちょっと会ってみたい娘がいるんだ」
「この町の者ですか？」
小西は肯いて言った。
「栗原多江というんだがね」
「分りました。お待ち下さい。連れて来ます」
河村が急いで出て行く。
小西は、落ちつかなかった。――どこか、おかしい。
栗原多江の名を出しても、一向に反応を示さないのだ。こんなはずはないが……。
「警部！」
と、声がした。
振り向くと、三木刑事がやって来るところだった。

「三木か！」
小西はホッとした。
「どうしたんです、その足？」
「そんなことはいい」
と、小西は苛立たしげに言って、「どうしたんだ、津田は？」
「それが――」
と、三木は表情を曇らせた。「事故がありまして」
「事故？」
「用心しろと言ったんですが……。ともかく夜の内に、谷へ行くといって聞かないんですよ。――止めたんですが」
「それで？」
「結局、仕方なく二人で出かけまして……。途中、はぐれてしまったんです」
と、三木は言った。「今朝になって、捜してみました。――崖から落ちたようです」
小西は、我知らず、ステッキを握りしめていた。
「死んだのか」
「はい」
と、三木は肯いた。「ただ、一つ発見がありました」
「というと？」

「とても足を滑らせやすい場所なんです。しかも人目につきにくい。——もう一つ、かなり時間のたった死体がありました」

小西は、じっと三木を見つめた。

「田代か」

三木が肯く。

「間違いないと思います。やはり足を滑らせたんでしょう。所持品があったので、持って来ました」

「そうか……」

小西は、すっきりしなかった。

三木は、田代が殺されたのでは、とあんなに心配していた。それなのに、なぜ今は田代の死を、事故だと思っているのか。

「それで——」

と、小西が言いかけたとき、

「お待たせしました」

と、河村が戻って来た。「この娘です」

十六、七の娘が、多少緊張した様子で、立っていた。

「——栗原多江です」

と、娘は頭を下げた。「私に何か……」

小西は、しばらく言葉が出なかった。
これは別人なのだろうか？　幽霊ではあるまい。
「いや――ここの小学校の中込依子という先生を知ってるかね」
「はい」
と、多江は、ちょっと不安げに小西を見た。「先生に、何かあったんでしょうか？」
「というと？」
多江は、ちょっとためらって、河村の方を見た。河村が咳払いをして、
「実は……中込先生は、ノイローゼで、大分前から、もう授業をしておられなかったんですよ」
「ノイローゼ？」
「ええ。中込先生はとても真面目な方でした。水谷というもう一人の先生が、公金横領で逃げて、結局、自分で喉を切って死んでしまったんですが、その分の仕事も、中込先生が全部、一人でしょっておられて……」
「おかしくなったというのかね」
「そうなんです」
多江は肯いた。「ただ――とてもいい先生だし、しばらく、休んでいただこうと、町の人たちで相談して決めたんです」
「この子の叔母のところで部屋があいていたもので、そこへ入っていただいて、この子が

面倒を見ていたんです」
「叔母さんは何という名だね？」
と小西は訊いた。
「大沢――和子といいます」
大沢和子？　殺されたはずの女ではないか！
「でも、一向に良くならなくて」
と、多江は言った。「殺されるとか、逃げなきゃ危ないとか、そんなことを口走っておられて……。そして、本当にいなくなってしまったんです」
「この子のせいじゃありません」
と、河村が取りなすように言った。「ともかく、二十四時間ついているわけに行きませんから。行方不明になって、捜していたんですが……」
「そうか……」
小西は言った。「彼女は死んだよ」
「まあ！」
と、多江が息を呑んで、手を握り合わせた。
「自殺のようなものだった」
「そうでしたか」
と、三木が呟くように言った。

「ところで――」
と、小西は三木の方を見た。「谷の方の様子はどうだったんだ？」
「谷のことをご存知ですか」
と、河村が意外そうに、言った。「あそこは昔、この多江なども住んでいたんですが、ともかく不便な所でして。――今はみんな、ここの町へ移って来ているんですよ」
「ここへ？」
「ええ。もう谷はゴーストタウンになってます」
小西は三木を見た。三木が、ちょっと肯いて見せる。
信じがたい思いだった。――あの、依子の話が、総て、彼女の空想の産物だったというのか？
しかし、現実に、この多江という娘は生きている。そして、谷にも人のいる形跡がないとしたら……。
「――町で、最近、変ったことはないかね」
と、小西は訊いた。
「さあ……。その、中込先生のことぐらいでしょうか」
と、河村は考えながら言った。
「他には？」
「まあ――角田栄子殺しも、水谷先生の件もありましたがね。それはそれで、この町では

大事件でしたが」

「――多江さん、だったね」

と小西は言った。

「はい」

「レストランで働いてるのかい？」

「ええ、そうです。ご存知なんですか？」

「恋人は？」

「恋人――ですか？」

多江は目を丸くした。「まだ、私、若いですから。そんな人、いません」

「そうか」

小西は肯いた。――ここまでやって来たのは、虚しい旅だったのか？　しかし、あの依子の話が……。

「まあ、何しろ平和ですよ、小さな町ですから」

と、河村が言った。「大した事件なんて、起るわけもありませんからね」

小西は、もうここにいる気にはなれなかった。

「――三木。帰るか？」

と言った。

「少し残ってます。明日中には、必ず戻ります」

「分った」
「送りましょうか？」
「大丈夫だ。パトカーの所まで、ついて来てくれ」
「はい」
三木に腕を取られるようにして、歩いて行く。小西は低い声で言った。
「――何も、おかしい所はないのか？」
「ええ」
三木は首を振って、「我々、結局、あの中込依子の妄想に付き合わされただけじゃないんですか？」
と言った。
小西は、パトカーに乗り込んで、息をついた。――どこかおかしい。
何もかもが依子の幻想だったとは、信じられない。――小西は、依子が、「本当に恐ろしいことは、その後に起った」と言っていたのを思い起していた。それは、どんなことだったのか？
そうだ。これで引込むわけにはいかない……。
パトカーが走り去ると、三木が戻って来た。
多江は、ゆっくりと椅子にかけた。

さっきとは打って変って、河村を、小馬鹿にしたような目つきで眺めていた。
「なかなか上出来よ」
と、多江は河村に言った。「その調子でね、これからも」
河村は、顔を赤くさせたが、何も言わずに、奥へ入って行った。
三木と多江は表に出て歩き出した。
町行く人が、みんな顔を伏せ、二人を避けながら、気付かないふりをする。
「――納得したと思う？」
と、多江は訊いた。
「いや、無理だろう」
と三木は首を振った。「あの人は、かなりしつこい」
「でも、何も証拠立てられやしないわ」
と、多江は言った。「彼女が死んでしまった今となっては、ね」
三木は、足を止め、ゆっくりと町を見回した。
「活気がない町だな」
「夜になれば、みんなが出て来るわ」
と、多江は言った。「――ねえ」
「何だい？」
「あの人、最後までは話さずに死んだのね、きっと」

「そうだろうな。小西さんが戸惑ってた様子で分ったよ」
多江は、ちょっと遠くへ目を向けた。
「あの人は気の毒だった……」
「中込依子かい？」
「ええ。本心から、私のことを、心配してくれてたわ」
「――かもしれない。しかし、最後まで拒んだんだろう、僕らの側に加わるのを」
「あれは立派だったわ。町の他の連中は、みんな言うなりになったのに、あの先生だけは、意志を貫いたんですもの」
「しかし、彼女も人を殺したよ」
「責められないわ。――怖かったからだわ」
「どういうことだい？」
「夜になると、私たちの暗示を思い出すのよ。自分の知らない内に、行動してる……」
「そうか。――僕はてっきり谷の誰かがやって来たんだと思ってた」
と、三木は肯いた。
「河村に見張らせたのに。一度は車に乗せたのに、また病院へ逃げ戻ってしまったのよ」
「彼女にとっては不幸だったな」
「そうね」
多江は、ちょっと目を伏せた。

二人は、学校の見える所まで来ていた。
黄昏が迫って、校舎がシルエットになって見えていた。
「――長かったわ」
と、多江は言った。
「谷での暮しが？」
「ええ。みんなあそこで、一族が滅びるのを待つつもりだったのに……。人間って、本当に馬鹿だわ。見当外れのことで、わざわざ、私たちを駆り立てて……。人間が私たちに勝てるわけがないのに」
「向うが仕掛けて来たんだ」
「そうね。角田が、娘を殺したのを何とかして私たちのやったことだと思わせようとしたのが、間違いだったのよ」
「もう、今は町ごと、僕たちのものだ」
「そうね」
沈んで行く夕陽に、多江の笑みがこぼれて、口元に、小さく尖った歯がチラリと覗いた。
「――河村はどうする？」
と、三木が訊いた。
「死んでもらうしかないわね。危険だわ」
と、多江は言った。

「すぐにはやらない方がいいだろうな」
「もちろんよ。――角田には、娘を殺したと告白した遺書を書いてもらったから、河村には、水谷を殺したという遺書でも書いてもらう？」
「悪くないね」
と、三木は肯いた。
夜が降りて来た。暗がりが、町を大きな翼で押し包む。
多江は、三木の腕を取った。
「さあ、私たちの時間よ」
二人は町の中へと戻って行った。
静かで、平和な町。――夜に支配されていても、そこは平和な町に違いなかった。

解説

あれは小学校四年生のときだったような気がする。夏休みのある夜、お寺の本堂に集まって怖い話を聞き、そのあと墓地へ一人で出かけるという肝試しが行われた。

広い本堂の真ん中に先生が座り、ろうそくが一本立てられ、そのまわりを十五、六人の子どもたちが輪になって取り巻いた。

「東京の赤坂に紀の国坂という坂がある。この紀の国坂の片側は深い濠になっていて、もう片方は、長い見上げるような土塀がずっとつづいている。まだ街灯や人力車などのなかった時代には、このへんは夜になると人っ子ひとり通らない、ごく寂しいところであった。夜遅くなると、通行人はこの紀の国坂は通らずにまわり道をしたものだった。なぜそんなことをしたかというと、あのへんはよくむじなが出たからなのだ」

先生は思い入れたっぷりに語る。その顔がろうそくの灯で揺れた。

「むじなって何？　先生。東京って、もっと賑やかなところじゃないのか？」

田舎の子どもたちにとって、当時東京は遥かに遠い都会であった。

「むじなを見たのは、ある年輩の商人だ。ある晩のこと、なんでもだいぶ夜ふけてから、その人が紀の国坂を急ぎ足で登ってくると、濠ばたのところに、女がひとりしゃがみこんで、

しくしく泣いていた」

そのとき先生の語ってくれた話は、ラフカディオ・ハーンの「怪談」にある『むじな』であった。

商人は、女に「お女中」と話しかける。女は泣きつづけている。さらに話しかけると、女は商人の方にくるりと向き直ったと思うと、片方の手で自分の顔をぺろりとなでた。女の顔は目も鼻も口もないのっぺらぼうだった。

そう言ったとたん、先生は子どもたちの方に顔を向けた。それはまさしくのっぺらぼうだった。

「ぎゃっ」というなり、子どもたちは全員うしろにひっくりかえった。

実は顔にハンカチをかぶせただけだったのだが、あのときのおどろきは、いまでもまざまざと思い出すことができる。

おどろいた商人が夢中で坂を駆け上り、屋台のそば屋に女の話をする。するとそば屋が、

「へーえ、それじゃ何かえ、その女がおまえさんに見せたのは、それ、こんなんじゃねえのかえ？」

と言いながら、自分の顔をぺろりとなでる。とたんにそば売りの顔が卵のようになり、同時に灯りがパッと消えたというラストは心憎いとしか言いようがない。

ミステリの基本的な定型は、まず未解決の犯罪（謎）が提示され、その謎の解明が論理的に進められていかねばならない。

このことはS・S・ヴァンダインの「探偵小説における二十則」にも、〝犯人は論理的帰結によって決定されるべきで、偶然、暗合、乃至は無動機の自白による解決は許されぬ……〟とある。こうした合理的なミステリを書いていると、超自然的な恐怖の物語を書いてみたくなるにちがいない。

赤川氏の「ぼくのミステリ作法」〈首吊りエッセイ〉の中に、〝怪奇と論理〟という章がある。

しかし、同じ怪奇物といっても、西洋のものはずいぶん理屈っぽいのはお国柄でしょうか。ドラキュラだって、決して万能ではなく、あれやこれやと制約に縛られています。ドラキュラはコウモリ、狼、霧に変身できますが、それを除けば大した能力はない。人の家へ忍び込んで美女の血を吸おうにも、勝手に忍び込むことはできない。その家に一度招待されていないと、忍び込めないという、厄介な条件がつけられているのです。これならケチな空巣の方がよほど自由であります。（中略）

こういう西洋のお化けに比べると日本の幽霊はるかに自由自在に出没し、そこがまた怖いところです。圓朝の「真景・累ケ渕」の「豊志賀」で、新吉と話をしていたお久の顔に突然あざが広がって豊志賀の顔になってしまうところ、圓生のレコードを何度聞いてもゾッとするほど怖い。これは理屈も段取りも何もない怖さです。

こういう凄いのはあまり西洋では見かけないようで、ヘンリー・ジェームスの「ねじの回転」に出て来る幽霊にしても、怖いよりもどこか物哀しくて、哀れを誘います。（中略）

かくいう小生も怪奇小説を一度書いてみたいと前々から考えているのですが、編集者の方が首をかしげるので、まだ実現しません。いくつかアイデアを書きとめてあるのですが、たまにそれを読み返してみると、何とかして合理的な解決をつけようとしているのが分って苦笑することがあります。

どうも僕もかなりミステリーに毒されているようです。

もっとも、あまりに合理化されすぎた現代、却って昔ながらの怪談がまた復権することもあるのでは、という気もするのですが。

赤川氏がこのエッセイを「ミステリ・マガジン」に書いたのは昭和五十六年だが、それから三年後の昭和五十九年、「野性時代」誌上で陽の目を見ることになったのである。

同年、カドカワ・ノベルズとして発刊された際、作者のことばとして次のように述べている。

「合理的なミステリーのかげで、長く忘れられていた超自然的な恐怖の物語が、最近また小説の世界で息をふき返している。

現実の世界でも、ナチズムのような過去の亡霊が、しぶとく息をひそめ、復活する日を待っている気配があるのを考えると、今この恐怖小説を書く試みにも少しは意味があると言え

るかもしれない」

〝大きな事件というものは、たいてい、何事も起りそうにない、平穏な日に始まる〟

中込依子が山間の小学校にやって来て一年余りたった。

その小学校（分校）は、一年生から六年生まで全部合わせても三十人にしかならない。

先生は、依子のほかに男の先生が一人しかいない。

この閉鎖された平和な町で、動機不明の連続殺人事件が起こる。

依子からの「助けて……殺される」という電話で、幼なじみの独身男性津田が町にやって来る。

ところが、その津田を斧で襲ったのが依子である。こうして奇怪な事件が次々に起こる。

恐怖小説というと、最初から終りまで鳥肌が立ちっぱなしと思う人もいるかもしれないが、この物語に登場する津田という人物、身の毛もよだつ恐しさのはずなのに、妙にゆとりがある。このあたり、いつもの赤川作品おなじみのタイプである。たとえば、

次の瞬間、相手の拳が津田の顎にぶつかった。もちろん意図的に、である。

つまりは、殴られたのだ。

目から火が出るとはこのことで、チカチカと光が明滅したと思うと、たちまち目の前が真暗になった。

――気絶したのである。

この男性の描写、えもいえずおかしい。このおかしさが隠し味になっていっそう恐怖感を昂め、独特の赤川ホラーの世界が展開する。

恐怖と笑いの背中合わせについては、廣末保氏が「四谷怪談」（岩波新書）で次のように書いている。

> 恐怖と笑いが、いつも背中合わせに重なっていて、戸板返しではないが、いつ恐怖が笑いに、笑いが恐怖に裏返るかもしれないような不気味さこそが、崩壊期の不気味さであり、そして面白さでもあった。ものみなが、それぞれの領域を越境して無秩序化してくる崩壊期の、それが矛盾であり、かつ可能性であった。

この物語も、登場人物のかもしだすおかしさが、恐怖感をいっそう昂めている。

そして、最後に町には再び平和がやって来るのだが……。

ここまで読み終えたとき、読者は奇妙な感覚の中に浮遊するにちがいない。

それはまさしく、不条理の力が日常性を崩壊させたからで、それこそ恐怖小説のカタルシスである。

宗田　理

魔女(まじょ)たちのたそがれ

赤川次郎(あかがわじろう)



角川文庫　6441

昭和六十一年六月十日　初版発行

発行者――角川春樹
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話　編集部(〇三)二三八―八四五一
営業部(〇三)二三八―八五二一
〒一〇二　振替東京③一九五二〇八
印刷所――大日本印刷　製本所――大谷製本
装幀者――杉浦康平
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

ISBN4-04-149736-1　C0193

角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

病めるときも　三浦綾子
孤独のとなり　三浦綾子
蒼ざめた斜塔　小林久三
富士天頂に燃ゆ　小林久三
錆びた炎　小林久三
薔薇の墓場　小林久三
零の戒厳令　小林久三
犯罪社員ファイル　小林久三
社命誘拐　小林久三
ことばへの旅　既刊五冊　森本哲郎
ぼくの旅のカタログ　森本哲郎
誓いて我に告げよ　佐木隆三
蒸発―ある愛の終わり―　夏樹静子
砂の殺意　夏樹静子
ガラスの絆　夏樹静子
目撃―ある愛のはじまり―　夏樹静子
光る崖　夏樹静子
遥かな坂　全二冊　夏樹静子
77便に何が起きたか　夏樹静子
Wの悲劇　夏樹静子
雪の別離　夏樹静子
星の証言　夏樹静子
花の証言　夏樹静子
殺意　夏樹静子
蒼ざめた告発　夏樹静子
神狩り　原作　夏樹静子　脚本　荒井晴彦　澤井信一郎
神々の埋葬　山田正紀
宝石泥棒　山田正紀
謀殺のチェスゲーム　山田正紀
高校放浪記　全二冊　稲田耕三
地獄塾奮戦記　稲田耕三
エーゲ海に捧ぐ　池田満寿夫
楼閣に向って　池田満寿夫
窓からローマが見える　池田満寿夫
凶運の手紙　仁木悦子
夢魔の爪　仁木悦子
みずほ荘殺人事件　仁木悦子
暗い日曜日　仁木悦子
死の花の咲く家　仁木悦子
三日間の悪夢　仁木悦子
青じろい季節　仁木悦子
殺人配線図　仁木悦子
枯葉色の街で　仁木悦子
刺のある樹　仁木悦子
黒いリボン　仁木悦子
夏の終る日　仁木悦子
銅の魚　仁木悦子
妹たちのかがり火　全三冊　仁木悦子編
わが心のヤマタイ国　角川春樹
鳥のように獣のように　紀州木の国・根の国物語　中上健次
蛇淫　中上健次
夢の力　中上健次
シスコで語ろう　高橋三千綱
九月の空　高橋三千綱
さすらいの甲子園　高橋三千綱
対岸の祝日　さすらいのにせギャンブラー　高橋三千綱
こんな女と暮してみたい　高橋三千綱
真夜中のボクサー　高橋三千綱
ハロー・マイ・ラブ　高橋三千綱
南極でオン・ザ・ロック　高橋三千綱

シナリオ真夜中のボクサー　原作　高橋三千綱　脚本
小説　阿佐田哲也　阿佐田哲也
麻雀放浪記　全四冊　阿佐田哲也
ギャンブル党狼派　阿佐田哲也
牌の魔術師　阿佐田哲也
ああ勝負師　阿佐田哲也
雀鬼五十番勝負　阿佐田哲也
雀鬼くずれ　阿佐田哲也
麻雀狂時代　阿佐田哲也
東一局五十二本場　阿佐田哲也
ギャンブル人生論　阿佐田哲也
ぎゃんぶる百華　阿佐田哲也
ドサ健ばくち地獄　全二冊　原作　阿佐田哲也　脚本　和田誠　澤井信一郎
シナリオ　麻雀放浪記　阿佐田哲也
乱れからくり　泡坂妻夫
11枚のとらんぷ　泡坂妻夫
亜愛一郎の狼狽　泡坂妻夫
追うもの　谷　克二
動脈列島　清水一行
買占め　清水一行
毒煙都市　清水一行
最高機密　清水一行
時効成立　清水一行
虹の海藻　清水一行
女教師　清水一行
燃え盡きる　清水一行
虚業集団　清水一行
九連宝燈　清水一行
風の骨　清水一行
匿名商社　清水一行
血の河　清水一行
殺人念書　清水一行
愛・軽井沢　清水一行
情報銘柄　清水一行
首都圏銀行　清水一行
世襲企業　清水一行
砂防会館3F　清水一行
重役室　清水一行
偶像本部　清水一行
天から声あり　全二冊　清水一行
狂人相場　清水一行
小説兜町（しま）　清水一行
悪の公式　清水一行
怒りの回路　清水一行
同族企業　清水一行
使途不明金　清水一行
新人王　清水一行
機動女患者　清水一行
巨頭の男　清水一行
投機地帯　清水一行
辞表提出者　清水一行
逃亡　清水一行
砂の紋　清水一行
虚構大学　清水一行
重要参考人　医大理事　清水一行
神は裁かない　清水一行
仁義なき戦い　全二冊　飯干晃一
日本の首領　全三冊　飯干晃一
地下突撃隊　全二冊　飯干晃一
美容と弾痕　飯干晃一
狼どもの仁義　飯干晃一
殺人レース　飯干晃一

大誘拐　天藤真
陽気な容疑者たち　天藤真
皆殺しパーティ　天藤真
炎の背景　天藤真
死角に消えた殺人者　天藤真
犯罪講師　天藤真
雲の中の証人　天藤真
完全なる離婚　天藤真
極楽案内　天藤真
白き日旅立てば不死　荒巻義雄
神州白魔伝　荒巻義雄
石の結社　荒巻義雄
螢川・泥の河　宮本輝
道頓堀川　宮本輝
解雇やむなし！　広瀬仁紀
企業生贄　広瀬仁紀
三代目頭取　広瀬仁紀
合併前後　広瀬仁紀
大商戦　広瀬仁紀
逆転工作　広瀬仁紀
大蔵省銀行局査察！　広瀬仁紀
頭取指令　広瀬仁紀
談合　広瀬仁紀
ファイナル・ラウンド　広瀬仁紀
銀行常務会零時　広瀬仁紀
大銀行の内幕　広瀬仁紀
凍結銘柄　広瀬仁紀
狂騰銘柄　広瀬仁紀
横領（ひぐらし）　広瀬仁紀
何処へ　谷村新司
シンガー　谷村新司
帰らざる日々　アリス
ひと握りの友へ　堀内孝雄
大浪花諸人往来　有明夏夫
狸はどこへ行った　有明夏夫
呪われたシルク・ロード　辺見じゅん
謎の巨人機　福本和也
消えたパイロット　福本和也
墜落　福本和也
孤独の操縦桿　福本和也
UFO殺人事件　福本和也
K7高地　福本和也
謎の航空写真　福本和也
黒いスパイ機　福本和也
アルプス飛行隊　福本和也
雲上飛行　福本和也
謀略の航空路　福本和也
殺人病棟　福本和也
危険を買った男　筑波耕一郎
高校時代　三田誠広
龍をみたか　三田誠広
やがて笛が鳴り、僕らの青春は終わる
エロイカ変奏曲　三田誠広
刑事（デカ）珍道中　鎌田敏夫
さらば愛しき女よ　鎌田敏夫
新・里見八犬伝　全二冊　鎌田敏夫
俺たちの旅　全三冊　鎌田敏夫
シナリオ　原作　脚本　鎌田敏夫
小説吉田学校　全八冊　戸川猪佐武
党人の群れ　全三冊　戸川猪佐武
素顔の昭和　全二冊　戸川猪佐武
昭和外交五十年　戸川猪佐武

政権争奪　戸川猪佐武
政治家　戸川猪佐武
小説吉田茂　戸川猪佐武
悪の社会学（政・財・官界実力者の条件）　戸川猪佐武
小説三木武吉　戸川猪佐武
小説自民党対共産党　戸川猪佐武
小説永田町の争闘　全三冊　戸川猪佐武
日本の民話　全十二冊　（松谷みよ子・辺見じゅん・瀬川拓男）
成りあがり　矢沢永吉
さらば静かなる時　三浦浩
屋根のない車　河村季里
題名のない音楽会　黛敏郎
しあわせづくり　桃井かおり
うつむきかげん　桃井かおり
ひとり身ぼっち　桃井かおり
地獄の総統　阿久悠
悪魔の祝祭　阿久悠
イブの黙示録（時にはざんげの値打ちもある）　阿久悠
ケーＳＤ　阿久悠
逆転の発想　全三冊　糸川英夫

カルチャトピア'90　糸川英夫＋未来捜査局
女性人生読本　糸川英夫
邪火神川　神川又千秋
火星人先史　川又千秋
やじうま大百科（既刊三冊）　古川愛哲
知的悪女のすすめ　全二冊　小池真理子
新・知的悪女のすすめ　小池真理子
悪の愛情論　小池真理子
愛は眠らせたくない（結婚アウトサイダーのすすめ）　小池真理子
第三水曜日の情事（ヨコジュンのびっくりハウス）　小池真理子
破天荒一代　全二冊　小堺昭三
企業参謀　小堺昭三
赤い風雪　小堺昭三
けむりの牙　小堺昭三
流行歌手　全二冊　小堺昭三
血とバラ　赤川次郎

悪妻に捧げるレクイエム　赤川次郎
一日だけの殺し屋　赤川次郎
孤独な週末　赤川次郎
さびしがり屋の死体　赤川次郎
昼下がりの恋人達　赤川次郎
悪魔のような女　赤川次郎
黒い森の記憶　赤川次郎
死者の学園祭　赤川次郎
名探偵はひとりぼっち　赤川次郎
赤いこうもり傘　赤川次郎
ひまつぶしの殺人　赤川次郎
僕らの課外授業　赤川次郎
晴れ、ときどき殺人　赤川次郎
いつか誰かが殺される　赤川次郎
結婚案内ミステリー風（世界は破滅を待っている）　赤川次郎
殺人よ、こんにちは　赤川次郎
探偵物語　赤川次郎
招かれた女　赤川次郎
霧の夜にご用心　赤川次郎
ブロメテウスの乙女　赤川次郎

夜　赤川次郎
愛情物語　赤川次郎
自殺行き往復切符　赤川次郎
幻の四重奏　赤川次郎
早春物語　赤川次郎
ミステリ博物館　赤川次郎
死体は眠らない　赤川次郎
三毛猫ホームズの推理　赤川次郎
三毛猫ホームズの怪談　赤川次郎
三毛猫ホームズの駈落ち　赤川次郎
シナリオ早春物語　原作 赤川次郎 脚本 那須真知子
シナリオ愛情物語　原作 赤川次郎 脚本 剣持亘
わたしの恋の物語　吉田知子
天国への階段　栗本薫
エーリアン殺人事件　栗本薫
時の石　栗本薫
行き止まりの挽歌　栗本薫
魔境遊撃隊　全二冊　栗本薫
キャバレー　栗本薫
神変まだら蜘蛛　栗本薫
魔剣　全二冊　栗本薫

にんげん動物園　中島梓（文）山藤章二（絵）
共同幻想論　改訂新版　吉本隆明
言語にとって美とはなにか　全二冊　改訂新版　吉本隆明
相対幻論　吉本隆明 栗本慎一郎
私、プロレスの味方です　村松友視
当然、プロレスの味方です　村松友視
最後のベビーフェイス　村松友視
時代屋の女房・泪橋　村松友視
ダーティー・ヒロイズム宣言　村松友視
三五郎ラプソディ　村松友視
時代屋の女房2　村松友視
悪霊を撃て　谷恒生
雪の妖精　谷恒生
黒いヴァイキング　谷恒生
フンボルト海流　谷恒生
女相続人　草野唯雄
影の斜坑　草野唯雄
鳴き竜殺人事件　草野唯雄
闇の臭跡　草野唯雄
七人の軍隊　草野唯雄

犬の首　草野唯雄
警視泥棒　草野唯雄
抹殺の意志　草野唯雄
死の舞踏　草野唯雄
二人の追跡者　草野唯雄
甦った脳髄　草野唯雄
さらば空港（エアポート）　草野唯雄
交叉する線　草野唯雄
見知らぬ顔の女　草野唯雄
私の中のあいつ　草野唯雄
棄てられた女　草野唯雄
ジャズと爆弾　中上健次VS村上龍
岸辺のアルバム　山田太一
沿線地図　山田太一
競馬放浪記　新橋遊吉
男が賭ける　新橋遊吉
馬券師稼業　新橋遊吉
馬券師街道　新橋遊吉
背徳の勝負師　新橋遊吉
カンタン刑式　貴士
イースター菌式　貴士

連想トンネル　式貴士
虹のジプシー　式貴士
吸血鬼　式貴士
わしらは怪しい探険隊　椎名誠
ジョン万作の逃亡　椎名誠
男たちの真剣おもしろ話
宇宙海賊船シャーク　石津嵐
宇宙の放浪者　石津嵐
宇宙の孤星　石津嵐
孤狼よ！遠き残照に哭け　石津嵐
ぼくは12歳　真岡史
高史明・岡百合子編
ガラスの椅子　咲村観
ガンに勝つ日　真木洋三
軍縮謀殺　真木洋三
ひめゆりの塔をめぐる人々の手記
欲望砂漠　仲宗根政善
殺しのカードは蜜の味
夜の獲物　勝目梓
欲望の密室　勝目梓
暗殺都市　勝目梓
咬ませ犬　勝目梓

少年狩り　野田秀樹
ゼンダ城の虜・走れメルス
空、見た子とか　野田秀樹
脱獄山脈　太田蘭三
誘拐山脈　太田蘭三
殺意の三面峡谷　全二冊　太田蘭三
白の処刑　太田蘭三
パリの空の下、死体は流れる
死霊の王国　加納一朗
生殖センターの殺人　加納一朗
ホック氏の異郷の冒険　加納一朗
背信の荒野　加納一朗
女性のやさしさ120章　堀寿子
女性のかしこさ120章　堀寿子
女性のすなおさ120章　堀寿子
女性のしあわせ120章　堀寿子
日本の放浪芸　小沢昭一
どてらい男　全十冊　花登筐
けんかえれじい　全二冊　鈴木隆
人生はダーヤモンド　篠原勝之
嵐の中をアカ犬が走る

裏切りの条件　門田泰明
巨塔崩壊　門田泰明
野望の狂宴　門田泰明
謀報者たちの夜　門田泰明
狙撃　門田泰明
ガン新薬戦争　門田泰明
闇の総理を撃て　門田泰明
華麗なる曝葬　門田泰明
闘いの詩　THE BATTLE　戸井十月
赤い帆船　西村京太郎
一千万人誘拐計画　西村京太郎
消えたドライバー　西村京太郎
日本殺人ルート　西村京太郎
無明剣、走る　西村京太郎
原子力船むつ消失事件　西村京太郎
恐怖の金曜日　西村京太郎
消えたエース　西村京太郎
官僚王国論　草柳大蔵
世界王国論　草柳大蔵
企業王国論　草柳大蔵
東京の老舗・京都の老舗

江崎玲於奈一家のアメリカ日記　江崎玲於奈　角川書店編
新・血液型人間学　能見正比古　角川書店編
血液型人生論　能見正比古　角川書店編
血液型女性白書　能見正比古　角川書店編
血液型愛情学　能見正比古　角川書店編
血液型活用学　能見正比古　角川書店編
血液型エッセンス　能見正比古　角川書店編
麻雀ブルース　田村光昭　角川書店編
日本史探訪1 日本人の起源　角川書店編
日本史探訪2 古代王国の謎　角川書店編
日本史探訪3 歌びとたち　角川書店編
日本史探訪4 平安遷都　角川書店編
日本史探訪5 藤原氏の夢と王朝　角川書店編
日本史探訪6 源平の争乱　角川書店編
日本史探訪7 武士政権誕生　角川書店編
日本史探訪8 南北朝と室町文化　角川書店編
日本史探訪9 戦国武将たち　角川書店編
日本史探訪10 信長と秀吉をめぐる人々　角川書店編
日本史探訪11 キリシタン伝来と鉄砲伝来　角川書店編
日本史探訪12 関ケ原と大坂の陣　角川書店編
日本史探訪13 幕藩体制の軌跡　角川書店編
日本史探訪14 江戸期の芸術と豪商　角川書店編
日本史探訪15 歌舞伎作者と俳諧　角川書店編
日本史探訪16 国学と洋学　角川書店編
日本史探訪17 講談・歌舞伎のヒーローたち　角川書店編
日本史探訪18 海を渡った日本人　角川書店編
日本史探訪19 開国と攘夷　角川書店編
日本史探訪20 つわものたちと火花散る末期の幕臣　角川書店編
日本史探訪21 菊と葵の盛衰　角川書店編
日本史探訪22 幕末維新の英傑たち　角川書店編
愛情星占い　潘恵子　角川書店編
遥かなノートルダム　森有正　角川書店編
恋人よ　五輪真弓　角川書店編
いっぴきの虫　高峰秀子　角川書店編
つづりかた巴里　高峰秀子　角川書店編
ベンギニストは眠らない　糸井重里　角川書店編
私は嘘が嫌いだ　糸井重里　角川書店編
スナック芸大全　糸井重里　角川書店編
話せばわかるか対談集　糸井重里　角川書店編
気ままな絵日記　吉田拓郎　角川書店編
明日に向って走れ　吉田拓郎　角川書店編
詩集 BANKARA　吉田拓郎　角川書店編
Give up　山際淳司　角川書店編
スローカーブを、もう一球　山際淳司　角川書店編
空が見ていた　山際淳司　角川書店編
エンドレス・サマー　山際淳司　角川書店編
気分はビートルズ　浅井慎平　角川書店編
カメラはスポーツだ　浅井慎平　角川書店編
日本女地図　殿山泰司　角川書店編
JAMJAM日記　殿山泰司　角川書店編
三文役者の無責任放言録　殿山泰司　角川書店編
絵の贈り物（作家からダーティペアシリーズ(1)へ）　福田隆義画他　角川書店編
ダーティペアの大冒険　高千穂遥　角川書店編
アンチ巨人読本　畑田国男&嫌巨会　角川書店編
アンチ巨人狂本　畑田国男&嫌巨会　角川書店編
野球は格闘技だ　長島茂雄編　角川書店編
少年ケニヤ（全二十冊）　山川惣治画作　角川書店編
少年王者（全十冊）　山川惣治画作　角川書店編
少年エース（既刊三冊）　山川惣治（原作）脚本桂千穂・内藤誠・剣持亘　角川書店編
シナリオ少年ケニヤ　山川惣治　角川書店編
新・口八丁手廻丁　金子信雄　角川書店編
紫の履歴書　美輪明宏　角川書店編

ラガナ一家のニッポン日記　全二冊　ドメニコ・ラガナ
別れの予感　森瑤子
風物語　森瑤子
愛の予感　森瑤子
一人乗り紙ひこうき　岸田今日子
日本の子守唄　松永伍一
ブギウギ脱どん底・ストーリー　宇崎竜童
まだ見ぬあなた　石浜みかる
まいにちクローガネ　黒鉄ヒロシ
ことばの豆辞典　既刊五冊　三井銀行ことばの豆辞典編集室編
炎の指揮官　長島が逆転する日　土井正三監修
ヨーロッパ・古城の旅　井上宗和
戦国武将と城　井上宗和
日本の名城・古城　井上宗和
ドキュメント新聞記者　読売新聞大阪社会部
ある中学生の死　読売新聞大阪社会部
安宅クルーの再会　読売新聞大阪社会部
社会部記者レポート　OL殺人事件　読売新聞大阪社会部
新聞記者が語りつぐ戦争
1 終戦前夜　読売新聞大阪社会部
2 戦場になった島　読売新聞大阪社会部
3 特攻　読売新聞大阪社会部
4 中国孤児　読売新聞大阪社会部
5 中国慰霊　読売新聞大阪社会部
6 中国侵略　読売新聞大阪社会部
記者の窓から
1 大きな車どけてちょうだい　読売新聞大阪社会部
2 走れ村の子負けるなよ　読売新聞大阪社会部
3 そんなにかわいく笑わないで　読売新聞大阪社会部
素敵な朝帰り　水上洋子
素敵な三角関係　水上洋子
毎日、恋のはしご　水上洋子
バイバイ、エンジェル　笠井潔
アポカリプス殺人事件　笠井潔
マンハッタン自殺未遂常習犯　草間彌生
ぼく英語できちゃった　飯塚成彦
チューサン階級の冒険　嵐山光三郎
幻想としての経済　栗本慎一郎
東京の血は、どおーんと騒ぐ　栗本慎一郎
出社に及ばず　渡辺一雄
消えた文明99の謎　神部武宣
はみだし社員大奮戦　大下英治
医者のないしょ話全二冊　志賀貢
男と女のないしょ話　志賀貢
ホースケ麻雀大会　福地泡介
ホースケ千夜一夜　福地泡介
DC志賀のおもしろ健康診断　志賀貢
北国医者のないしょ話　志賀貢
大人のないしょ話　志賀貢
サムライその青春　横内仁司
荒垣秀雄ザ・コラム　天の巻　荒垣秀雄
荒垣秀雄ザ・コラム　声の巻　荒垣秀雄
荒垣秀雄ザ・コラム　人の巻　荒垣秀雄
荒垣秀雄ザ・コラム　語の巻　荒垣秀雄
異形の地図　阿刀田高
まじめ半分　阿刀田高
ゴッドマジンガー　既刊一冊　永井豪原作
おくのほそ道をたどる　全二冊　井本農一
ルンルン症候群　林真理子
花より結婚きびダンゴ　林真理子
街角に投げキッス　林真理子
ルージュの伝言　松任谷由実
ことばの風物詩　槌田満文

薬師丸ひろ子フォトメモワール　全三冊　撮影　小島由起夫
アメリカン・マラソン　筑紫　哲也
シナリオ　家族ゲーム　原作　本間洋平　脚本　森田芳光
ああ子育て戦争　矢崎　藍
料理ぎらいの料理の本　今田美奈子
おかしなお菓子　今田美奈子
悲しき熱帯　村上　龍
映画渡世　天の巻　マキノ雅裕
映画渡世　地の巻　マキノ雅裕
修羅の人　青山光二
札師　青山光二
葉山海岸通り　田中康夫
恋愛自由自在　田中康夫
素敵なダイナマイトスキャンダル　末井　昭
きなきな族からの脱出　和田　誠
おひつじ座の愛　ミラ・アストロジャーズ
おうし座の愛　ミラ・アストロジャーズ
ふたご座の愛　ミラ・アストロジャーズ
かに座の愛　ミラ・アストロジャーズ
しし座の愛　ミラ・アストロジャーズ
おとめ座の愛　ミラ・アストロジャーズ
てんびん座の愛　ミラ・アストロジャーズ
さそり座の愛　ミラ・アストロジャーズ
いて座の愛　ミラ・アストロジャーズ
やぎ座の愛　ミラ・アストロジャーズ
みずがめ座の愛　ミラ・アストロジャーズ
うお座の愛　ミラ・アストロジャーズ
カドカワフィルムストーリー　愛情物語　角川書店編
メイン・テーマ　角川書店編
時をかける少女　角川書店編
探偵物語　角川書店編
Wの悲劇　角川書店編
天国にいちばん近い島　角川書店編
ボビーに首ったけ　角川書店編
早春物語　角川書店編
本当のことを言おうか　風間　杜夫
この子の七つのお祝いに　斎藤　澪
赤いランドセル　斎藤　澪
時刻表2万キロ　宮脇　俊三
台湾鉄路千公里　宮脇　俊三
鬼火島伝説　志茂田景樹
新・犬神伝説　志茂田景樹
騎馬軍団伝説　志茂田景樹
滅亡師1　魔獣の断頭台　志茂田景樹
ひとめあなたに…　新井素子
やくざ情報員　光藤　亘
ぼくらの七日間戦争　宗田　理
石井好子と水森亜土の料理の絵本
卵とわたし　水石亜好　水森亜土
ご飯とわたし　水石亜好　水森亜土
サラダとわたし　水石亜好　水森亜土
ポテトとわたし　水石亜好　水森亜土
パーク・アベニューの孤独　山川　健一
壜の中のメッセージ　山川　健一
星とレゲエの島　山川　健一
時の魔法使い　原田知世
ニャロメのおもしろ数学教室　赤塚不二夫
ニャロメのおもしろ性教室　赤塚不二夫
ニャロメのおもしろ宇宙論　赤塚不二夫
ニャロメのおもしろ生命科学教室　赤塚不二夫
後鳥羽伝説殺人事件　内田　康夫
本因坊殺人事件　内田　康夫

平家伝説殺人事件　内田康夫
漂流教室1 時間漂流編　楳図かずお原作　風見潤著
わたしの波乗り日記 Iwasaki　星マリナ
哲学的　南伸坊
ロマンチック・サイエンス　楠田枝里子
友よ、静かに瞑れ　北方謙三
さらば荒野　北方謙三
門茂男のザ・プロレス①力道山の真実　門茂男
宮中歳時記　入江相政編
マンハッタン・オブII.I　矢作俊彦
リモコン・パパ　岬兄悟
たらこ筋肉　渡辺和博
定吉七は丁稚の番号　東郷隆
ロッポンギから愛をこめて　東郷隆
手のうらはいつもフルハウス　久保田二郎
ラブ・ソングの記号学　藤田宜永
積木くずし全二冊　穂積隆信
お前が悪い！　火浦功
楽しみの経済学　堺屋太一
風祭　平岩弓枝
昭和史探訪5終戦前後　三國一朗　井田麟太郎編

知的新人類のための現代用語集　ぱくらはカルチャー探偵団編
自民党―金権の構図　毎日新聞政治部
学校開放文庫 元気印大作戦　青生舎編

角川文庫　最新刊

笹沢左保	T の 複 写	裏切った男への愛と憎しみが紡ぎ出す殺意と謎。傑作長編推理。	490円
平井和正	ウルフガイ魔界天使	魔都と変貌したNY（ニューヨーク）に闘う、不死身のウルフの熱き魂の咆哮！	490円
鎌田敏夫	白い帽子の女	道ならぬ恋をして、浜松から出てきた女性が探偵に!?	420円
赤川次郎	三毛猫ホームズの運動会	警視庁の大運動会。そこへ脱獄囚がまぎれこみ…。傑作短編集。	580円
筒井康隆	霊長類南へ	面白うてやがて悲しきハメツの物語。最終戦争テーマの極致！	380円
志賀貢	やぶ髭（ひげ）物語	北海道の漁師町で患者と共に笑い共に泣く真の名医の診療日記。	420円
田中康夫	感覚の倫理学	康夫ちゃんの眼が捉える、世の中の「本音とタブー」。	260円
草野唯雄	文豪挫折す	国木田独歩を襲った悲劇を繰ったのは誰か？　異色の文芸推理。	460円
眉村卓	夕焼けの回転木馬（メリーゴーランド）	ぼくのなかの記憶だけが独り歩きする―。半自伝的長編！	490円
清水一行	背信重役	社長追い出し―大企業の凄じい権力闘争を描き切る問題長編。	420円

角川文庫　最新刊

西村京太郎	21世紀のブルース	21世紀に生きる若者たちの、恋と冒険を描く長編青春小説。	340円
高木彬光	白雪姫	完全な密室殺人と次の惨劇を予告する警告状に挑む神津恭介！	420円
和久峻三	憑かれた女	色と金、欲望に振り回される弁護士にとんでもない罠が…。	420円
森瑤子	イヤリング	情事の際、忽然と消えたイヤリング。男と女の愛の脆さを描く。	340円
南原幹雄	大奥十八景 上・下	急死した四代将軍家綱の子種を宿す女は何処に？	上340円 下380円
高杉良	生命燃ゆ	画期的な技術開発に生命の灯を燃やした男の鮮烈な生きざま。	580円
赤江瀑	金環食の影飾り	新作歌舞伎を生んだ姉の秘密を探る曙子に妖しい運命の渦が…。	380円
伴野朗	傷ついた野獣	女が自殺した裏には、派手な男関係が…。連作長編推理。	380円
斉藤英一朗	盗賊！T・Tを追え	超グラマー美人に迫られ、徹、あやうし!? 書下し冒険SF。	380円
J・ワイルダー 大村美根子訳	ナイルの宝石	ナイルの秘宝を追って灼熱の秘境に展開する痛快アクション！	460円